

荒川2遺跡
発掘調査報告書

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

あら かわ

荒川 2 遺跡

発掘調査報告書

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



SD 308堀跡完掘状況（東から）



SE 589井戸跡漆器椀出土状況



內耳土鍋



漆器碗

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、荒川2遺跡の調査成果をまとめたものです。

荒川2遺跡は山形県南東部の米沢市に所在します。最上川の源である吾妻連峰や東北地方の脊梁をなす奥羽山脈といった高い山々に囲まれる米沢盆地は、むかし他地域との交通には、険しい峠道を越えなければならなかつこともあり、独自性・孤立性の強い文化が展開された地域です。中世室町時代には伊達氏が本拠を構え、天然の要害をもつこの地で戦国の世を駆け抜け、江戸時代に入つては上杉の城下町として栄えてきたところです。現在では、山形新幹線の開通や道路交通網の整備充実により、山形県の玄関口としての役目を担っています。

この度、国道121号(館山②)道路改良工事に伴い、工事に先だって荒川2遺跡の発掘調査を実施しました。

二カ年にわたる調査では、奈良・平安時代の集落跡や中世の館跡が確認され、多様な出土遺物を得ました。自然地形に沿つて立地する建物や、水脈の変わりやすい土地にあって、水を求めて幾度も掘り直した井戸跡などは、当時の人びとの暮らしぶりに思いを馳せさせてくれるに充分なものがあるでしょう。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な債務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は、国道121号(館山②)道路改良工事に係る「荒川2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　荒川2遺跡(DYZAK-2)　遺跡番号　平成4年度登録

所　在　地　　山形県米沢市塙井町塙野字荒川下

調　査　主　体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

調　査　期　間　　平成7年4月1日～平成8年3月31日（第1次調査）

現　地　調　査　　平成7年7月17日～平成7年11月30日

調査担当者

調査第一課長　　佐々木洋治

主任調査研究員　尾形　典

調査研究員　　須賀井新人

調査研究員　　高桑　登

調　査　期　間　　平成8年4月1日～平成9年3月31日（第2次調査）

現　地　調　査　　平成8年5月8日～平成8年9月27日

調査担当者

調査第二課長　　野尻　侃

主任調査研究員　尾形　典

調査研究員　　須賀井新人

調査研究員　　高桑　登

嘱託職員　　豊野　潤子

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県米沢建設事務所、米沢市教育委員会、東南置賜教育事務所等関係機関に協力いただいた。また出土遺物について四柳嘉章氏(漆器文化財科学研究所)、小野正敏氏(国立歴史民俗博物館)、飯村 均氏(福島県文化センター)、岩田 隆氏(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)、佐藤憲一氏(仙台市博物館)、結城慎一氏(仙台市教育委員会)から御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

- 5 本書の作成・執筆は、須賀井新人、高桑 登、豊野潤子が担当した。編集は尾形典、須賀井新人、飯塚 稔、豊野潤子が担当し、全体については野尻 侃が監修した。

- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測については、国際航業株式会社に委託した。

理化学試料分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。

出土遺物保存処理については、株式会社吉田生物研究所に委託した。

- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S E…井戸跡	S K…土 壤
S D…堀跡・溝跡	S G…河川跡	E B…掘立柱建物跡の各柱穴	
S P…ピット	S X…性格不明遺構	R P…土器・陶磁器	
R W…木製品	R Q…石製品		

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字(I~VII)で表し、遺構の埋積土等について「F」に算用数字を付して区別した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-20° 30' - Eを測る。
- (3) 遺構実測図は、1/20・1/30・1/40・1/60・1/80・1/200・1/250・1/300縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図・土層断面図における水糸レベル標高の単位はmである。
- (5) 遺構実測図・土層断面図において、土器は黒ベタ、木製品は斜線で表示し、また石製品・礫石は網目、焼土は砂目のスクリントーンで表示した。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺物実測図・拓影図は、土器・陶磁器は1/3、木製品・石製品は1/4、金属製品は1/2を基本として採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、1/3を基本としたが、一部は任意の縮尺である。
- (8) 遺物実測図中の古代土器については、土師器が断面白抜き、須恵器が断面黒ベタ、赤焼土器は断面中に●印を付した。また、漆器椀類を除く木製品で炭化部・煤付着部は砂目の、漆付着部は網目のスクリントーンで表示した。
- (9) 土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。
- (10) 遺構観察表・遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。ただし、中・近世遺物観察表においては、推定値を()で、残存値は〔 〕で示し各々区別した。
- (11) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	8
2 遺構と遺物の分布	10
IV 遺構と遺物	
1 縄文時代	13
2 奈良・平安時代	16
3 中世	48
V まとめと考察	
1 調査のまとめ	103
2 中近世出土遺物の検討	105
3 館跡の成立と年代	109
報告書抄録	110

表

表 1 調査工程表	2	表 9 土器・陶磁器観察表(2)	101
表 2 土器観察表(1)	39	表 10 金属製品等観察表	101
表 3 土器観察表(2)	40	表 11 石白観察表	101
表 4 土器観察表(3)	41	表 12 石製品・土製品観察表	101
表 5 土器観察表(4)	42	表 13 漆器観察表	102
表 6 井戸跡・土壤観察表	58	表 14 木製品観察表	102
表 7 古鐵観察表	84	表 15 下駄観察表	102
表 8 土器・陶磁器観察表(1)	100	表 16 中近世遺物点数表	108

挿 図

第1図 地形分類図	3	第34図 S E 133・701・707・780井戸跡	61
第2図 遺跡位置図	4	第35図 S E 23・363・372・589・706井戸跡	62
第3図 調査区概要図	6	第36図 S E 348・542・703井戸跡	63
第4図 遺跡周辺地籍図	7	第37図 S E 340・529・537井戸跡	64
第5図 遺跡層序	9	第38図 S K 106・329・341土壤	65
第6図 遺物分布図	11	第39図 S K 112・114土壤	66
第7図 S K 74・147・239・241・601 604・615・617陥し穴	14	第40図 S D 308堀跡西半部	68
第8図 繩文土器・石範	15	第41図 S D 51・134・308・447堀跡	69
第9図 S E 73井戸跡・S K 96・115土壤	17	第42図 S D 544溝跡	71
第10図 S E 73・S K 115出土土器	19	第43図 S D 97溝跡	72
第11図 S K 103他出土土器	20	第44図 内耳土鍋(1)	74
第12図 S G 21河川跡	22	第45図 内耳土鍋(2)	75
第13図 S G 21出土土器(1)	23	第46図 かわらけ	76
第14図 S G 21出土土器(2)	24	第47図 国産陶磁器	80
第15図 S G 25・435河川跡	26	第48図 国産陶器(1)	81
第16図 S G 435遺物垂直分布図	27	第49図 国産陶器(2)	82
第17図 S G 435出土土器(1)	30	第50図 輸入陶磁器	83
第18図 S G 435出土土器(2)	31	第51図 古銭	84
第19図 S G 435出土土器(3)	32	第52図 金属製品・金属関係遺物	85
第20図 S G 435出土土器(4)	33	第53図 漆器(1)	88
第21図 S G 435出土土器(5)	34	第54図 漆器(2)	89
第22図 S G 435出土土器(6)	35	第55図 木製品(1)	90
第23図 S G 435出土土器(7)	36	第56図 木製品(2)	91
第24図 S G 435出土土器(8)	37	第57図 木製品(3)	92
第25図 S G 435出土土器(9)	38	第58図 下駄(1)	93
第26図 土器組成・分類図	45	第59図 下駄(2)	94
第27図 S T 332・S B 10建物跡	49	第60図 石製品(1)	96
第28図 S B 403掘立柱建物跡	51	第61図 石製品(2)	97
第29図 S B 11・406掘立柱建物跡	53	第62図 石製品(3)	98
第30図 S B 401・404・405掘立柱建物跡	54	第63図 石製品(4)・土製品	99
第31図 井戸跡・土壤分類図	56	第64図 下駄計測部位	102
第32図 S E 728井戸跡・井戸枠	59	第65図 種類別遺物分布図	106
第33図 S E 121・127・336・437井戸跡	60	第66図 遺物組成図(1)	107
		第67図 遺物組成図(2)	108

図 版

- 卷頭図版 1 S D 308堀跡完掘状況
S E 589井戸跡
漆器椀出土状況
- 卷頭図版 2 内耳土鍋
漆器椀
- 図版 1 調査区全景(空中写真)
図版 2 調査区設定他
図版 3 D区遺構検出状況他
図版 4 F区遺構検出状況他
図版 5 S K 74陥し穴完掘状況他
図版 6 S E 73土壤遺物出土状況他
図版 7 S G 21河川跡検出状況他
図版 8 S G 435河川跡遺物出土状況他
図版 9 S T 332竪穴住居跡他
図版10 S B 403掘立柱建物跡他
図版11 S E 23井戸跡完掘状況他
図版12 S E 336井戸跡遺物出土状況他
図版13 S E 589井戸跡遺物出土状況他
図版14 S E 589井戸跡完掘状況他
図版15 S E 728井戸跡遺物出土状況他
図版16 S D 308堀跡掘り下げ状況他
図版17 S D 51堀跡掘り下げ状況他
図版18 S D 97溝跡遺物出土状況他
図版19 横文土器・石瓶
図版20 出土土器(1)
図版21 出土土器(2)
図版22 出土土器(3)
図版23 出土土器(4)
- 図版24 出土土器(5)
図版25 出土土器(6)
図版26 出土土器(7)
図版27 出土土器(8)
図版28 出土土器(9)
図版29 出土土器(10)
図版30 出土土器(11)
図版31 出土土器(12)
図版32 内耳土鍋(1)
図版33 内耳土鍋(2)
図版34 かわらけ・国産陶器
図版35 国産陶器(1)
図版36 国産陶磁器
図版37 国産陶器(2)
図版38 国産陶器・輸入磁器
図版39 輸入磁器
図版40 金属製品
図版41 漆器椀(1)
図版42 漆器椀(2)
図版43 木製品(1)
図版44 木製品(2)
図版45 木製品(3)
図版46 下駄
図版47 石臼・茶臼(1)
図版48 石臼・茶臼(2)
図版49 石製品・土製品
図版50 石製品・古錢

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

米沢市中田地区にかかる国道121号(館山②)道路改良事業計画が県土木部より示されたのは平成4年8月のことであった。これを受けた県教育委員会は同年9月、計画路線内に遺跡存在の有無を調べるために、分布調査(表面踏査)を実施した。この結果、米沢市の遺跡地図に掲載されている周知の荒川遺跡と、その北約200mに奈良・平安時代の土器が散布する別の遺跡の存在が確認され、後者は新たに荒川2遺跡として登録された。

平成6年10月には、県教育委員会がこの二つの遺跡について試掘調査を実施した。その結果荒川遺跡では、若干の土器片が出土したにとどまり、遺跡の中心部は計画路線におよんでいないものと思われた。しかし荒川2遺跡では、多数の遺構と遺物が見つかり、奈良・平安時代の集落跡であることが確認された。遺跡範囲は東西200m、南北250mにわたる約50,000m²と推定され、その主要部分が計画路線内に含まれることが明らかになった。

これらの調査資料をもとに、事業主体である米沢建設事務所と、荒川2遺跡の取り扱いに関する協議を重ねたところ、遺跡にかかる事業区内面積19,500m²について、2カ年にわたる緊急発掘調査を実施することになった。調査は県土木部より委託を受け、事業区域の東半部分7,200m²を平成7年度に、西半部分12,300m²を平成8年度に行うことが決まり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが調査主体となって進められてきたものである。

2 調査の方法と経過(第3図、表1)

〈第1次発掘調査〉

調査対象7,200m²について、農業用水路によって区画される3地域を、北からA区・B区・C区とし、平成7年7月17日から11月30日までの延べ137日間にわたって実施した。

発掘作業に先立ち、計画路線のセンターラインに沿って、5m×2mのトレンチを20m間隔に設け、遺構検出面までの深さや土質、土色などの変化に留意しながら試掘確認作業を行った。調査は、はじめに重機を導入し表土を除去したのち、人手によって遺構検出面までの粗掘り面整理を行った。またこれと並行して、調査区全体にセンターラインを基準とする5m×5mのグリッドを組定し、図面上での方眼地区割りとした。以上の作業はA区→B区→C区の順に進めていき、全体の遺構検出作業は8月下旬に完了した。

9月上旬から手掘りによる遺構精査に入ったが、便宜上作業はC区→B区→A区の順に進めていった。河川跡や溝跡については覆土をベルト状に残し、その他の遺構については半截したのち完掘していく。遺物は、完形品・一括出土品についてのみ登録番号を付け、遺構は遺物を包含するものについて登録したほか、それ以外にも必要であると判断したものについては同様とし、図面作成や写真撮影等の記録保存に努めた。

調査も終盤を向かえた11月10日には、現地で調査説明会を行い、地元の塩井小学校の児童や地域住民の方々をはじめ、大勢の参加者を得た。盛夏から初冬にわたった第1次調査は、後半寒

1 調査の経緯

さと雨雪の悪天候により作業進行が困難であったが、11月末をもって終了した。

〈第2次発掘調査〉

調査対象12,300m²について、第1次調査と同様の理由によりD区・E区・F区として、平成8年5月8日から9月27日までの延べ143日間にわたって調査を実施した。

試掘は、D区とF区については調査区周縁に5m×2mのトレンチを15m間隔で設け、E区については東西方向に4本、南北方向に1本のトレンチを設けて確認作業を行った。

4月の発掘調査に関する事前確認時に、今年度調査区の南端にある農道で、起因の改良工事に付随した先行工事が施行されるため、これにかかるF区南端から北30mの約1,800m²の区域を、早い段階で引き渡すことが、事業主体である米沢建設事務所との協議で決められていた。よって、表土除去、粗掘り、面整理などの作業はF区の南側から行い、F区→E区→D区の順に進めていった。グリッドは第1次調査と同様、計画路線のセンターラインを基準に設定した。

遺構精査はF区の引き渡し部分から取りかかった。当該区域は6月中旬、担当者立ち会いの上で引き渡しを行った。これ以降の作業はE区・F区→D区と進めていった。

遺構検出、精査とも作業方法は同様である。ただF区中央部で検出された広範囲におよぶ河川跡については、人力で掘りきれない部分を重機を使っての作業となった。第1次調査区から統一して検出されていた堀跡は、当初ベルトを残して精査を進め、覆土の状況を確認したのち、ベルトを撤去して完掘した。

9月19日に現地での調査説明会を行い、27日をもって、荒川2遺跡の2カ年にわたる発掘調査を終了した。

表1 調査工程表

月		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
第1次調査	作業内容							
	トレンチ調査							
	重機導入(粗掘)							
	グリッド設定							
	面整理(遺構検出)							
	遺構精査							
	記録(作図写真)							
	写真実測(委託)							
	現地説明会							
第2次調査	トレンチ調査							
	重機導入(粗掘)							
	グリッド設定							
	面整理(遺構検出)							
	遺構精査							
	記録(作図写真)							
	写真実測(委託)							
	現地説明会							

II 遺跡の立地と環境

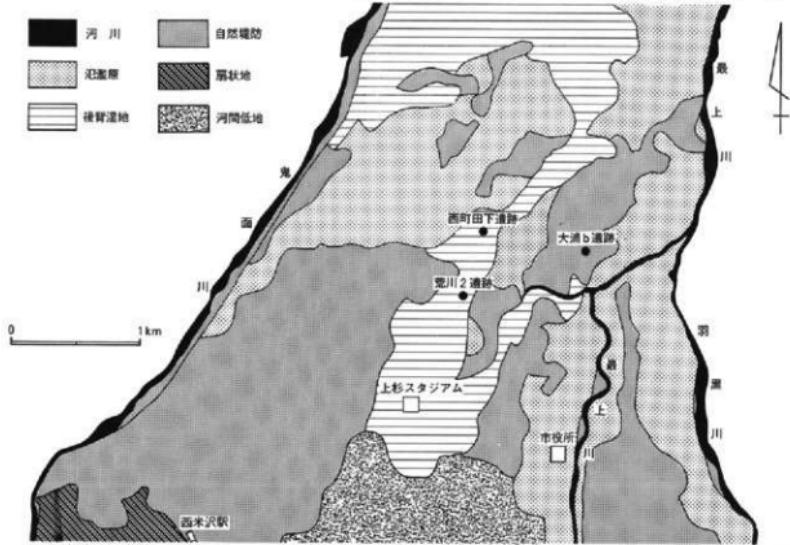
1 地理的環境

荒川2遺跡は、米沢市塩井町塩野字荒川下にあり、米沢市街地の中心部から北方約1.5kmに位置している。吾妻山系に源を発して米沢盆地を北流する松川や堀立川、羽黒川などによって形成された氾濫原に立地し、標高約240mを測る。

米沢市は山形県の東南隅に位置し、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に東を限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画している。これら、東と南に聳え立つ山々が福島県との境をも構成している。

米沢盆地は、これらの山々と、西に広がる低平な玉庭丘陵、そして白鷹山地の南麓によって画され、南部に米沢市、北部に南陽市、中部域に高畠町と川西町が位置している。寒暖の差が大きい内陸型の気候で、県内においても降雪量の多い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの小さな流れは、鬼面川、松川、羽黒川などの河川となり、氾濫原を形成しつつ北流し、やがて合流して最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。荒川2遺跡周辺の地形は、これらの河川によって形成された緩やかな自然堤防の後背湿地にあたり、排水状況が良好とは言えない。地目は水田が主体であるが、宅地や畠地、果樹園などにも利用されている。耕作土は、細粒グライ土壤が大部分を占め、わずかに細粒褐色低地土壤が点在する。表層の地質は、砂および泥からなる未固結堆積物である。



第1図 地形分類図

II 遺跡の立地と環境



第2図 遺跡位置図 (S = 1 : 25,000)

- 1 焼川道路(奈良・平安・中世)
- 2 水町田下道路(奈良・平安)
- 3 西町田下道路(奈良・平安)
- 4 大浦a道路
- (編文・奈良)
- 5 大浦b道路(奈良)
- 6 大浦c道路
- 7 大浦d道路(奈良・平安)
- 8 水沢道路(中世～近世)
- 9 草壁町道路(奈良・平安・中世)
- 10 上谷地前路(中世)
- 11 上谷地c道路(編文～中世)

2 歴史的環境

米沢市には300カ所を超える遺跡の存在が知られている。特に縄文時代の遺跡はそのおよそ半分を数え、河川流域に沿って広範囲に分布している。代表的なものとしては、縄文時代前期初頭の石器工房跡と推定される大型堅穴住居が検出された一ノ坂遺跡や、土偶、岩偶ほか多くの遺物が出土した縄文時代中期に属する台の上遺跡がある。また、八幡原遺跡群・桑山遺跡群では縄文早期から晩期にいたる各期の遺跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、縄文時代との複合遺跡として確認されたものが数カ所存在するにとどまる。

古墳時代には市北東域に戸塚山古墳群が築かれた。戸塚山一帯には古代から中世にかけての遺跡も多く、廃寺跡、塚群など仏教や修験に関わりをもつ遺構が分布している。

奈良・平安時代の遺跡には、大浦遺跡群と笹原遺跡があげられる。大浦遺跡群(第2図4~7)は置賜郡衙とも捉えられており、布目瓦や具注唇の漆紙文書が出土している。大浦遺跡群の北1kmのところにある笹原遺跡では、木簡や墨書き土器、円面鏡が見つかっていることから、古代置賜六郷の一つ「広瀬郷」とする見解もある。荒川2遺跡の北500mに位置する西町田下遺跡(第2図3)でも円面鏡が10点出土しており、7世紀後半から8世紀前半の集落跡と判断される。同遺跡では南北には幅6mの道路跡が検出されているが、その走向方向や荒川2遺跡との時期からいって、この道は荒川2遺跡付近を通っていたことが推測できる。さらに荒川2遺跡の南200mには、塙井神社周辺を範囲とする荒川遺跡(第2図2)があることも考慮すると、これらの集落を結ぶ道路であったとも考えられる。さらに大浦、笹原、西町田下の各遺跡は、荒川2遺跡の北東および北2km範囲に所在していることから、近似する時期におけるなんらかの関わりがあったことが想像し得る。

荒川2遺跡では中世の城館跡が見つかっている。漆器椀、国産陶磁器、中国陶磁器をはじめ当時の有力者の居住を裏づける遺物が目立って出土している。

古代末・中世置賜地方の城館は、平安末の在地土豪による方形館、鎌倉から南北朝期にかけての長井氏による城館、戦国期における伊達氏による城館というように、在地領主の交代に伴って、さまざまな様相をみせる。

中世に入ると、鎌倉時代の武将大江広元の二男時広が長井庄の地頭として、暦仁元(1238)年米沢に居城を構えたと伝えられるが確証はない。その後大江氏は長井氏を称して、8代約200年におよぶ支配を続けたが、天授6(1380)年伊達宗遠八代の侵攻によって長井氏は滅び、置賜地方は伊達領となった。しかし、十五代晴宗が当主となって米沢城に移るまでは、高畠が置賜支配の中心であった。米沢を本拠とした伊達の治世は輝宗・政宗と続き、1591年に政宗が岩出山へ移封となるまでの210年間にわたった。

米沢市に存在する中世城館跡は200カ所以上とされているが、築城者や築城時期の不明なものも多い。東屋敷遺跡(第2図9)では最大幅3m、高さ2mの土壘が北側と西側に90m残っており、これに沿った水堀も存在する。有力な在地豪族の居館と考えられるが詳細は不明である。上谷地館跡(第2図10)は後世の開墾等により削平、破壊が著しくこちらも詳細は不明である。

II 遺跡の立地と環境



第3図 調査区概要図 (S = 1 : 2,500)

第4図 遺跡周辺地籍図 (S=1 :3,600)



III 遺跡の概観

1 遺跡の層序（第5図）

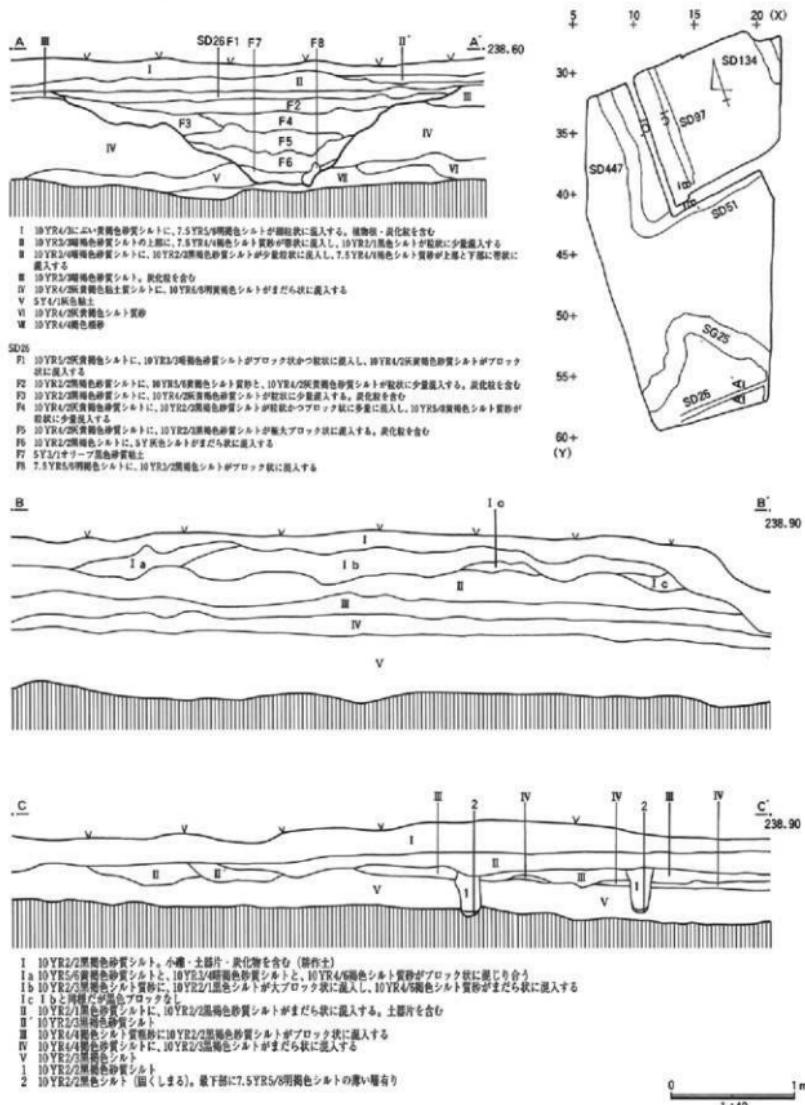
米沢盆地を取り囲む東・南・西の三方の山地帯から流れ出した水脈は、市の中央部から北部にかけての一帯に米沢扇状地群を形成している。荒川2遺跡の所在する塩井地区は、東を流れる最上川と、西を流れる鬼面川との河間低地上に立地している。現在は沿岸工事や堤防建設によってその河道は安定しているものの、調査区内において蛇行する4条の旧河道が検出されたことから考え、この地に奈良・平安時代の集落が営まれていた当時には、流路を変えつつ多くの河川が存在していたことが想定できる。

遺跡を覆う表層の土質は褐色低地土壤、一部が細粒グライ土壤である。調査区内の地目は、B・E区が周辺より一段高いため畑地として利用され、その他は水田となっている。この畑地と水田部では堆積層位やその状況が異なるため、各々についての基本層序を概述する。

第5図A-A'は奈良・平安時代に掘り込まれたSD26溝跡にかかる土層断面で、水田地における堆積層序を観察したものである。層位はI～VII層に分かれる。耕作土(I層)下の暗褐色を呈するII層は旧地の耕作土と考えられ、現水田の基盤層となっている。SD26はこの直下より掘り込みが始まっており、III層上面が当時の生活面と認識されるが、遺構覆土との識別が難しくこの面での遺構検出は困難である。表土下約40cmでグライ層となるIV層は、全体に厚く堆積する粘質土層で、遺構検出面となった地山である。IV層以下ではSD26を境として北側に砂の堆積層(VI・VII層)が認められる。これはその北側を流れる旧河川SG25が影響していると考えられ、かつてはこの区域も河道の一部であった可能性が指摘される。

周辺より一段高い畑地は第1次調査の結果、中世の館跡主郭部にあたると判断された。この館跡の土壘を確認する目的で、E区に土層観察用のベルト(B-B'・C-C')を設定し、併せて遺跡の基本層序を観察した。層位は5層に分かれ、I層耕作土、II層が中近世の遺物包含層である。断面観察により、館跡に付随するSD97溝跡がIII層上面から掘り込まれるため、この層位を中世の生活面と判断することができる。IV層は漸移層、V層直下が遺構検出面の地山となるため、V層は奈良・平安時代の生活面および绳文時代の遺物包含層と捉えられる。またB-B'断面において、II層直上に人為的な搅乱層(Ia～Ic)が認められる。SD51堀跡に伴う土壘の痕跡かとも思われたが、中世の遺物包含層と認識できたII層上面に堆積することから考えても、館跡に付随するものではなく、現況用水路施設に伴う掘削土と見られる。

さらにD区検出の井戸跡・土壤において、その掘り方周壁で検出面以下の堆積層序を観察した。この区域の遺構検出面であるIV層(褐色シルト層)以下、V層：黄褐色粘土層、VI層：砂層、VII層：砂礫層、VIII層：粗砂層という堆積過程が確認された。これらの層序は一様に堆積するものではなく、区域によって層位や厚さが顕著に異なる状況を呈している。その要因として、旧地形が起伏に富んでいたことや旧河川の氾濫等が考えられよう。



第5図 遺跡層序

2 遺構と遺物の分布（付図、第6図）

2カ年、19,500m²の発掘調査で検出された主な遺構は、堀立柱建物跡7棟、河川跡4条、堀跡4条、溝跡46条、土壙約500基などであるが、とりわけ井戸跡については約180基が確認されており、調査面積との割合から言っても非常に多い。遺構の分布状況は、堀で囲まれたB区・E区とその北側のA区・D区に密集している。主な遺物は土師器、須恵器、中近世陶磁器、漆器椀ほかの木製品、石臼ほかの石製品など、整理箱にして総計86箱を数える。遺物は調査区全域にわたって分布しているが、出土数ではF区がもっとも多い。遺構については付図（遺構配置図）、遺物については第6図遺物分布図を参照されたい。

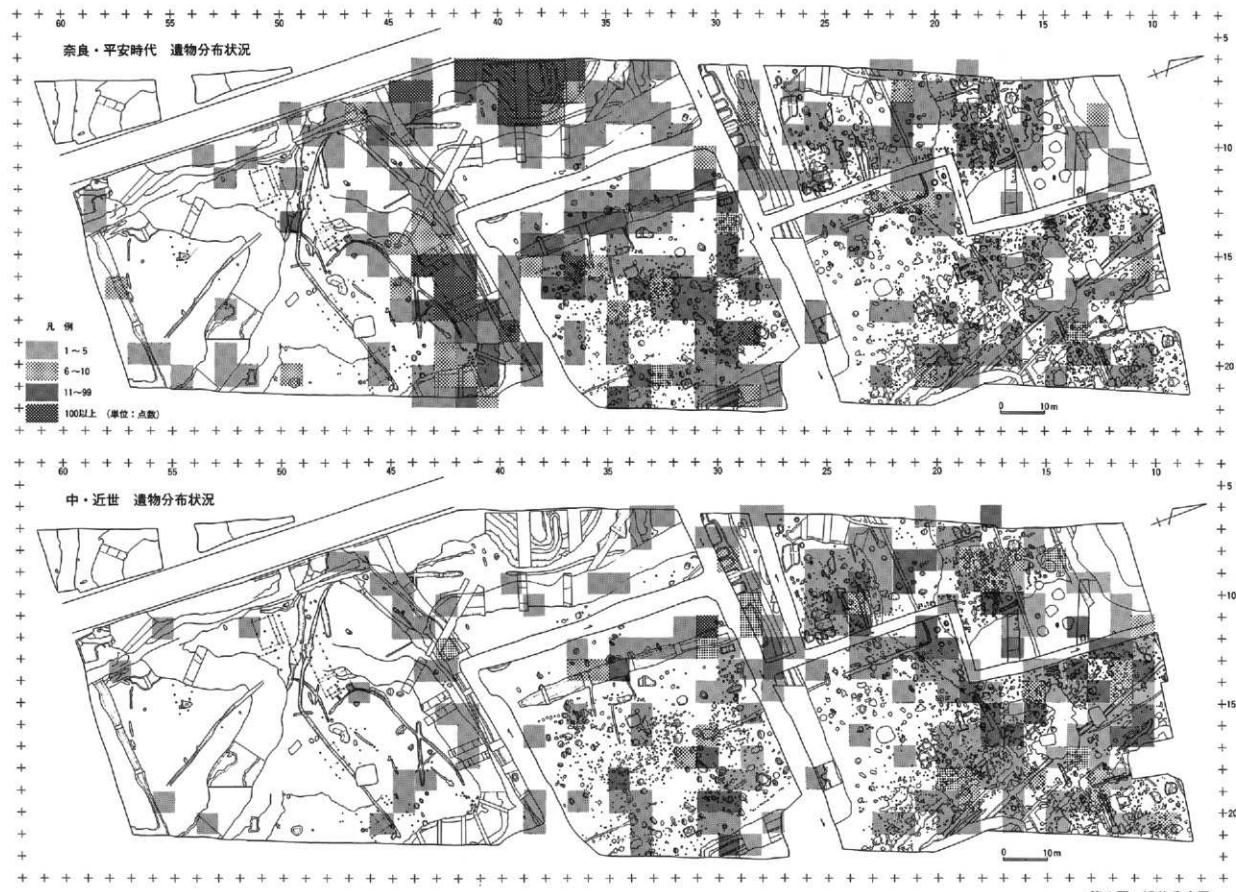
遺構に関しては後述のとおり井戸跡が特筆される。C区1基、F区2基、E区無し、B区19基が検出され、残る150基余りはA区・D区への分布となっている。出土する遺物から、そのほとんどが中世に掘られたと言えるが、これほど多くの井戸を掘らなければならなかつた理由について少し考えてみたい。

奈良・平安時代にこの辺りを流域としていた河川も、中世になると流路が変わり、この付近では旧河道の上が生活の場として使われることになった。D区中央から南側にかけて、旧河道に掘り込まれたいくつもの井戸跡が、その様子を物語っている。当時の地下の土壤は、度重なる氾濫で、粘土層と砂礫層の堆積不整合が形成され、滯水層が安定せず、地下水脈の移りやすい土地であったと考えられる。井戸跡が多く検出されることの背景には、こうした後背湿地の移り変わりやすい滯水層を求めて、少しづつ場所を変え、絶えず掘り返していたことを物語っているのではなかろうか。

これよりその他の遺構の分布を述べていく。F区南域を蛇行して流れる河川跡は、再度F区最西部6-35~8-46グリッドで検出されている。D区南西部から北東部にかけて検出されている河川跡も、この続きと思われる。A区では北西-南東にのびる溝跡がいくつかある。陥し穴は45基が見つかっている。このうちE区では9基がまとまりをもつ分布をしている。堀立柱建物跡はF区中央部の河川跡間の比較的高い場所に認められる。

次に遺物の分布であるが、前述のF区最西部河川跡からは一括出土の登録遺物（須恵器・土師器）120点余りが、層ごとの分布を見せていた。F区北東部のS G21でも多数の出土があった。奈良・平安時代の遺物は、集中箇所はあるものの全域で確認されている。中世遺物についてはE区 S D97の北端で内耳土鍋が大量に出土している。かわらけはB区19-30グリッドのS E121で7片出土しているが、分布はA区中央部とD区南半部に多く見られ、C区・F区では2つのグリッドからわずか3片しか出土していない。陶磁器はA区・D区に多いが、堀跡・溝跡からの出土が目立つ。木製品は約80%がA区・D区に、またその内の85%が井戸跡に分布している。D区 S E589からは漆器椀が5点一括的に出土した。石製品は石臼1点のみがF区からの出土で、他は全てS D51とS D447の北側調査区に分布している。金属製品についても同様と言える。

以上より、奈良・平安時代と中世では、遺構と遺物の明確な分布の違いがみられる。総じて、奈良・平安時代は調査区の南側を、中世以降は北側を中心とした広がりをもつものと推測される。



第6図 遺物分布図

IV 遺構と遺物

1 繩文時代

(1) 検出遺構 (第7図、図版5)

繩文時代の遺構には、橢円形のプランから垂直に掘り込んで底面に円筒状のビットを有する「陥し穴」がある。これらは45基検出されており、分布状況からある程度のまとまりとして捉えられるが、配列を成す一群は調査区中央部の12-32-36グリッド上で南北方向に並ぶ4基を認めるだけである。ここでは、陥し穴の形態・規模・長軸方向、遺構群の立地・配列・用途・時期等について記述する。

形態 平面形は円形・橢円形・隅丸方形を呈する。周壁の掘り方には、底面までは垂直に掘り込まれるもの、途中に段を形成し上端に向けやや開くもの、一方向にオーバーハングするなどの形態が見られる。底面中央部には円筒状のビット1穴を有する。これらの陥し穴は底面の形態から以下の3類に分類される。

1類：長橢円形を呈するもので、底面がほぼ平坦なa(SK147等)と底面両端部が窪み状に落ち込むb(SK601等)、底面に起伏を有するc(SK604)がある。

2類：長方形を呈するもので、底面がほぼ平坦なa(SK74-241等)、底面に傾斜を有するb(SK239等)、底面が丸底となるc(SK617)に細分できる。

3類：略円形を呈し、底面がほぼ平坦なもの(SK615)。

規模 45基の陥し穴は、プラン検出長102~190cm、幅40~132cm、深さ70~113cmを測る。規模の大小は形態に関連していると思われる。底面ビットは径10~30cm、深さ20cm前後である。

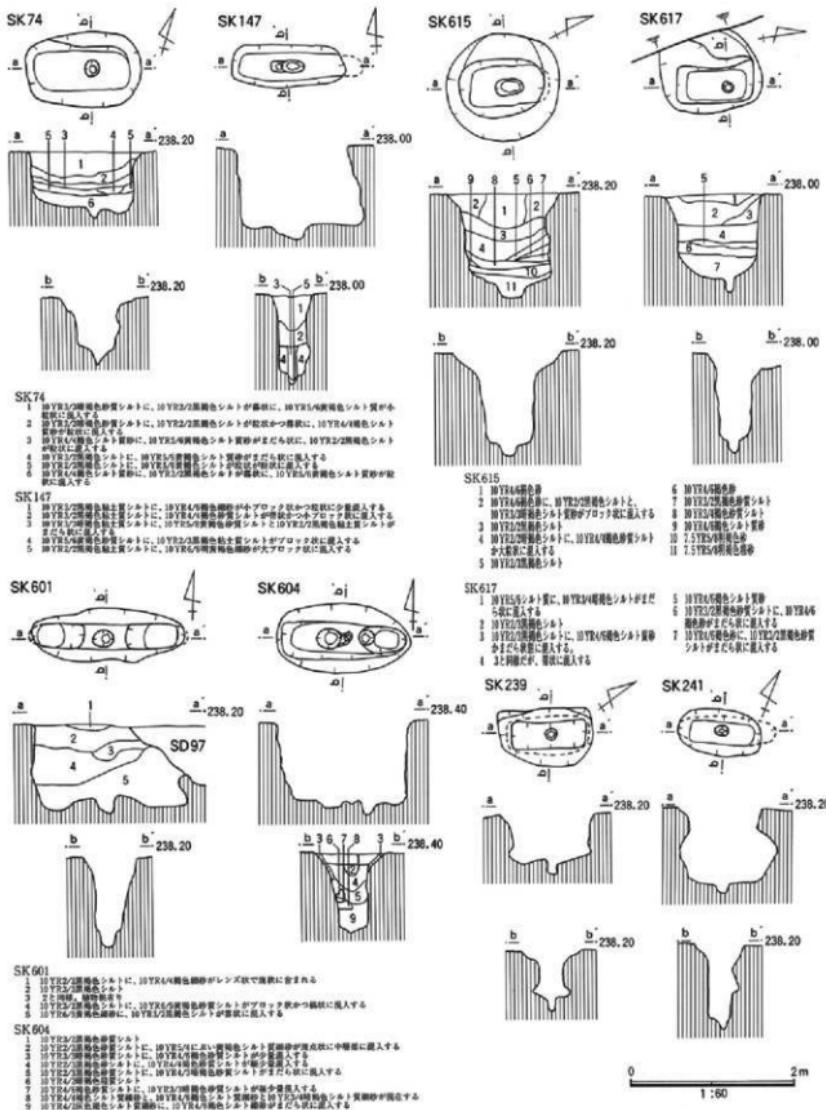
長軸方向 各陥し穴の長軸方向を磁北を基準として計測した場合、3大別することができる。すなわち、74°~90°を測り磁北に直交する向きの一群と、40°~55°の角度をもって磁北に斜交する一群、それに20°以内の振れで磁北と平行する向きの一群である。大半が直交する向きでの構築であり、当時の地形に影響されたものと考えられる。形態との相関関係は一概ではないものの、1類に分類した遺構はすべて長軸方向が磁北に直交していることが窺える。

立地 従来陥し穴は、丘陵地の緩斜面や尾根で多く検出され、付近に谷地形や湧水のあることが立地条件とされてきた。遺跡周辺の地形は平坦地であるが、最上川や鬼面川の後背湿地部にあたり、古來から湧水に恵まれていたことが指摘できる。

配列 配列を構成する陥し穴群は、SD97溝跡西側に位置する4基(SK601~604)である。これらは5~6m毎ほぼ等間隔に配置されており、配列中心線が南北方向の直線となる。さらにこれら4基の陥し穴の長軸方向は、いずれも配列中心線に対して直交する向きに構築されている。その他の配置状況では、2基1対で構成されるような遺構群が所々に存在するが、規則性は認められない。

用途 検出された陥し穴群の使用法については、「けもの道」に配列して構築することにより偶然動物が落ちるのを待つ方法と、構築した場所に動物を追い詰めて追い落とす方法の2通りが考えられる。本遺跡の場合は遺構の分布や配置から想定すれば、配列は一部に限られ、広範

IV 造構と造物



第7図 SK 74・147・239・241・601・604・615・617陥穴

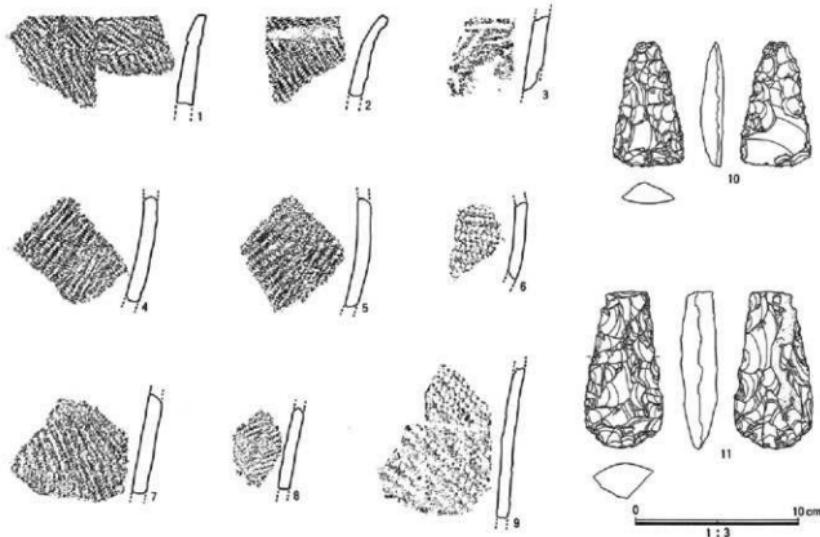
間にわたって構築されていることなどから、後者の可能性が推測されよう。

時期 陥し穴どうしの重複が1カ所で認められることから、これらの構築や機能時期には時間的差異が当然のこととして考えられる。しかし、造構内の出土遺物がSK604を除いて皆無のため、遺物から年代差や一時期の構築・機能数を探るのは不可能である。また、形態や規模等の検討内容から明らかにすることも難しい。したがってここでは、SK604出土の縄文土器とその周辺の包含層より出土した土器から、概ね縄文時代中期末葉の所産と捉えておく。

(2) 出土遺物 (第8図、図版20)

縄文土器 調査B・E区の包含層や造構覆土中から計16点出土している。斜行縄文や撚糸文を有する文様帯を持たない深鉢形土器の口縁部や体部片であるが、いずれも破片資料のため全体の器形は解らない。したがって時期を明確に判断できないが、口縁部形態等から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。図示した9点の内、1は口縁部に横位のRL縄文、頭部以下が縦位のLR縄文が施文される。2は口縁部に磨消縄文、3には押圧した撚糸文が施される。

石器 フレイクを含め34点の打製石器を採取したが、いわゆるtoolとして確認できたものに2点の石箇がある。素材となった剥片の背面と主要剥離面の両方に加工され、その長軸の末端が刃部と考えれる石器である。10は平面形が撥形の形態で、刃部が片刃状のものである。素材の背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が成される。刃部は直線状となり、先端部に浅い加工が認められる。11は撥形で刃部が両刃状となるものである。両面加工であるが片面に自然面を残し、刃部は丸味を帯びている。



第8図 縄文土器・石箇

2 奈良・平安時代

(1) 検出遺構 (第9図、図版6)

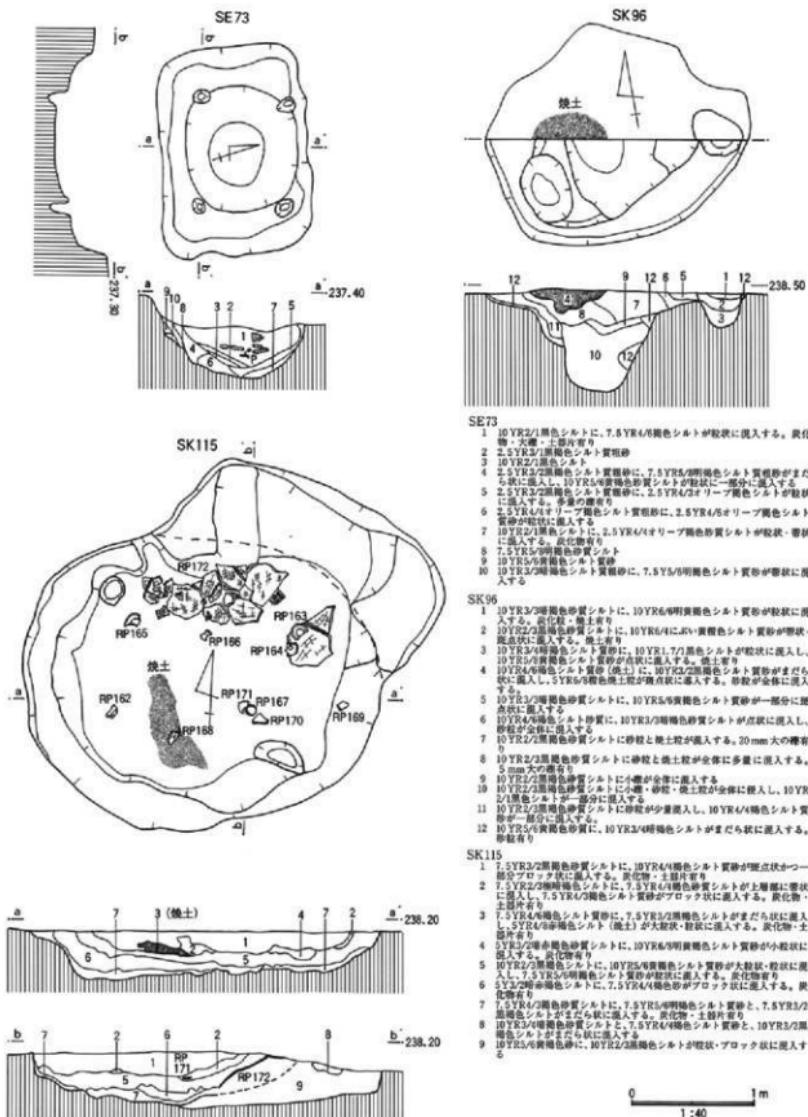
当該期の遺構の種別、その分布状況は前述したとおりである。ここでは、遺構内より一括した遺物が出土したものを中心に、形態や堆積土等についてその概要を記す。

S E 73 第1次調査時にC区北端部の18-39グリッドにおいて、S D51堀跡の底面で検出した井戸跡である。確認できた平面プランは隅丸長方形を呈し、東西径172cm、南北径120cmを測る。溝底面からの深さは40cm程であったが、掘り込み面からの深さは約110cmを測る。したがって、残存するのは全体の約3分の1にあたる遺構下半部である。底面中央部が円形状に落ち込む掘り方により、断面形は船底形を呈する。底面には径約15cmを測るピット4基が方形状に確認され、中央部の丸い落ち込みを囲んでいる。すなわち、ピットは井戸幹隅柱の痕跡と考えられ、中央部の落ち込みは水溜のため掘られた窪地と推察される。覆土は黒色を基調としたシルトや砂が自然堆積の様相を呈し、その堆積状況から判断して、遺構が廃棄された段階で隅柱のみを残し井戸幹は抜き取られたと思われる。検出面となったF1層中からは、土器や拳大の礫が投げ入れられた状態で隅柱内側にまとまって出土している。これら出土土器より井戸跡の廃絶時期は8世紀後葉と考えられ、構築年代はさらに遡る。

S K 96 B区南西部15-36グリッドで検出した、平面形が不整な隅丸方形を呈する土壙である。東側で切り合いを有する柱穴状の遺構と重複するため、この部分が張り出す形態となり東西210cm、南北170cmを測る。土層断面観察の結果、東西方向の半截ライン上で3基の重複関係が確認され、土層堆積状況により東側から順に新しい掘り込みと判断できる。また、底面には他にもピット状の落ち込みが見受けられることなどから、プラン確認面で識別できなかった別の重複関係も考えられる。深さは遺構中央部で83cmを測り、周壁には段が形成される。遺構検出面において、土壙ほぼ中央に焼土の広がりが円形状に認められる。遺物は焼土直下のF8層より土師器の壺片が9点出土しているが、いずれも細片で復元・図化できない。

S K 103 B区南西部15-36グリッド上、S K96より南東約3mの地点に位置する。検出プランは長径約70cmを測る楕円形状を呈したが、完掘状況から2基のピットが南北方向で8の字状に連続した遺構であることが解った。確認面からの深さは北側50cm、南側で42cmを測る。覆土は暗褐色を基調とするシルトと砂に分かれ、全体に焼土をブロック状に含んでいる。遺物は覆土中位より土師器壺片が多く出土しており、これらから8世紀中葉の時期が考えられる。

S K 115 B区北辺部、18-27・28グリッドで検出された大形の土壙である。平面形の規模は東西径290cm、南北径240cmの楕円形を呈すると思われるが、北東部において検出面の土色変化が不明確であったため、一部をオーバーハングして完掘している。確認面からの深さは30~46cmを測り、底面にはやや起伏がある。周壁は比較的緩やかに掘り込まれ、途中に段を形成する部分が見受けられる。覆土は暗褐色シルトを基調として、基本的に4層に分かれる自然堆積である。また遺構ほぼ中央部では、厚さ8cm程の焼土塊が第2層(F5)直上で確認された。出土遺物は底面に密着したものはなく、覆土内からの出土のみであるが、土器の特徴から本遺構に与えられる年代は9世紀前葉~中葉である。



第9図 S E73戸跡、SK 96・115土壤

(2) 出土遺物 (第10・11図、表2、図版21・22)

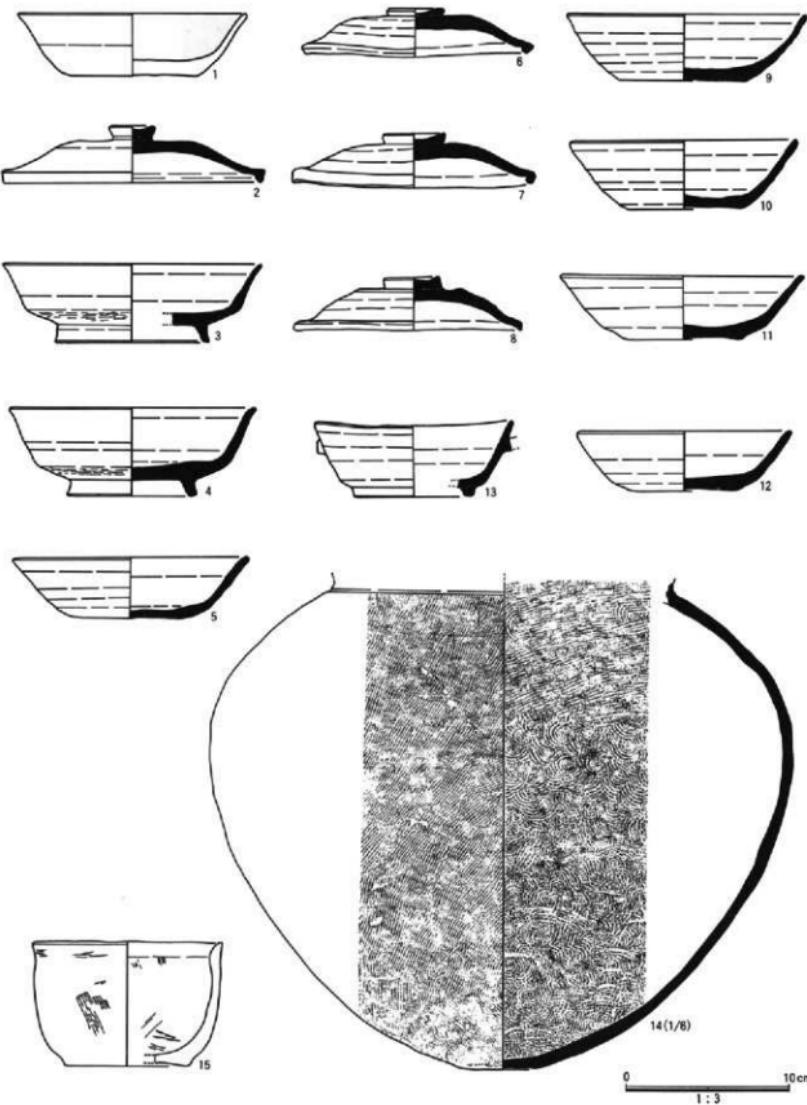
奈良・平安時代の遺物は、その大半がSG21・435等の河川跡から出土している。これらは後述することとし、ここでは主に遺構内出土の遺物について、図化したものを中心に取り扱う。

第10図1～5はSE73井戸跡から出土した土器である。遺構内からは土師器壺片17点と内面黒色処理の壺1点、須恵器蓋・壺・高台付壺・壺・横瓶などの破片25点が出土している。この内、図化できたのは5点の供膳具である。2の須恵器蓋も含め、底部切離はすべてヘラ切りで行われる。1はロクロ使用の黒色土器壺であるが、二次焼成を受けているため内面の黒色処理・ミガキ痕ともほとんど失われている。2は天井部が平坦な台形様の須恵器蓋で、口唇部が直立する器形である。中心部が若干突起するが全体に窪む鉢を有する。3・4は体部下間に回転ヘラケズリによって成形した稜線を有する、一般に「稜塊」と呼ばれる形態の有台壺である。これらの特徴から、8世紀第4四半期に属する土器群と考えられる。

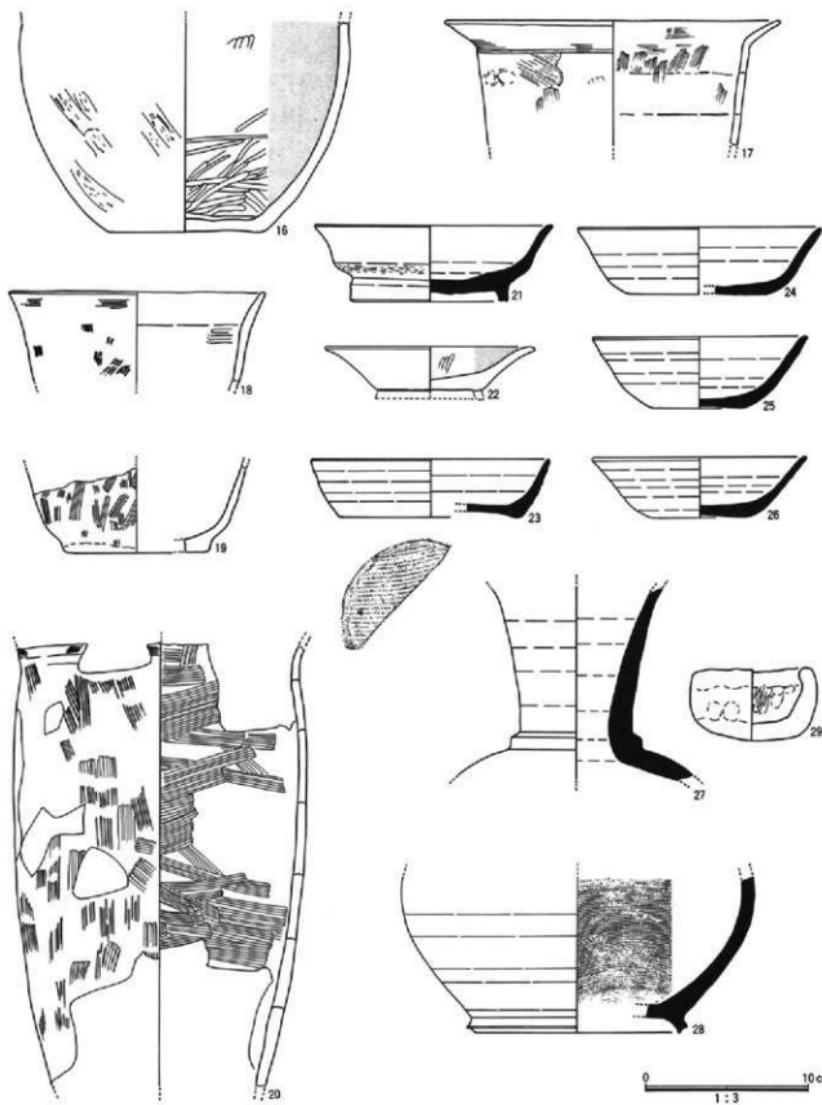
6～16はSK115土壤より出土した土器群である。遺構内からは土師器壺71点とロクロ使用の黒色土器壺・壺が9点、須恵器蓋・壺・高台付壺・壺・壺など55点が出土している。6・7の蓋は、中央部に窪む径の大きい扁平な鉢が付き、口唇部が内側に反る器形を呈する。8は肩が張り口径が小さい。9～12の須恵器壺は、底部切離手法の相違から2大別される。ヘラ切りの9は、底部からやや内弯気味に立ち上がって口縁に至る。10～12は回転糸切りの壺である。10は器高が高く、他の壺に比べ容量が大きい。体部は直線的に外傾する。11・12は体部下端がやや丸味を帯びて立ち上がり、11の口縁部は僅かに外反する。13は双耳の把手が付く小形の有台壺である。底部欠損のため切り離しは解らない。14は最大径716mmを測る丸底の須恵器大壺である。頸部以上が失われているが、胴部上半で最大径を測る。外面には平行タタキ目の上から、横方向のハケ目が上半部に施される。内面は最大径上半で平行アテ痕、以下に青海波アテ痕が認められる。15は内外面ともハケ目調整を施した小形壺である。口縁部が僅かに屈曲して開き、口縁部で最大径を測る。16はロクロ使用の黒色土器壺の胴部～底部資料である。外面に斜め方向のヘラケズリ痕を残し、内面は連続したミガキによって調整される。これら出土土器は、須恵器蓋・壺の特徴から9世紀第1四半期後半～第2四半期と考える。

SK103土壤からは土師器を主体として97点の土器片が出土している。内訳は土師器壺85点、黒色土器壺5点、須恵器壺が7点である。18は口径156mmの中形壺で、頸部が屈曲せず開く器形を呈し最大径を口縁部に有する。19は底辺部に膨らみをもつ壺の胴部下半資料である。20の長胴壺は外面縦方向、内面横方向のハケ目調整が見られる。21はプラン検出面で出土した須恵器稜塊である。底部に丸味をもち、口縁部が大きく外反する。これらの土器に与えられる年代は、量的割合も加味し8世紀第3四半期に比定したい。

その他の遺構や包含層より出土した遺物は、量的まとまりを持たないものの概ね8世紀中葉から9世紀後半にかけての土器群である。実測掲載できた遺物(22～29)の内、23は静止糸切り手法による底径の比が大きな須恵器壺であり、8世紀第3四半期に位置付けられる。25・26の回転糸切り壺は、口径に対する底径の割合が小さくなることから9世紀第2～第3四半期の所産と判断され、27・28の長頸壺などもこれらに併行すると考えられる。



第10図 S E 73・S K 115出土土器



第11図 SK 103他出土土器

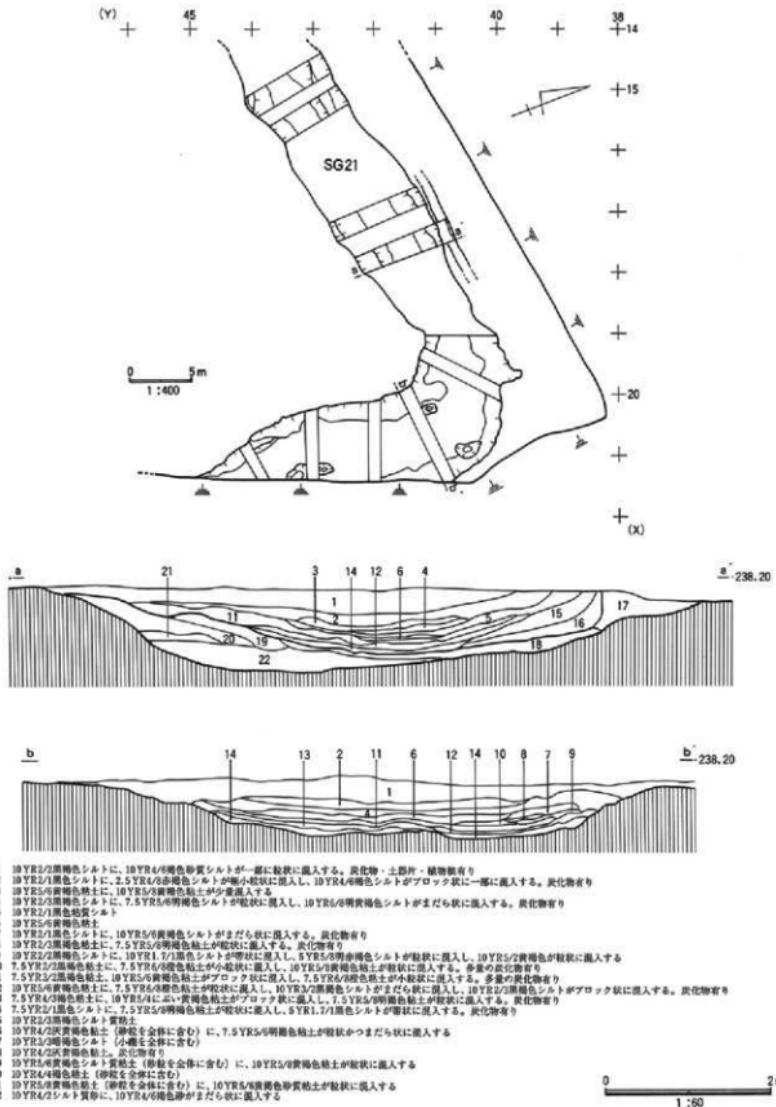
(3) SG21河川跡と出土遺物 (第12~14図、表2・3、図版7・21・22)

調査C・F区の北側をコの字状に蛇行する形で検出された旧河川跡である。調査区東側では川岸の稜線が地山の黄褐色土層と明瞭に区別できたが、中央部付近は土色変化に乏しく岸の稜線が不明確になる。これはこの付近一帯の基盤が砂質であることから考え、河川が氾濫した可能性が指摘される。検出最大幅8.3m、南から西への蛇行部で幅が最も狭くなり4.5mを測る。

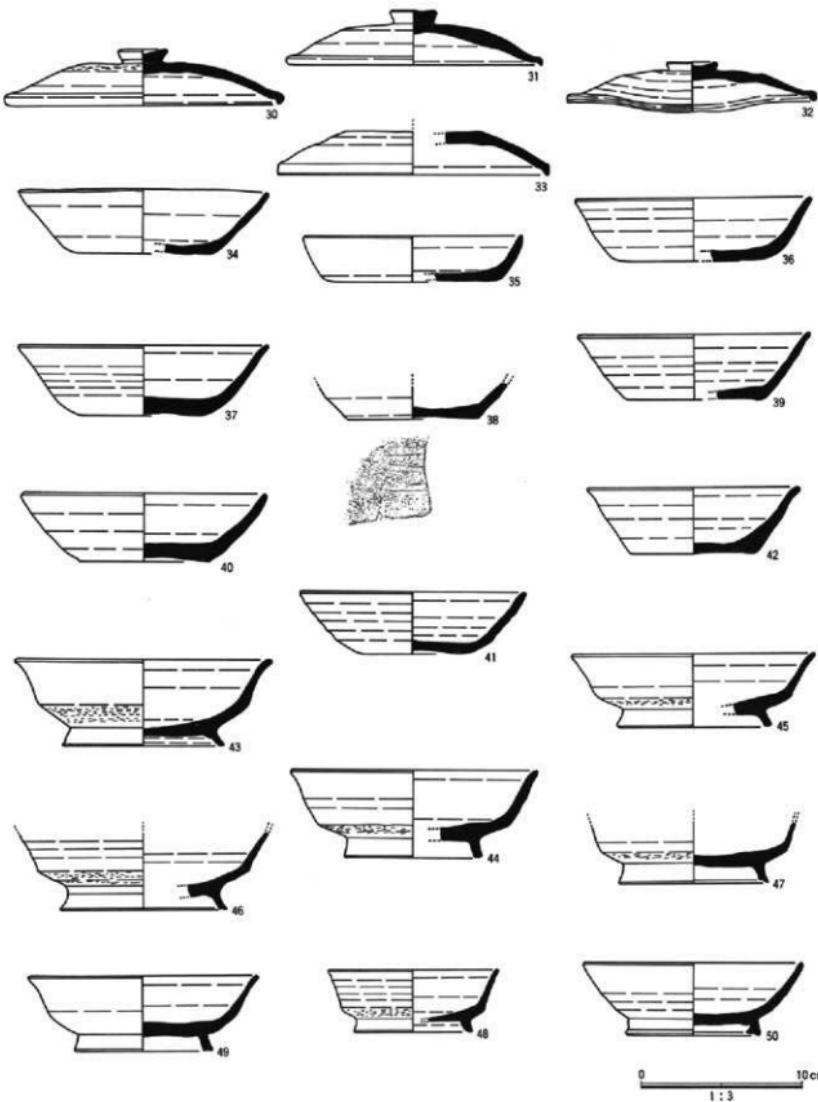
1次調査(C区)では断面観察用のベルトを残してほぼ完掘したが、2次調査時(F区)には河川にかかる幅2mのトレーナーを5本設定して掘り下げた。川底は窪地状に大きく落ち込むカ所があるので、全体的には小さな起伏や緩い傾斜が付く程度では平坦に推移する。川底までの深さは検出面より60~100cm、最深部で130cm余を測る。覆土は22層に及ぶが、土質や堆積状況から大きく3つの時期に区分される。すなわち、I期：この河川が本来の機能を果していた時期での堆積層(F18~22)で、遺構検出面で捉えた川岸より広い川幅であった時期。II期：黒褐色粘土(流水期)と黄褐色粘土(止水期)の互層(F3~16)で、洪水や氾濫によって河道や流速あるいは水量等が徐々に変化し、河川としての機能が低下していった時期。III期：炭化物を多く含んだ腐植土の堆積層(F1~2)で、河川がほぼ埋没した時期である。この内、遺物が出土するのは最上層の腐植土内に限られ、他の堆積土中に遺物は含まない。遺物分布状況では、調査区東側の河川跡蛇行部に集中する傾向が窺え、上流や周囲より流れ込んで河道内に堆積したものと思われる。

本河川跡からは、主に奈良時代後半~平安時代前半に帰属する土器群がまとまって出土している。数量的内訳は土師器の煮沸具980点、須恵器の供膳具・貯蔵具794点、黒色土器の供膳具・煮沸具597点などである。これらの土器群の特徴は、須恵器壺の底部全面に手持ちヘラケズリ調整を施す一群の存在、須恵器稜塊の一括的な出土、若干例ながら4世紀後半に遡る古式土師器の壺が紛れ込むことなどが挙げられよう。また、須恵器壺類におけるヘラ切りと糸切りの割合が8:2であることを付記しておく。完形で出土したものは1点もなく大半が細片のため、図示した土器群は須恵器供膳具を中心にごく一部の資料に限られる状況となっている。

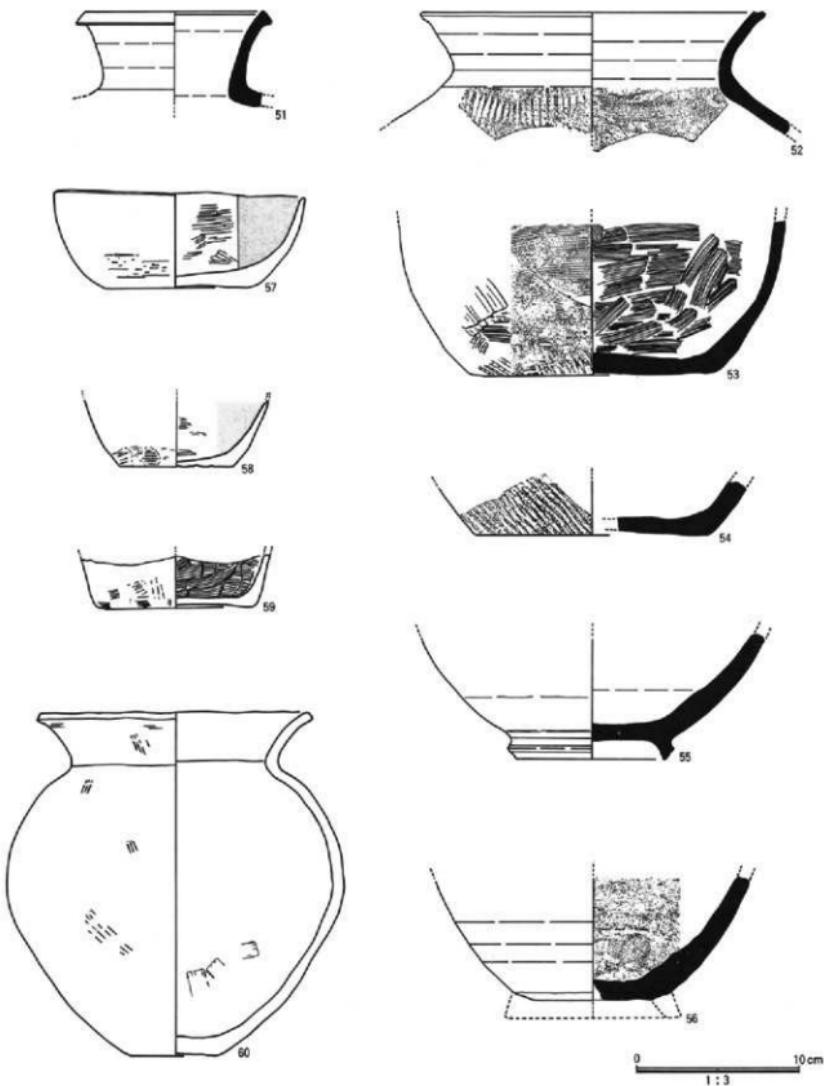
第13図は須恵器蓋・壺・高台付壺の供膳具である。蓋(30~33)は鋤が中央部に窪む形と扁平な形があり、天井部に回転ヘラケズリを施すものや大きく歪むものが見られる。壺(34~42)は、体部下端に僅かな丸味を持って直線的に外傾する形態のものが多い。器高が低く内弯した体部形態で口径に対する底径の比率が最も大きい35は、これらに先行する器形である。底部切離と調整の有無等では、ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整(35・38・39)、ヘラ切りナデ調整(34・36・37)、回転糸切りナデ調整(42)、回転糸切り無調整(40・41)がある。図示した高台付壺(43~50)はヘラ切り手法によるもので、43~48は稜塊である。43は口縁部が強く外反し、底部には回転ヘラケズリ調整が施される。48は器高の比が高く小形の形態を呈する。第14図54の須恵器壺は底部に外面同様の平行タキ目が認められる。57は体部下半に回転ヘラケズリを伴う大振りな黒色土器壺である。以上の内容から、帰属年代は8世紀中葉から9世紀第1四半期頃までの約70~80年間に亘る土器変遷と捉えられる。また、球形腔を呈する古式土師器壺(60)は4世紀後半の塩釜式III-2期頃に比定されよう。



第12図 SG21河川跡



第13図 SG21出土土器(1)



第14図 SG 21出土土器(2)

(4) SG25・435河川跡と出土遺物(第15~25図、表3~5、図版8・23~31)

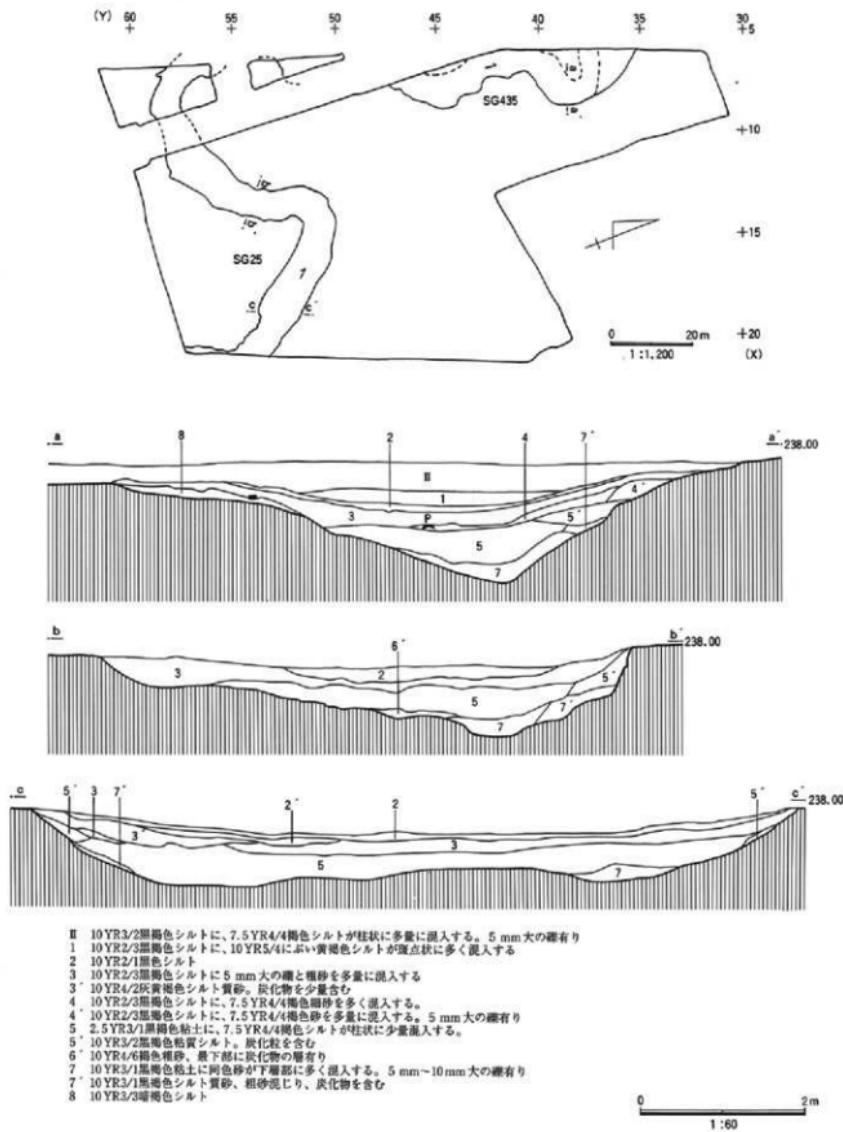
調査C・F区の南側と西側を、大きな蛇行を繰り返しながら北西方に向かって流れる旧河川跡である。調査区南側を東から西へ横断する河道をSG25とし、F区北西辺を南から北へ継続する河道をSG435とした。市道によって調査区が分割されるため途中一部を分断する形となるが、河道の経路や土層の堆積状況等から判断して2条の河川跡は連続すると見なされ、SG435はSG25の下流にあたると考えられる。河川幅約7~10m、検出延長150m余を測る。

調査では各所にトレンチを設定して川底まで掘り下げ、堆積土の状況を記録しながら遺物の有無を探った。その結果、SG25は遺物をほとんど含まないことから、一部で流路に沿ってトレンチを拡張し、川底の地形を確認する精査に留めた。一方、SG435は北側の蛇行部において完形品を含む多量の土器が出土し、層序毎の取り上げが可能であったので検出された面積はほぼ完掘している。覆土は河川跡全域に堆積するF2・3・5・7と、部分的な範囲で堆積が認められるF1・4・6の7層より形成され、その基本となる層序はSG435で確認できた(第16図土層断面図)。この区域においては、覆土直上に堆積する水田基盤層(Ⅱ層)から多くの土器片が出土している。F1はSG435の北側でのみ堆積するシルト層、F2は全域で見られる薄い腐植土層であるが遺物をほとんど含まない。F3は10~30cmの厚さで全域に堆積するシルト層で遺物出土量が多い。最も多くの遺物を包含する砂質層のF4はSG435蛇行部に分布しており、この時期に洪水によって上流や周囲より多量の遺物が流れ込んだものと考えられる。F5は全域に厚く堆積する粘土層(泥炭質)、F7は川砂を含む泥炭層である。粗砂層のF6はSG435北側を中心に認められる最下のまとまった遺物包含層であり、F4同様に洪水により流入して堆積したものと思われる。

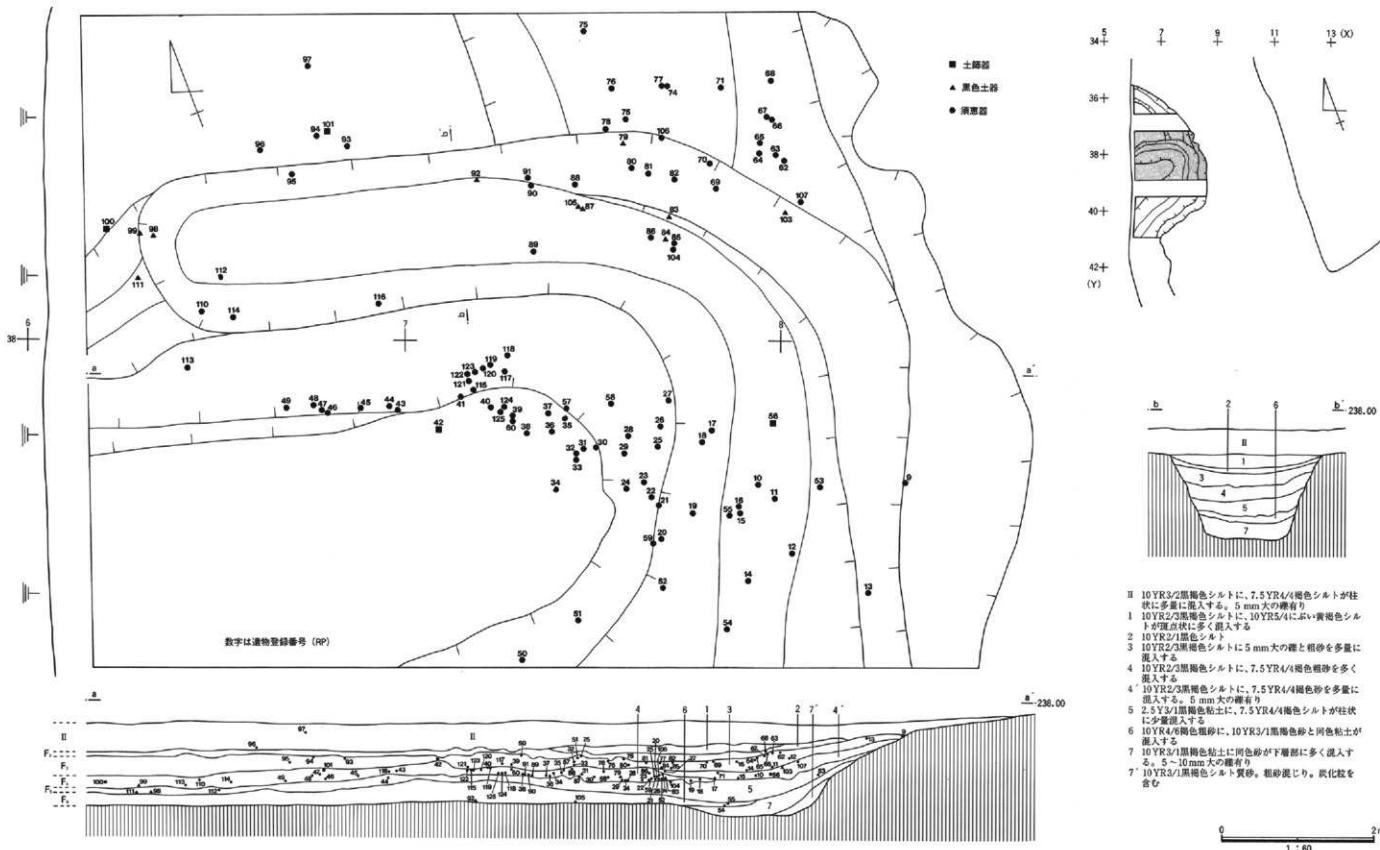
SG25・435河川跡から出土した遺物は、ほとんどが奈良・平安時代に帰属する土器である。その大半はSG435より出土しており、特に北側の蛇行部に多く集中していると言える。第16図はこの部分の遺物出土状況を示したものである。登録番号で取り上げた土器のみの分布状況であるが、河道中央部よりも岸際で多く出土している傾向が窺える。数量的には整理用のコンテナにして16箱相当分、遺跡出土土器量の約4割を占める。これらの遺物について個々の特徴を説明する紙数的余裕がないため、以下では河川跡堆積層毎に土器組成と実測図掲載土器を中心とした様相について、下層よりその概略を述べていく。

F6層 土師器壺、黒色(内黒)土器壺、須恵器の蓋・壺・高台付壺・盤・壺・壺で組成され、総数426点を数える。これら土器群は、①比率的に土師器が5割以上を占め、須恵器の割合は13%に過ぎない。②黒色土器壺はすべてロクロ非使用である。③須恵器の器種に盤が存在する、等の特徴を持つ。第17図61~64の黒色土器壺は形態的に、平底で浅身のもの(61・62)と器高が高い鉢形のもの(63・64)とに2大別できる。62は体部下端に段を有し外面は調整が粗く輪積痕を明瞭に残すが、内面には微細なミガキが丁寧に施される。深身の壺は体部下半にケズリによって稜線を作り出し、口縁が直立する器形である。

F5層 土師器壺、黒色土器壺、須恵器の蓋・壺・高台付壺・壺・壺で組成され、総数324点を数える。F6と比較し土師器の割合が減り、須恵器壺類が全体の38%と最も多くの割合を占め



第15図 SG25・435河川跡



第16図 S G 435遺物垂直分布図

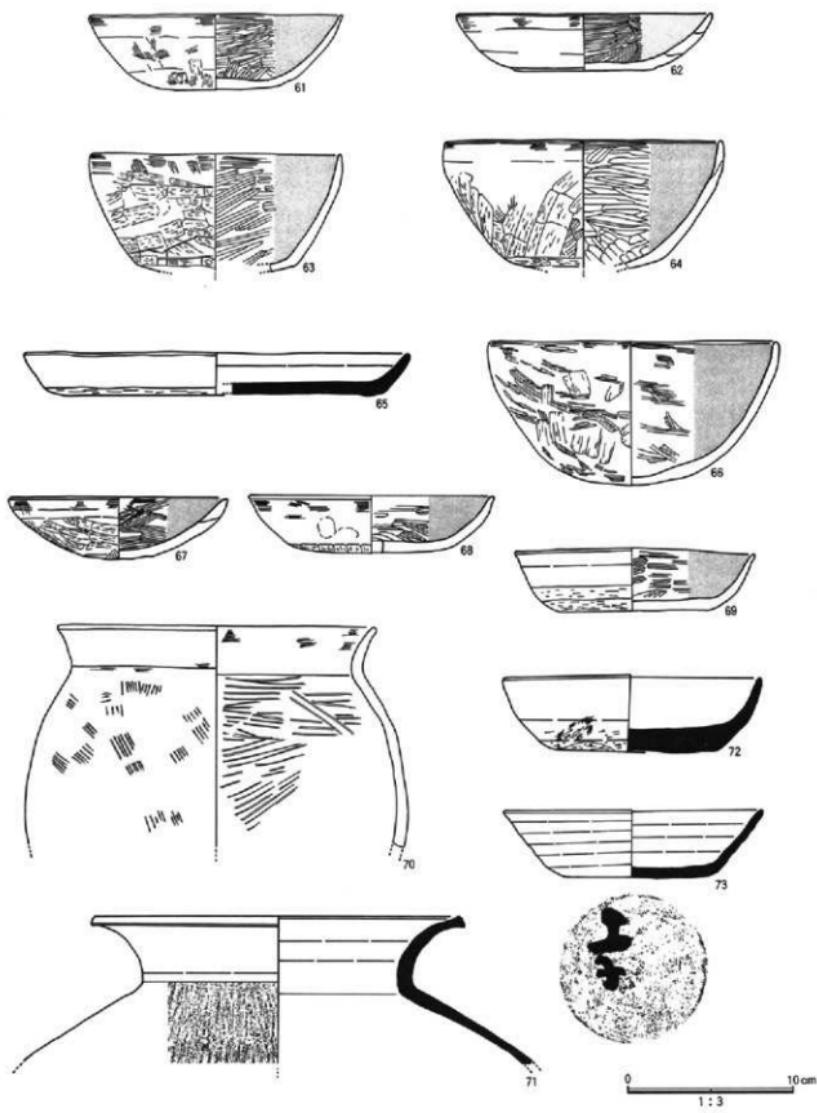
る。黒色土器坏はロクロ非使用のものが主体となるが、ロクロ使用で体部下半と底部に回転ヘラケズリを施すものが共伴する。須恵器坏・高台付坏の切り離しはすべてヘラ切りで行われ、ヘラケズリやナデの再調整を伴うものが大半を占める。本層出土の土器群からは以上のような様相が窺える。66~67は前群の流れを引く丸底の黒色土器坏であり、浅身のタイプと器高の高い鉢形のものが存在する。68はケズリによって丸底風の底部を作り出す平底坏で、61同様に口縁を薄くつまみ上げる特徴を有する。須恵器坏類では体部が内湾して立ち上がるものが多く、72は底部に厚みを持つ形態的特徴が認められる。

F 4 層 土師器壺、黒色土器蓋・坏・壺、須恵器の蓋・坏・高台付坏・壺・壺、赤焼土器壺で組成され、総数911点が出土している。これらの土器群からは以下の様相が窺い知れる。すなわち、①煮沸形態の中にこれまで主体であった土師器壺の他、ロクロ使用の黒色土器と赤焼土器(体部外面タタキ調整)が新たに加わる。②黒色土器坏に高台の付くものが増加し、同蓋とセットになるものが現れる。③須恵器坏類における底部切離はヘラ切りと糸切りがほぼ半数づつに分かれ、糸切り坏類に再調整の無いものが目立つようになる。④有台坏は黒色土器・須恵器とも器形が従来のいわゆる坏形から深身の形態へと変化する。⑤須恵器坏類に「長世」「一万」「丈」「要」「新」などの墨書文字が認められる、等々である。坏類における内容量は、口径・器高・底径と体部の膨らみ具合を要因として変化を示すと考えられる。須恵器ヘラ切り坏の一群(第19図92~第20図119)は法量的に、口径132~164cm、底径68~100cm、器高32~47cmの値を示す。一方、糸切り坏の一群(第21図121~第22図144)のそれらは各々、132~154cm、56~76cm、36~52cmの範疇に納まる。これら絶対的数値が示唆する要素は、口径に対する底径の縮小化傾向および器高の増加傾向として捉えることができる。

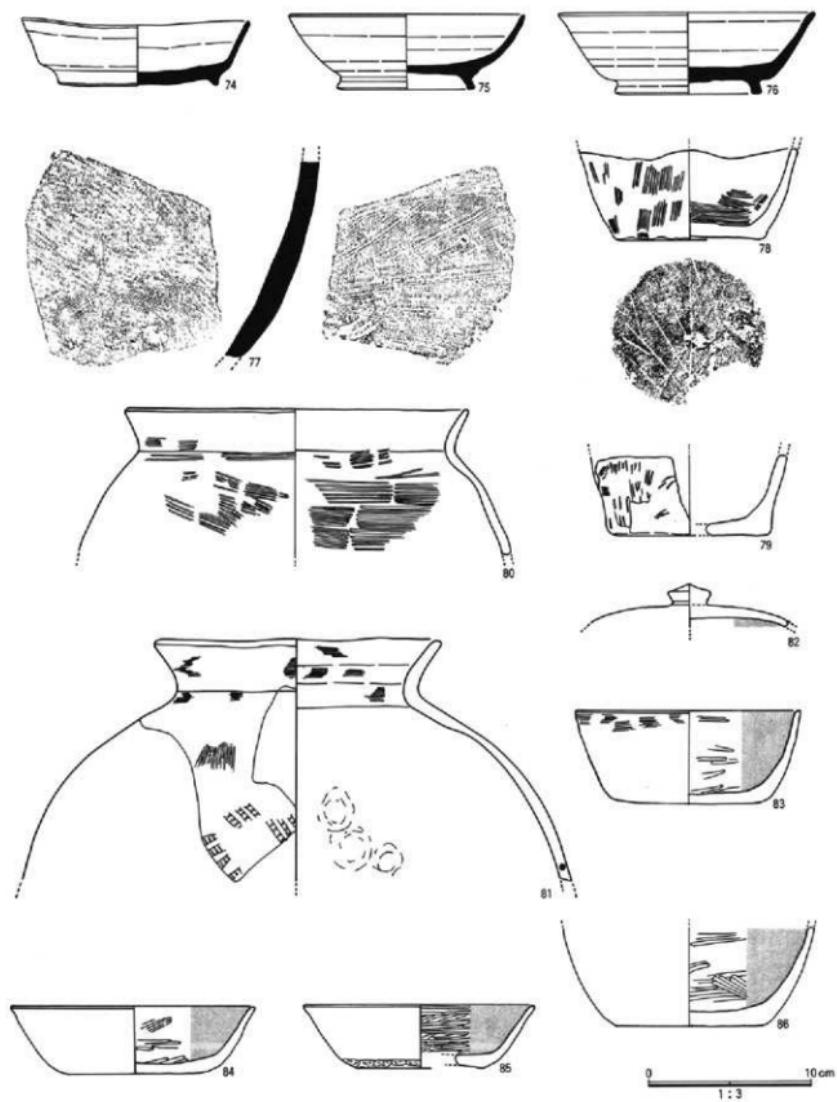
F 3 層 土師器もしくは赤焼土器の壺および坏、黒色土器の高台付坏、須恵器の各器種とで組成され、総数にして714点である。煮沸具における土師器の割合が減少し、破片資料ながら体部にタタキを持つ赤焼土器が多くなる。また、供膳具においても赤焼土器坏が含まれるようになる。黒色土器は台を有するものに限られ、把手が付くものも認められる。須恵器坏類(第23図164~第24図190)では回転糸切り無調整が主体となり、歪み度合いの大きいものが含まれてくる。これらからは、総体として製品の量産・簡略・粗雑化等の傾向が指摘できる。糸切り坏は前段階と比べて口径に対する底径の割合がより小さくなり、底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部で外反するタイプ(178・188)が増える。

F 2 層 土師器か赤焼土器の壺、黒色土器坏類、須恵器坏と壺で組成される。出土点数が少なく破片資料のため、図示できたのは須恵器坏(第24図192)1点のみである。

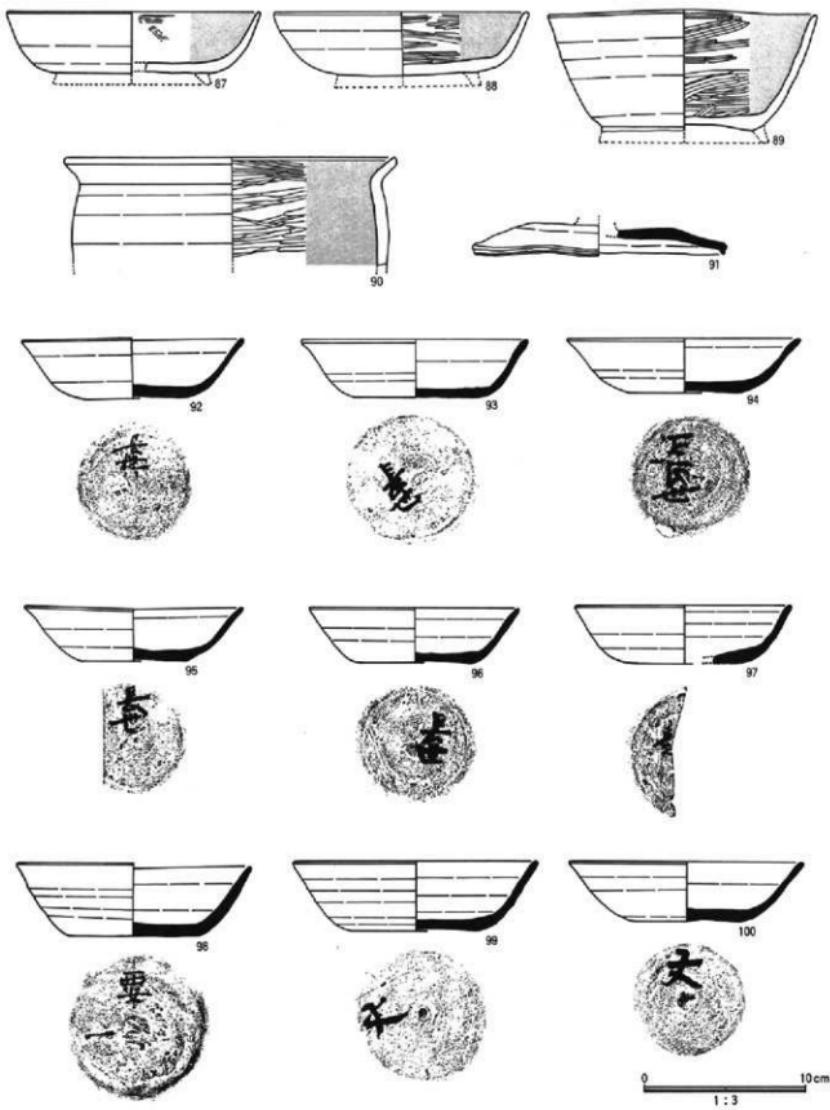
以上、各層序毎の土器様相について概略的に説明した。これら層序毎の出土土器に当たはまる年代は、F 6 層が8世紀第1四半期後半から第2四半期を中心とする頃、F 5 層は8世紀第2四半期後半から第4四半期にかけて、F 4 層が8世紀第4四半期末から9世紀第3四半期初頭にかかる頃、F 3 層がやや重複するが9世紀第2四半期から第3四半期を中心とする頃、F 2 層はこれに後続する9世紀第4四半期と考えて大過なかろう。したがって、本河川跡の出土遺物は西暦720年前後から800年代末頃までの、約180年間に亘る土器変遷と捉えられる。



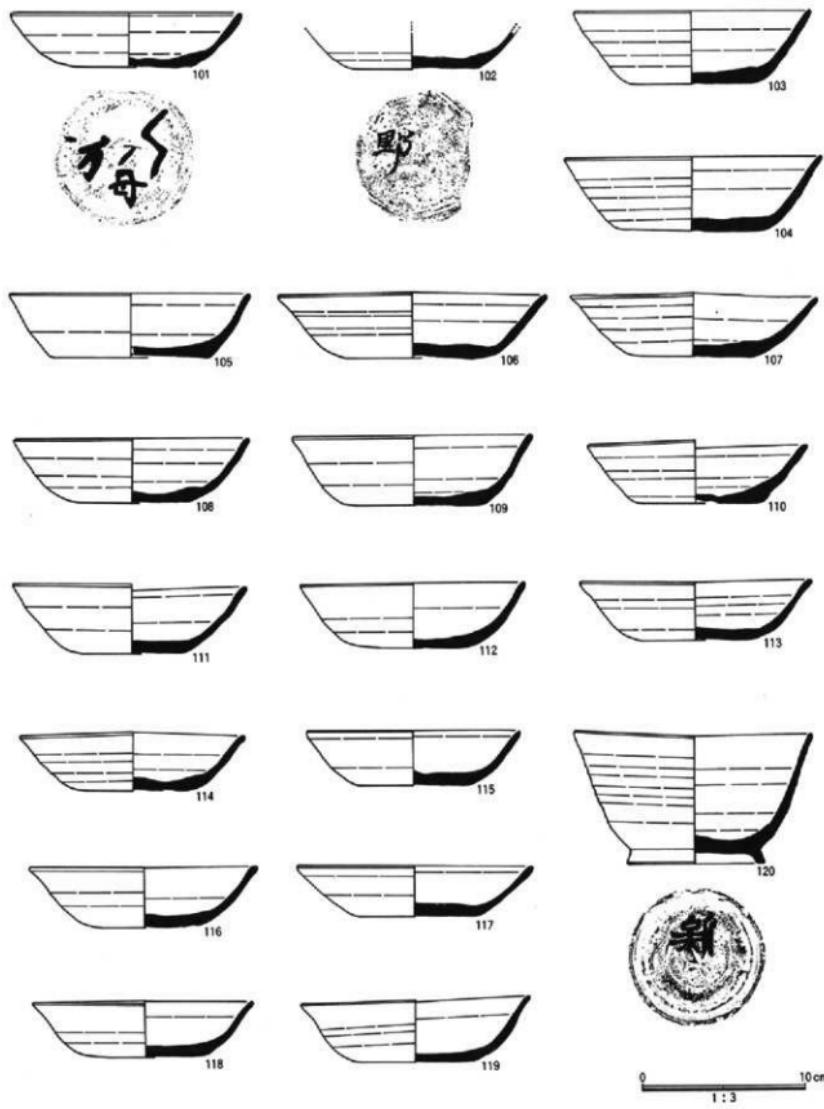
第17図 SG 435出土土器(1)



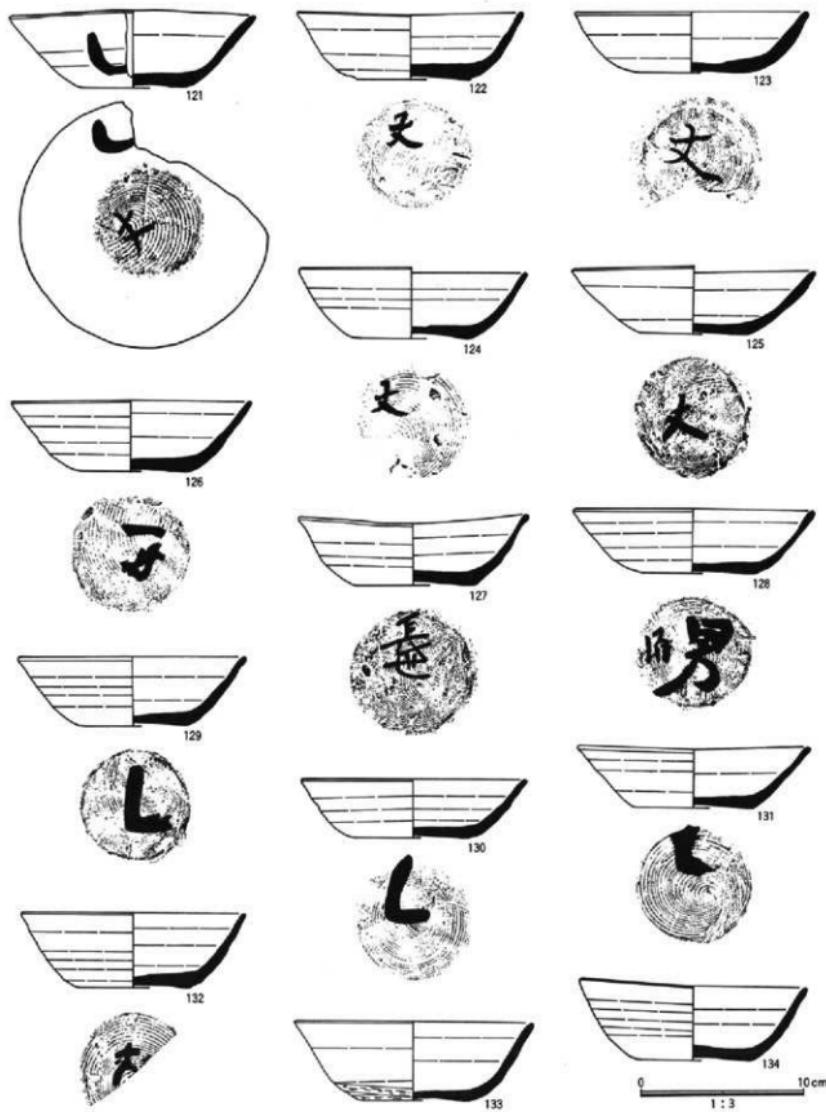
第18図 SG 435出土土器(2)



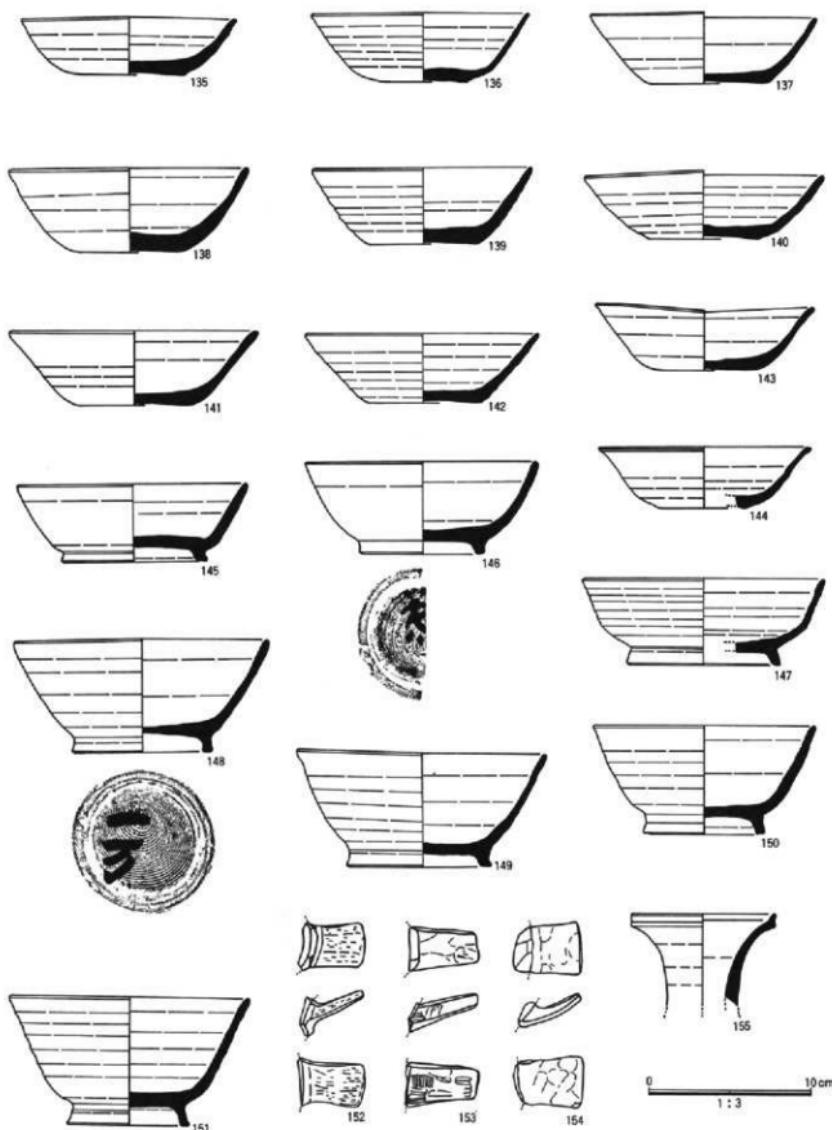
第19図 SG 435出土土器(3)



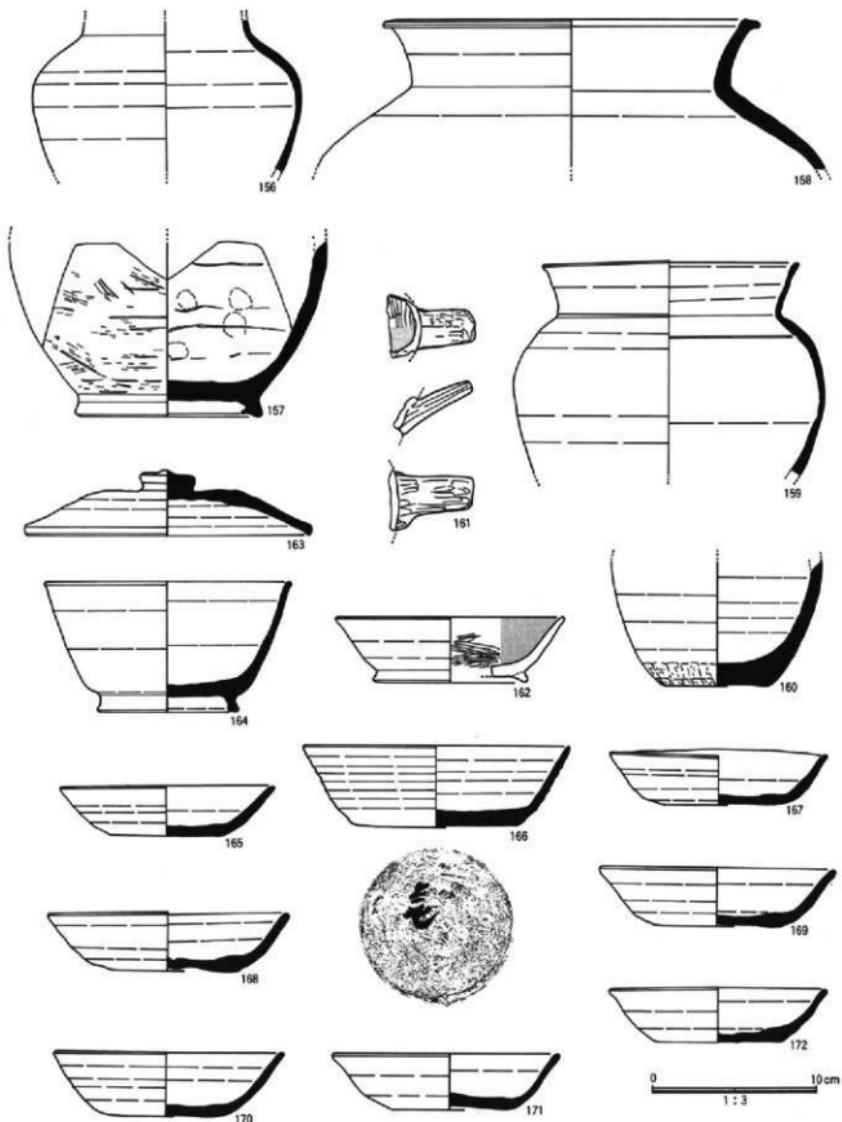
第20図 SG 435出土土器(4)



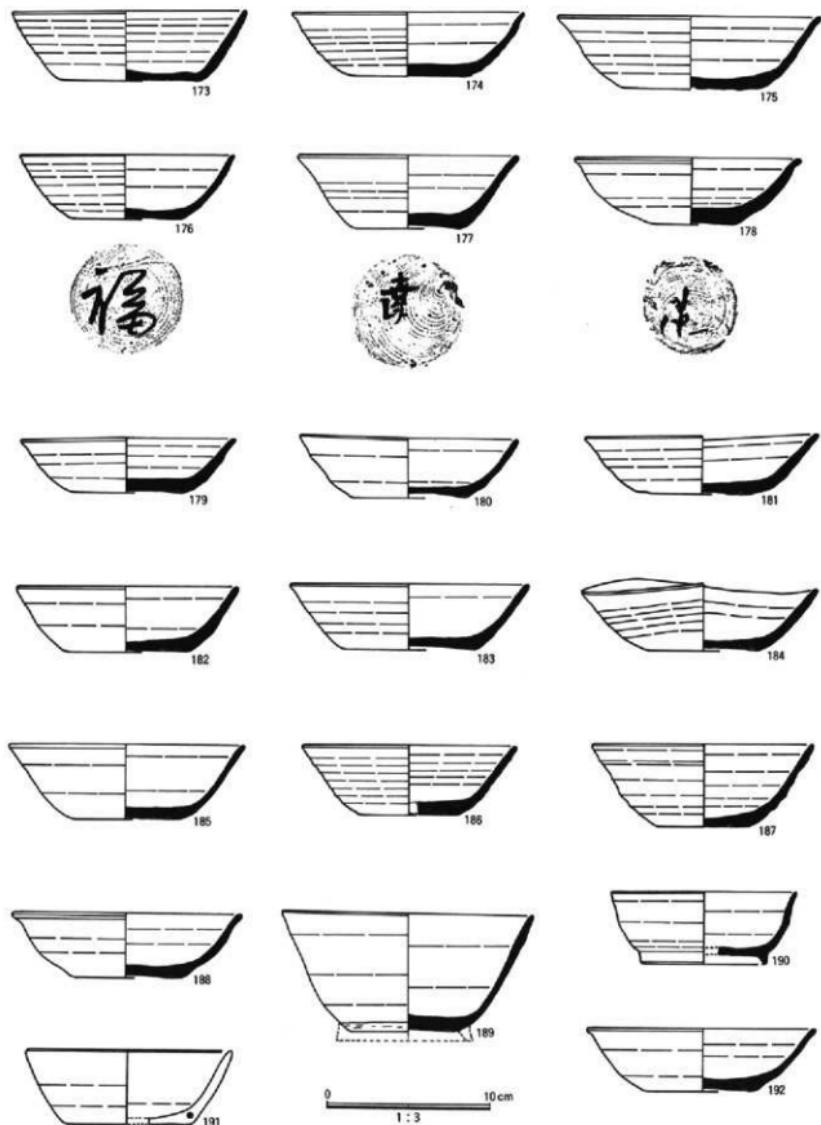
第21図 SG 435出土土器(5)



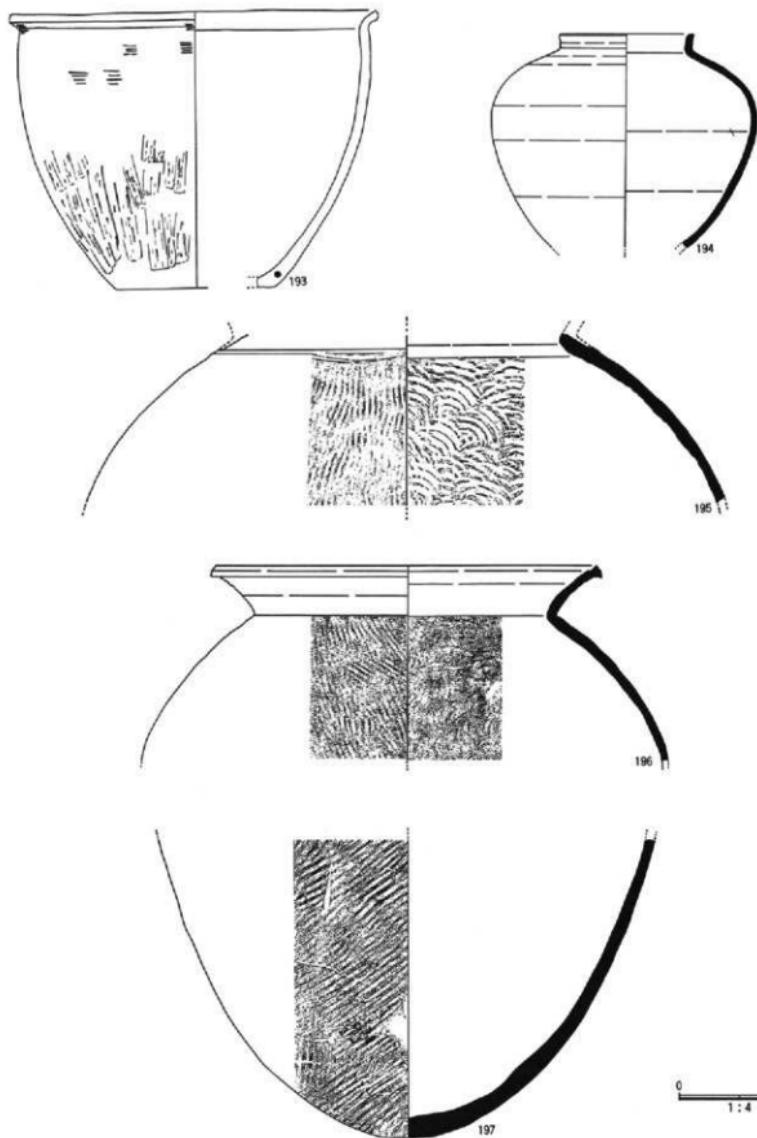
第22図 SG 435出土土器(6)



第23図 SG 435出土土器(7)



第24図 SG 435出土土器(8)



第25図 SG 435出土土器(9)

表2 土器観察表(1)

測定番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				底切	部類	調整技法		出土地点・登録番号	備考
				口径	底径	器高	胎厚			外面	内面		
第1群	1	土師器	环	(138)	78	37	4	ヘラ切			ミガキ	SE73	内面二次焼成
	2		壺	(158)		35	5						+
	3		高台付环	(158)	(94)	48	4	ヘラ切					横焼
	4			(152)	(80)	54	5	+					+
	5		环	143	79	37	4	+					+
	6			(141)		39	5					SK115・RP164	
	7		壺	148		33	5					+	・RP165
	8			140		33	5					+	・RP171
	9											+	・RP163
	10											+	
第2群	11	土師器	环	(146)	78	41	4	ヘラ切			ハケ目	+	・RP163
	12		高台付环	(138)	79	42	4	回転余切					+
	13			148	72	40	5	+				+	・RP162
	14			(132)	(64)	36	5	+				+	・RP166
	15		高台付环	(121)	(72)	46	4	不 明				+	・RP168
	16		大 壺	176	(604)	13							把手付
	17												
	18												
	19												
	20												
第3群	21	土師器	高台付环	145	96	47	5	ヘラ切					+
	22	土師器	皿	(128)	64	27	5	不 明			ミガキ	SD411	
	23			(146)	(110)	36	5	静止余切				10-32	
	24			(190)	(84)	41	4	ヘラ切				6-41	
	25			(132)	(56)	44	5	回転余切				SK131	
	26			(132)	60	47	3	+				SK246	
	27												
	28		壺			(121)	10					SP606・RP 6	
	29											18-40	
	30												
第4群	31	土師器	手 程	72	40	45	11		指腹痕	指腹痕		11-33	
	32												
	33												
	34												
	35												
	36												
	37												
	38												
	39												
	40	土師器	手 程	(152)	(88)	40	4	ヘラ切			+	タ	
第5群	41			(134)	(102)	28	5	+	底部: 手持ちヘラケズリ			+	タ
	42			(146)	(90)	39	5	+				+	タ
	43			(154)	(74)	43	4	+				+	タ
	44			(82)	(21)	4	+		底部: 手持ちヘラケズリ			+	タ
	45			(152)	84	40	4	+				+	タ
	46			(150)	78	42	6	回転余切				+	タ
	47			(138)	60	38	4	+				+	タ
	48			(130)	74	41	6	+				+	タ
	49												
	50												

表3 土器観察表(2)

博団 番号	遺物 番号	種 別	器 標	計 測 値 (mm)			底 切 端 縫	部 縫	調 整 技 法		出土地点・登録番号	備 考		
				口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面				
14 国	51	須 恵 器	蓋	(110) (88)	(58)	7					SG21 F 1			
	52			(212)	(75)	7		平行タキ目	アテ底・カキ目	+	+			
	53		夷		144 (92)	9		タキ・カキ目・ナゲキ目		+	+			
	54				(144) (33)	12		外側・底部：平行タキ目		+	+			
	55		壺		90 (73)	14				+	+			
	56				(70) (75)	11			ナゲアテ底		+	+		
15 国	57	土 部 器	环	153	84	61	6	ヘ ラ 切	縦軸ヘラケズリ	ミガキ	+	+		
	58				(72) (40)	4	タ	手持ちヘラケズリ	+	+	+	+		
	59		夷		(98) (31)	5	木葉底	ナゲ	ハケ目	+	+			
	60		古式土部器		164	54	21	6	ハケ目	ヘラナゲ	+	+		
	61				156	80	46	4	ケズリ→ナゲ	ミガキ	SG435 F 6 · RP92			
	62		环		156	88	35	6	ナゲ	*	+	+	RP105	
17 国	63	土 部 器		(156)	(72)	6		タキ・ナゲ・ミガキ	+	+	+	+		
	64		夷		(170)	(79)	5	ケズリ・ナゲ	+	+	+	+		
	65		盤	(238) (186)	26	6	ヘ ラ 切			+	+			
	66				(179)	88	5	ケズリ→ミガキ	ミガキ	*	F 5 · RP111			
	67		环	(134) (50)	38	7		ケズリ・ナゲ	+	+	+	RP98		
	68		夷	150	102	35	5	*	*	+	+			
18 国	69	土 部 器		146	100	39	4	ヘ ラ 切	縦軸ヘラケズリ	+	+	+	底部：縦軸ヘラケズリ	
	70		夷	(195)	(135)	7		ハケ目	ハケ目	+	+			
	71			(224)	(90)	5		平行タキ目	アテ底	+	+	RP44 · 53接合		
	72		环	160	104	48	7	ヘ ラ 切	ケズリ→ナゲ	SG25	+	RP 2	底部：縦軸ヘラケズリ→ナ	
	73			160	90	43	4	タ		SG435	+	RP104	△：墨痕有り	
	74	須 恵 器		139	97	42	3	*		+	+	RP112		
19 国	75		高台付环	143	84	47	3	*		+	+			
	76			(156) (90)	50	4	タ			+	+		底部外側縦軸用	
	77					15		タキ目・ハケ	アテ底・ハケ目	+	+			
	78				94 (56)	5	木葉底	ハケ目	+	F 4 · RP101				
	79		夷	(56) (49)	7	2	*			+	+	RP56		
	80			(208)	(90)	5		ハケ目・ナゲ	ハケ目	+	+			
20 国	81	赤 塗 土 器		(175)	(148)	7		タキ目・ナゲ	アテ底	+	+			
	82		蓋		(26)	6				+	+			
	83			138	95	58	5	ヘ ラ 切	ミガキ	+	+	RP79		
	84		环	150	88	42	5	*		+	+	RP83	底部：縦軸ヘラケズリ	
	85			(140) (78)	39	4	縦軸糸切	縦軸ヘラケズリ	+	+	+	RP87		
	86		夷		94 (61)	6				+	+	RP103		
21 国	87	須 恵 器		(156)	92	38	5	ヘ ラ 切		+	+			
	88		高台付环	156 (56)	(40)	5	タ			+	+			
	89			154 (93)	(77)	4	四軸糸切			+	+			
	90		夷	(209)	(67)	7				+	+			
	91			153	(20)	6	ヘ ラ 切			+	+	RP43 · 46接合	内面縦軸用	
	92			137	68	37	4	*		+	+	RP21	底部：墨書「民世」	
22 国	93	須 恵 器		138	80	36	4	*		+	+		△	
	94			(142)	71	33	4	*		+	+	RP47		
	95			134	70	34	3	*		+	+	RP24		
	96			(128)	75	34	3	*		+	+	RP45		
	97			(134)	(78)	36	4	*		+	+			
	98			146	84	44	6	*		+	+	RP113	△：「要」	
23 国	99			(150)	82	42	4	*		+	+	RP119	△：「文」	
	100			144	70	37	4	*		+	+	RP10	△ △	

表4 土器観察表(3)

種類 番号	種 別	器 種	計測値(mm)				底 部 形 態	調 整 技 法		出土地点 登録番号	備 考
			口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面		
節	環	(140)	86	33	3	△	△	△	△	SG435 F 4	底部：墨痕有り
			82	(23)	3	△				+	+
		(145)	86	46	5	△				+	+
		159	90	47	4	△				+	RP71
		(148)	(100)	39	3	△	△	△	△	+	RP72・74接合
							底部：手持ちヘラケズリ			+	RP106
		164	90	41	4	△				+	RP78
		(152)	80	39	5	△				+	RP48
		145	76	40	3	△				+	RP115
		148	86	43	3	△				+	RP114
頭	環	135	78	39	4	△				+	RP35
		144	70	43	3	△				+	RP60
		138	78	41	4	△				+	RP120
		(142)	70	37	3	△				+	RP31
		138	78	36	4	△				+	RP123
		(132)	70	34	4	△				+	RP18
		140	75	38	3	△				+	RP45
		(142)	78	32	3	△				+	RP34
		138	80	35	3	△				+	RP30
		140	78	41	4	△				+	RP25
高台付	環	148	84	81	4	△				+	RP124
			152	70	47	5	△	△	△	+	底部：墨書「新」。
		139	71	42	4	△				+	「丈」、保基：墨痕有り
		(140)	70	38	7	△				+	RP27
		140	72	44	4	△				+	RP40
		149	70	43	5	△				+	RP37・118接合
		148	74	44	4	△				+	+
		142	76	44	4	△				+	「一万」、民世」
		148	70	40	3	△				+	RP125
		(142)	68	43	4	△				+	「男」他
桶	環	140	75	36	5	△				+	RP29
		(144)	70	39	4	△				+	墨痕有り
		(138)	72	46	5	△				+	RP20
		148	70	49	4	△	△	△	△	+	RP26
		141	74	50	5	△				+	RP58
		141	74	50	5	△				+	+
		135	70	36	6	△				+	RP17
		134	57	43	3	△				+	RP23
		139	75	44	3	△				+	RP22
		148	68	52	4	△				+	RP57
高台付	環	(136)	70	46	5	△				+	RP44
		148	70	42	4	△				+	RP107
		(154)	76	45	4	△				+	RP110
		(144)	74	43	4	△				+	RP88
		142	74	43	4	△				+	底部：墨痕有り
		134	66	41	4	△				+	RP49
		(132)	(56)	37	3	△				+	RP91
		141	89	47	5	△	△	△	△	+	RP121
		(144)	78	56	5	△				+	RP90
		(148)	(94)	53	4	△				+	底部：墨痕有り、環板用
頭	環	(158)	88	69	5	△	△	△	△	+	接合
		154	89	73	4	△				+	RP89
		137	(75)	67	5	△				+	底部：墨書「一万」
										+	
										+	

表5 土器観察表(4)

排	号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				底切 部離	調整 技法	出土地点・登録番号	備考	
					口径	底径	器高	器厚					
第 22 国	151		須恵器	环	(148)	75	79	5	回転糸切	ケズリ	SG435 F 4		
	152			环						ケズリ	+		
	153			双耳环						ケズリ・ミガキ	+		
	154			环							+		
	155			壺	88	(56)	5				+		
	156			壺	朝延154	(92)	5				+	RP52	
	157			壺	113	(108)	8			ケズリ・指彫瓶	+		
	158			甕	(230)	(92)	10			平行タタキ目	アテ痕	+	RP86
	159			壺	158	(131)	4				+		
	160			壺		(76)	8			ケズリ	+		
第 23 国	161		土師器	双耳环						ミガキ	+	F 3	
	162			高台付环	(140)	92	40	5		ミガキ	+	RP54	
	163			壺	(175)		40	6			+	RP76	
	164			高台付杆	(156)	86	79	4	△ テ 切		+	RP93	
	165				131	70	31	5	△		+	RP94	
	166				(164)	100	50	4	△		+	RP11	
	167				134	70	34	5	△		+	RP65	
	168				147	80	37	4	△		+	RP60	
	169				(144)	80	36	5	△		+	RP14	
	170				141	70	40	4	△		+	RP95	
第 24 国	171		須恵器		139	72	34	5	△		+	RP75	
	172			环	(134)	74	34	4	△		+	RP81	
	173				144	86	44	4	△		+	RP82	
	174				142	74	40	4	△		+	RP62	
	175				(160)	(86)	45	4	△		+	RP 9	
	176			环	132	70	40	4	回転糸切		+	RP117	
	177				(136)	68	44	4	△		+	RP15	
	178				139	58	42	6	△		+	RP39	
	179				132	70	34	5	△		+	RP27	
	180				134	72	36	4	△		+	RP85	
第 25 国	181		須恵器		143	72	38	5	△		+	RP67	
	182				(136)	78	40	6	△		+	RP70	
	183				(146)	(82)	42	4	△		+		
	184				145	70	43	5	△		+	RP69	
	185				(146)	68	45	3	△		+	RP15・19接合	
	186				(132)	(62)	43	4	△		+	SG25 RP 3	
	187				(136)	60	51	4	△		+	SG435 RP 32	
	188				(140)	68	40	4	△		+	RP13	
	189				154	(82)	73	4	△		+	RP12	
	190			高台付环	(114)	(78)	44	3	静止糸切		+	RP51	
第 26 国	191		赤燒土器	环	(126)	(80)	46	5	回転糸切		+		
	192				142	71	38	4	△		+	F 2・RP68	
	193				(294)	(130)	225	8	ケズリ・ハケ目		+	SG435 F 3・RP42	
	194				109	(175)	5				+	RP64・66接合	
	195							11	平行タタキ目	青海波アテ痕	+		
	196			甕	(310)	(154)	8		△	△	+		
	197							(241)	10	△	+	RP95・97接合	

(5) 出土土器の分類 (第26図)

荒川2遺跡から出土した奈良・平安時代の土器は、調整技法・焼成技術等の相異により、黒色土器を含む土師器、須恵器、赤焼土器の3種に大別される。以下の分類にあたっては、図示した土器に限って行ったことを付記しておく。

土師器(1)

供膳具としての壺(A)、高台付壺(B)、皿(C)、蓋(D)、煮沸具としての甕(E)の各器種が存在する。これらは製作技法・形態・法量等から細分されるが、皿(C)と蓋(D)については掲載したものが各1点であるので、分類からは除外した。

壺(A) 内面に黒色処理が施されたもので、ロクロ使用の有無と底部形態により3類に分類され、法量や細部の特徴によってさらに細分できる。

A 1類：ロクロを使用しない壺で、浅身のもの。内面にヘラミガキ、外面にケズリやミガキ調整を施す。体部は内湾しながら立ち上がる。底部形態からa・bの2類に細分される。
aは平底で底辺部に段を有し器高の低いa 1、口縁端部を薄くつまみ上げるa 2、ケズリによって丸底風の底部を作り出すa 3がある。bは丸底のものである。

A 2類：ロクロを使用しない壺で、器高が高い鉢形のもの。内面にヘラミガキ、外面にケズリやミガキ調整が施され、口縁が直立する器形である。ケズリによって体部下端に稜を形成するa、丸底の底部から内湾して立ち上がるbを認める。

A 3類：ロクロを使用した壺で、切り離しを回転ヘラ切で行うaと、回転糸切りによるbに分類される。さらにaは調整技法により、体部下半や底部全面に回転ヘラケズリを施すa 1、ナデだけによるa 2に細分できる。

高台付壺(B)

内面に黒色処理を施したロクロ使用のもので、2類に分類される。

B 1類：底部切離が回転ヘラ切り手法のもの。法量の相異によりa・bに細分される。aは口径・底径とも大きく、体部が内湾気味に立ち上がる器高の低い土器である。bは深身の鉢形の形態で、法量はB類の中で最大になると考えられる。

B 2類：底部切離が回転糸切り手法のもの。ハの字に開く低い高台が付き、口縁部が外反する。

甕(E) ロクロ使用の有無から次のように分類できる。

E 1類：ロクロを使用しない甕で、口頸部は横ナデ、胴部外面は縱方向の、内面は横方向にハケ目が施される。これらの甕は器形や法量によって次のa～dの4類に細分できる。aは口径200mm前後、頸部がくの字状に屈曲して胴張りの器形を呈し、胴部中央～上半に最大径を有するもの。bは口径200mm前後の長胴甕で口縁径が最大径となり、頸部に段を持って強く外反し口縁が大きく開くb 1と、頸部が緩やかに屈曲するb 2がある。cは口径160mm以下となる小形の甕で、最大径を口縁で測るが頸部の屈曲が弱いc 1、口径が器高を上まわるc 2がある。dは胴部下半～底部の資料を一括した。

E 2類：ロクロを使用した甕で、内面にヘラミガキおよび黒色処理が施される。外面にはケズリが認められるものもある。口縁部形態は頸部でくの字状に外反した後、口唇を上方につまみ上げるものである。

須恵器(II)

供膳具には壺(A)、高台付壺(B)、盤(C)、蓋(D)、また貯蔵具には壺(E)、甕(F)の各器種がある。盤(C)は1点のみで分類できないが、その他の器種は調整技法や法量の差で分類・細分が可能である。

壺(A) 底部の切り離し手法からヘラ切りと糸切りに大別され、再調整の有無と形態や法量の相異から細分される。口径と器高は土器容量に大きな変化を与える要素と考えられる。ここでは、口径を100とした場合の器高の比率(器高/口径×100)を指数とした分類を行う。

A 1類:回転ヘラ切りによって切り離されたもので、ヘラケズリによる再調整が施されるもの。

回転ヘラケズリを行うa、手持ちヘラケズリによるbの2類がある。bは、底径が大きく体部が内弯して立ち、指数20を測る器高の低いb1と、指数26前後で体部が直線的に外傾するb2に分かれる。

A 2類:回転ヘラ切りによって切り離されたもので、ナデ等の調整を除く再調整の認められないものを一括する。これらは指数から2分され、また形態から細分される。aは指数26未満の口径・底径とも大きく器高の低い一群で、体部下端に丸味を持ち内弯気味に立ち上がるa1、直線的に外傾するa2、口縁がやや外反して開くa3の別がある。bは指数26以上のもので、a類同様の3形態に分かれる。

A 3類:静止糸切りによって切り離されたもの。1点のみを認める。口径に対する底径の比率が最も大きな壺である。

A 4類:回転糸切りによって切り離されたもので、体部下半に回転ヘラケズリによる再調整が施されるもの。SG435F4層より1点出土している。

A 5類:回転糸切りによって切り離されたもので、再調整を行わないものを一括する。指数と体部形態から次のa~dに細分できる。aは指数27以下となる器高の低い一群で、体部下端に丸味を持ち内弯気味に立ち上がるa1と、直線的に外傾して大きく開くa2がある。これらは底径も大きく、側面觀からはヘラ切り壺と区別がつかない。bは小さな底部から直線的に外傾して立ち上がるもので、指数27~32までのb1、指数32以上で器高が高いb2がある。cは体部が外反しながら口縁に至る器形で、指数29~32の範疇に入る。dは体部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部が外反して開くもので、指数28~30の範囲にある。

高台付壺(B) 底部の切り離し手法からヘラ切りと糸切りに大別され、再調整の有無と形態や指数の相異から細分される。

B 1類:回転ヘラ切りによって切り離された、いわゆる稜塊の一群を一括する。10点を数えるが、切り離し後に回転ヘラケズリ再調整を施したもののが1点あり、これをaとする。その他のものはbとして、指数の差から4区分できる。低器高で指数30前後のb1、指数35前後で容量が大きいb2、その中間の数値を示すb3がある。b4は器高の比が大きい小形のものである。

B 2類:回転ヘラ切りによって切り離されたもので、高台のナデ付け等を除く再調整は認めら

第26図 土器組成・分類図

れない。指数と形態より a～c に細分できる。a は体部が内弯する器形で、指数33前後のもの。b は直線的に立つもので低器高の b₁ と、口径の大きい b₂ に分かれる。c は器高80mm程を測る容量的に坏類で最大となるものである。

B 3 類：静止糸切りによって切り離されたもの。SG 435F 3層より1点出土している。

B 4 類：回転糸切りによって切り離されたもので、高台のナデ付け等を除く再調整は認められない。2類同様に a～c に細分できる。a は体部が内弯する器形のもの、b は直線的に立ち上がるものの、c は器高70mm前後を測る容量の大きいものである。

B 5 類：把手が2カ所に付く台坏である。底部欠損のため切り離し手法は解らない。

蓋(C) SG 435F 6層より1点出土している。

蓋(D) 鈕部の形状を基に4類に分類され、さらに天井部および口唇の形態から細分される。

D 1 類：鈕部が宝珠形となるもの。天井部は平坦だが中央にやや下がる。口唇は直立するがつまみ出しが弱い。

D 2 類：鈕部中央の突出が顕著ではなくほぼ平坦なもの。天井部は緩やかに弯曲して口縁に至り、ほぼ直角に口唇が立つ。

D 3 類：鈕部が全体に窪むもの。平坦な天井部から内弯気味もしくは直線的に口縁部に至る a、外反する口縁部からほぼ直角に口唇が立つ b、天井部・口縁径とも小さいため肩が張る形態の c を認める。

D 4 類：中央が大きく窪む背の低い扁平な鈕が付くもの。外反する口縁部から内側に返される口唇を持つ。

壺(E) 主として口縁部の形態から知られる長頸壺・短頸壺・広口壺等の器種が存在する。破片資料がほとんどで、全形の判然とするものはない。

E 1 類：長頸壺を一括する。長い頸部から口縁が大きく外反し、口唇が直立するものがある。

E 2 類：短頸壺を一括する。体部上半に大きな膨らみを有し緩やかに下がる。

E 3 類：広口壺を扱う。頸部から直線的に外傾して開く口縁部を持つ。

甕(F) いわゆる大壺の破片が大半である。図示したものを大・小の2類に分けるに留める。

F 1 類：頸径170～250mmのもので、口縁部は口唇でくの字状に引き出され、肥厚して巡る形態が多い。打圧調整には平行タタキ、平行・青海波アテなどが認められる。

F 2 類：胴部最大径700mmを超える大形の甕である。SK 115から出土している。

赤焼土器(Ⅲ)

酸化焰によって焼成されたロクロ使用の土器で、土師器坏類等との相異はヘラミガキ・黒色処理がないことで区別される。器種は坏(A)、鉢(B)、甕(C)の3種が存在する。図示できた資料は各1点であるため、それぞれの形態的な特徴を述べる。

坏(A) 回転糸切り手法のものである。体部は直線的に立ち上がり、指数28を測る。

鉢(B) 体部は比率の小さい底部から内弯して立ち上がり、頸部で屈曲して直ぐ口縁部となる。体部下半にはヘラケズリ調整が施される。

甕(C) 頸部がくの字に強く屈曲する。胴部は緩やかに内弯し球形状を呈する。

3 中近世

(1) 建物跡

調査で検出されたのはA区に分布する堅穴式の建物跡1棟と、F区のS G 21・25河川跡の間の微高地上を中心とした場所に分布する6棟の掘立柱建物跡である。遺物の出土がほとんどないため時期の特定は難しいが、S E 23・437などの付近の井戸跡の存在や、S G 21の覆土を掘り込んでいる建物跡の存在などから、中近世に属すると考えられる。これらF区の建物群は、堀による区画の外側に存在することが注目される。その他、A・B・D区には多数の柱穴が検出されたが、建物としての組み合わせができなかった。以下では、建物跡毎に概要を記す。

S T 332堅穴住居跡（第27図、図版9）

調査A区の15・16・18・19グリッドで検出された。平面形態は長軸4.6m、短軸1.3mの長方形である。北東隅に幅90cm、長さ60cmの張り出しを持つ。検出面からの深さは30cmを測り、壁は垂直に掘り込まれる。壁に沿って柱穴が並ぶ。柱間距離は60cm前後である。柱穴の深さは床面から20~30cmを測る。張り出し部の床面はスロープ状になる。堆積土には地山ブロックが混入し、人為的に埋められている。遺物は出土していない。

S B 10掘立柱建物跡（第27図、図版9）

調査B区の17・18・33・34グリッドで検出された南北棟の建物跡である。桁行3間、梁行2間で、主軸方向はN-11°-Eとなっている。大きさは桁行長3.2m、梁行長5.0mの小規模な建物跡である。各面における柱穴列の柱間距離はまばらで、E B 801・802間が170cm、802・803間150cm、803・804間170cm、804・806間130cm、806・810間240cm、810・809間170cm、809・808間200cm、808・807間130cm、807・805間250cm、805・801間120cmを測る。掘り方は径50cm程の不整円形または梢円形を呈するが、平面形・規模・深さともバラツキがある。

S B 11掘立柱建物跡（第29図、図版9）

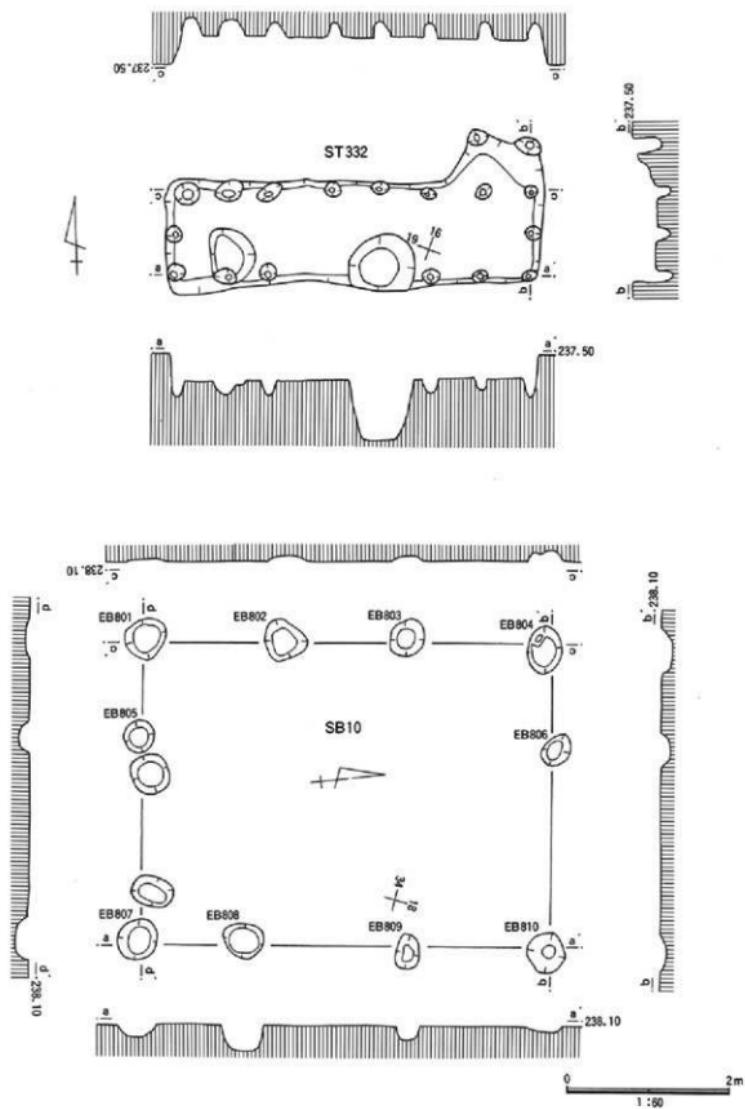
調査C区の19・20・45・46グリッドで検出した。3間×1間で北側に廟が付くと考えられる東西棟の建物跡である。規模は桁行長6.3m、梁行長4.7mを測り、主軸方向はN-14°-Wとなる。身舎西面の廟にあたる柱穴は後世の溝S D 22によって切られる。柱間距離は梁行300cm、桁行で210cm(約7尺)等間となる。また、北面軒から廟部柱穴列までは170cmを測る。

柱穴掘り方の規模はE B 822を除いてほぼ一定しており、径30cm程の不整円形のプランを持ち、アタリ部分が一段深くなっているものを認めるが柱根は遺存しない。確認面からの深さは40cm前後のものが多く、堆積土は単層または2層からなる。

S B 401掘立柱建物跡（第30図、図版9）

調査F区の11~13・47~49グリッドで検出した。桁行5間、梁行1間となる東西に長い建物跡で、主軸方向はN-5°-Wである。大きさは桁行長9.7m、梁行長3.9mで、桁行どうしの柱穴列はよく対応している。建物南面から西面にかけてS D 431溝跡に切られており、南面桁行の一部柱穴が確認できない。桁行の柱間距離は約190cm等間で、柱穴は直線上に並んでいる。

柱穴のプランは径30~40cmの不整円形や梢円形を呈している。掘り方の深さは20cm前後の浅いものと、60cm程の深さを持つものの2種類が見られ、特に建物角柱の掘り方が深くなっている傾



第27図 S T 332・S B 10建物跡

向を指摘できる。E B 827には柱根が残存する。柱根の直径は14cm、残存長は45cmを測る。下端部には明瞭な加工痕が残る。

S B 403掘立柱建物跡（第28図、図版10）

調査F区の10~12-50・51グリッドで検出した。桁行3間、梁行2間で北側に廂を持ち、主軸方向がほぼ磁北に沿う東西棟の建物跡である。建物の規模は桁行長6.8m、梁行長5.0mで、東西南北の柱穴列ともよく対応している。桁行の柱間距離はE B 846・847間が290cm、E B 847・848間とE B 848・849間は190cmを測る。梁行の柱間距離は200cm等間となっており、北面柱穴列から廂までの距離は西面で110cm、東面では90cmである。

柱穴掘り方の規模は一定していないが、20~40cmの隅丸方形ないしは不整円形のプランを持ち、アタリ部分が一段深くなっているものがある。掘り方の深さは確認面から最浅20cm、最深75cmまで存在するが、40cm前後のものが多い。掘り方の覆土には砂が多量に混入する。乾燥すると地山との間に隙間を生じる。14基存在する柱穴のうち9基において、径10~20cmの礫が一柱穴に1~12個検出されている。柱を据える際の根石と考えられる。E B 839・840・842は大小の礫5~12個を柱の下に敷いている。同じ柱穴内の礫は接合する例もあり、大きさの調整のため石を割ったと考えられる。E B 845は柱の周りを礫で固めている。E B 843・846は1つの扁平な礫の上に柱を据えている。E B 846の根石は石臼の転用である。背面を下にして置かれている。アタリの部分が被熱している。中央部のE B 844は深さ20cm程度で根石はない。底部部分の柱穴にも根石の入るものはない。

S B 404・405掘立柱建物跡（第30図、図版9）

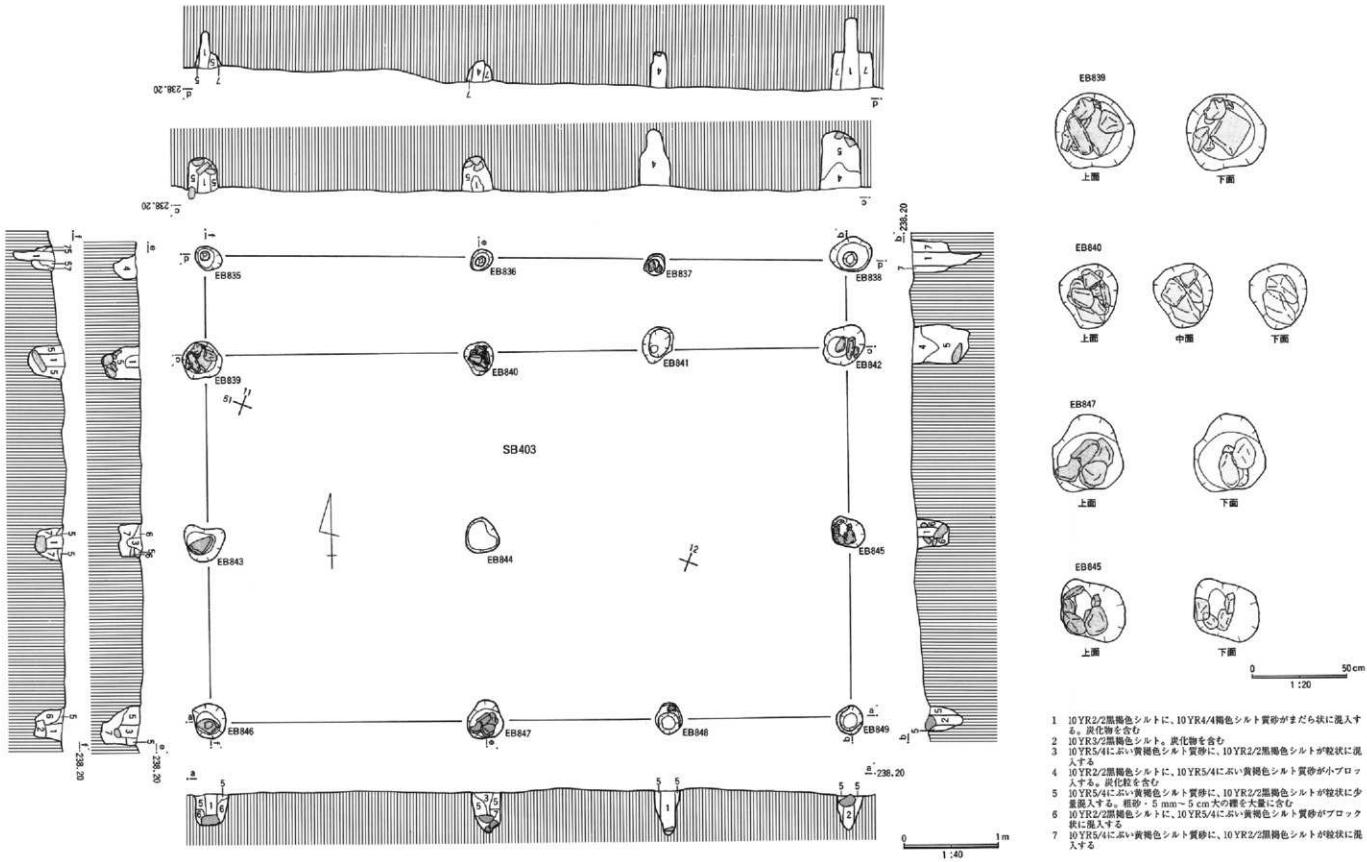
調査F区の13・14-47・48グリッド、S B 401の東側に隣合わせで検出した重複関係にある建物跡である。S B 404は主軸方向がS B 401と同様で、桁行3間、梁行1間の南北棟となる。S B 405は主軸方向N-15°-Wを測る、2間×2間の小規模な建物跡である。S B 404身舎東側において重複するが、柱穴どうしの切り合いがないため前後関係は明確でない。建物の規模はS B 404桁行長6.6m、梁行長3.5m、S B 405は東西・南北とも2.3mである。S B 404桁行の柱間距離は220cmの等間であり、S B 405は110~120cmの間尺を測る。

柱穴掘り方の規模は一定しておらず、一段深くなるアタリ部分を認めるものもある。柱穴プランは長径30cm前後の不整円形か隅丸方形を呈し、深さは16~60cmとバラツキがある。

S B 406掘立柱建物跡（第29図、図版9）

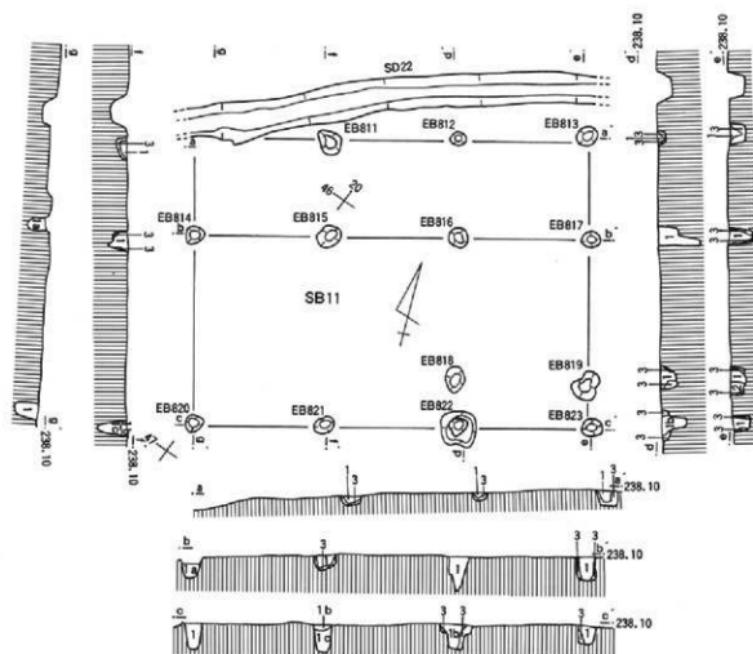
調査F区の16~18-47・48グリッドで検出した桁行3間、梁行2間の東西棟の建物跡である。主軸方向はN-15°-Wで、ほぼS B 11と同じ向きになっている。柱穴の配列が建物東半と西半とで異なって構成されており、2棟の小規模な建物の重複の可能性も考えられる。大きさは桁行長6.3m、梁行長3.8mで、桁行どうしの柱穴列は対応しており、柱間距離は西側から200cm、220cm、210cmを測る。東面梁行はE B 865・866・867間で180cm、200cm間隔となる。

柱穴掘り方の規模は、地山面が低い西側で検出径・深さとも小さくなるが、径40cm前後の隅丸方形ないしは不整円形のプランを持つ。確認面からの深さはE B 868が最深で60cmを測るが、他は20~30cmで一定している。



- 1 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR4/4褐色シルト質砂がまだら状に混入する。炭化物を含む。
- 2 10YR3/2黒褐色シルトに、炭化物を含む。
- 3 10YR5/4(ぶい)黄褐色シルト質砂に、10YR2/2黒褐色シルトが粒状に混入する。
- 4 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR5/4(ぶい)黄褐色シルト質砂が小プロックに入る。炭化物を含む。
- 5 10YR5/4(ぶい)黄褐色シルト質砂に、10YR2/2黒褐色シルトが粒状に少量混入する。5 mm - 5 cm大の礫を大量に含む。
- 6 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR5/4(ぶい)黄褐色ノカル質砂がプロック状に混入する。
- 7 10YR5/4(ぶい)黄褐色シルト質砂に、10YR2/2黒褐色シルトが粒状に混入する。

第28図 S.B.403柱立柱建物跡

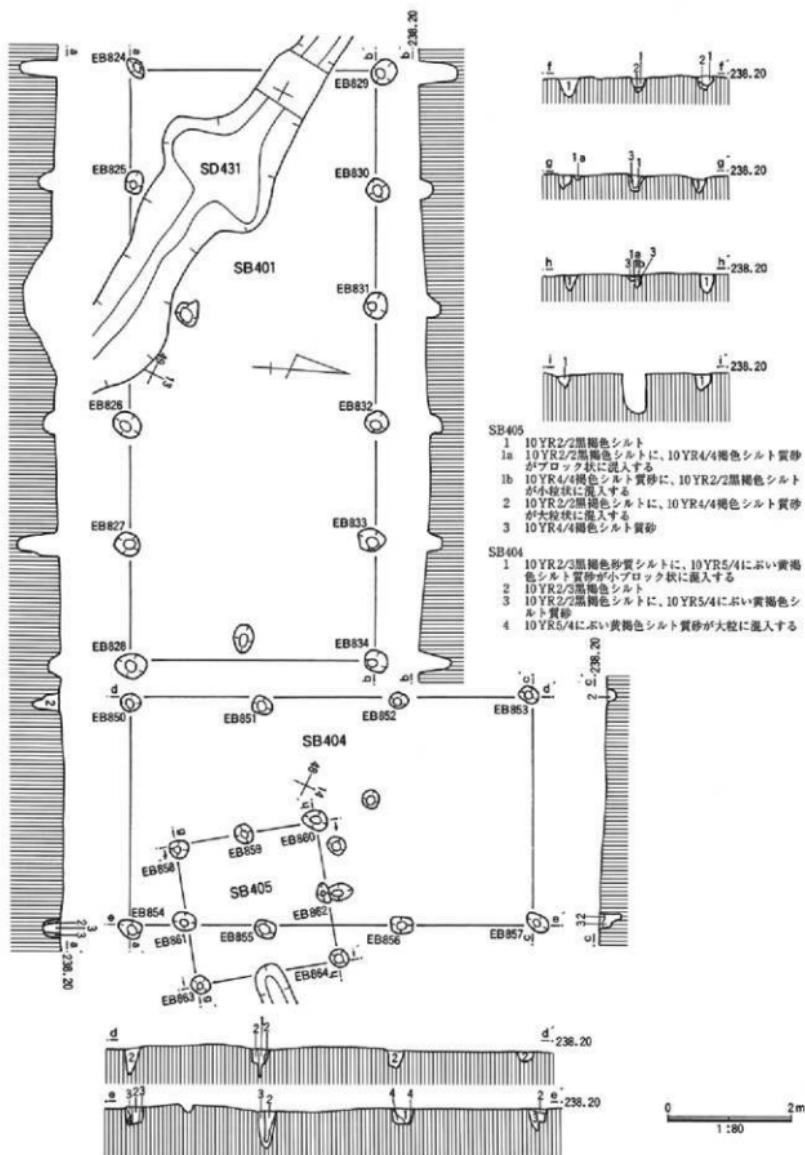


SB11

- 1 10 YR 2/3 黒褐色砂質シルトに、10 YR 4/4 黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
- la 10 YR 2/3 黒褐色砂質シルトに、10 YR 5/5 黄褐色砂質シルトが混入し、5 YR 4/8 布施色砂質シルトが極小粒状に混入する。
- lb 10 YR 2/3 黒褐色砂質シルトに、10 YR 4/5 黄褐色砂質シルトが粒状かつブロック状に混入し、5 YR 8/9 明赤褐色砂質シルトが極小粒状に混入する。炭化物有り。
- lc 10 YR 5/6 黄褐色砂質シルトに、10 YR 4/5 黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
- 2 10 YR 2/3 黒褐色砂質シルトに、10 YR 4/6 緑褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
- 3 10 YR 5/6 黄褐色砂質シルトに、10 YR 2/3 黒褐色砂質シルトがブロック状かつ少量混入する。

0 2m
1:80

第29図 SB11・406掘立柱建物跡



第30図 S B 401・404・405掘立柱建物跡

(2) 井戸跡・土壤 (第31~39図、表6、図版11~15)

1次・2次調査を合わせて、井戸跡・土壤として登録した数は約680基を数える。このうち、水を得るために掘り下げられた井戸跡と考えられる遺構、もしくは形態的にこれらと類似する土壤が約180基存在する。木製品の大半はこれらの遺構内より出土しており、遺存状態が良好な資料として注目される。ここでは、検出された井戸跡・土壤について形態的に分類を行い、遺構検出面以下の地山層序や出土遺物の特徴等について概略を述べる。

形態 (第31図)

井戸跡・土壤は平面形や断面形、それに掘り方の相異による底面や側壁等の形態によって、次の7タイプに分類することができる。

タイプA：平面形は不整な隅丸方形を呈し、開口部からほぼ垂直に掘り込まれて、底面が開口部より大きくなるもの。

S E 728(第32図)でのみ認められる。

タイプB：円形や梢円形状を基調とした開口部から、垂直的な掘り方による円筒状のもの。底面は平坦で、深さが7タイプ中で最大となる。

S E 121・127・336・437等(第33図)がある。

タイプC：不整円形のプランを呈し、掘り方途中に段を形成して掘り下げられるもの。底面は平坦となり、深さはタイプBに比べて浅い。

S E 133・701・707・780等(第34図)がある。

タイプD：平面形は円形を基調とし、掘り方途中の側壁がオーバーハングする形態のもの。底面は平坦である。

S E 23・363・372・589・706等(第35図)がある。

タイプE：円形や隅丸方形の平面形を呈し、掘り方途中の側壁がオーバーハングする形態で、底面が丸底や中央部が落ち込むもの。

S E 340・348・529・537・542・703等(第36・37図)がある。

タイプF：円形・不整円形のプランを呈し、以上のタイプと比べて浅いために土壤として登録した一群のもの。平面規模がA~Eと同様なものをF 1とし、規模の大形なものをF 2として分類しておく。

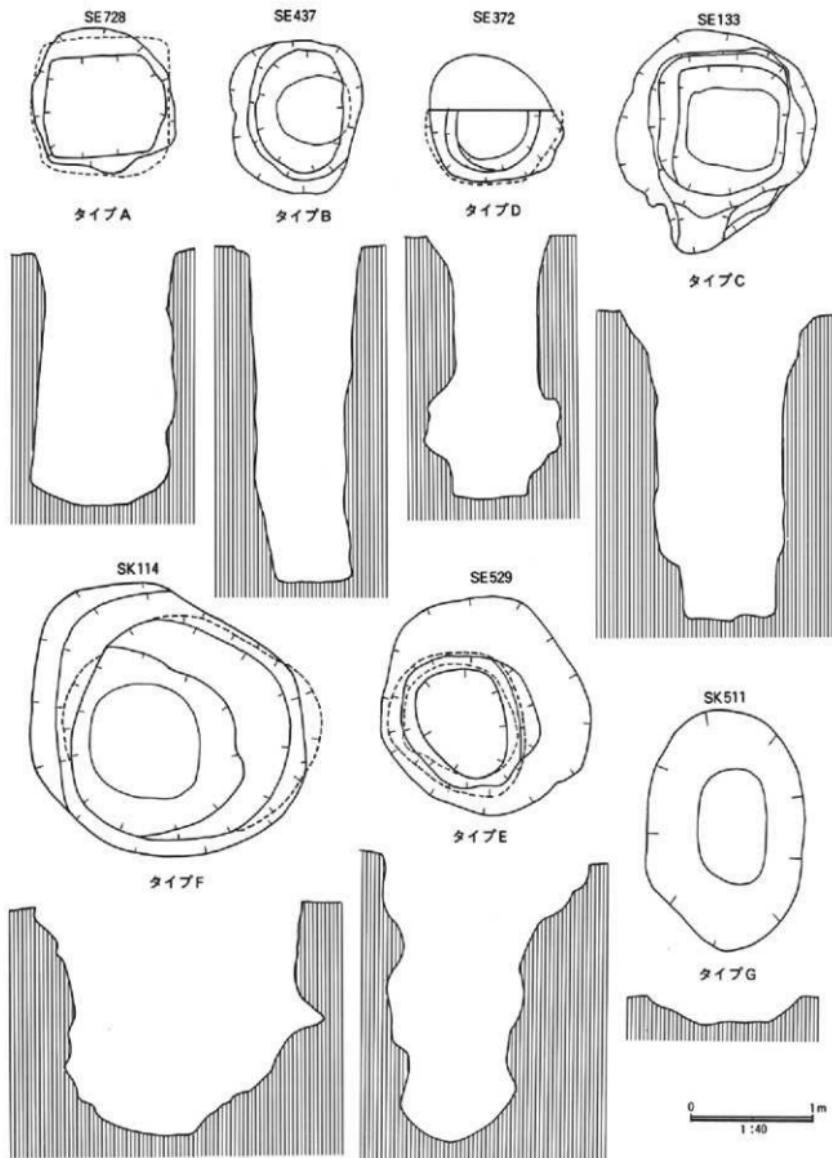
F 1はS E 106・329・341等(第38図)、F 2にはS E 112・114等(第39図)がある。

タイプG：平面形は円・梢円・隅丸方形などがあり、深さ1m未満で、他に比べて浅いすり鉢状や箱形となる土壤を一括する。

以上、7タイプ8類の形態が確認できた。タイプA~Eに属し井戸跡と考えられる遺構約150基のうち、井戸枠施設が遺存するものはS E 133・728の2基にしか認められず、ほとんどが素掘りで使用されたことを窺わせる。

井戸枠施設について

S E 133およびS E 728の2基の井戸に設置された井戸枠は、方形の横桟組に縦板を配する構造である。遺存状況の良いS E 728では、4本の隅柱に一辺約60cmを測る横桟が2段に組まれた状



第31図 井戸跡・土壤分類図

態で検出された。隅柱は底面から約75cm、全体の長さの約4分の1に当たると思われる。縦板は遺存せず、調査の都合上断面観察ができなかったことから断定はできないが、井戸廃棄時に再利用のため持ち出されたと考えられる。SE133においても、SE728と同様の構造を持った井戸枠組と判断できる。土層観察の結果、縦板が腐植して朽ちたような痕跡は認められず、廃棄時点で縦板が抜き取られたものと推察されよう。

地山層序について

2次調査で検出・掘り下げた井戸跡においては、遺構確認面以下の地山層(IV~VII)の堆積状況について、井戸跡周壁で層序実測と土層観察を行った。検出地区により層序やその厚さが異なり、主に砂礫や粗砂層から形成される土壤は、地形的にこの地周辺が河川の氾濫原や後背湿地であったこと、平坦な土地ではなく起伏に富んだ地形であったことを裏付けるものである。井戸跡や土壤はこれらを掘り込んで構築されるが、層序に関係なく一定の深さまで掘り下げた様相が窺い知れる。すなわち、第Ⅲ章で述べたように、粘土層と砂礫層の堆積不整合により滞水層が安定しないため、水脈を追いながら深さを変える必要があったと推察される。

覆土について

井戸跡・土壤に堆積した土は黒褐色を基調としたシルト層が主であり、壁を構成する地山粘土や砂が混入することが多い。遺物を含む土層は、炭化物や拳大の礫が同時に混入する黒っぽい、いわゆる生活排土であり、これがレンズ状に堆積する例が多く認められる。

出土遺物について

井戸跡や土壤では比較的まとまって遺物が出土している。前述したように木製品が多く、遺存状態はかなり良好と言える。遺物出土状況の特徴は、底面に密着して出土する例は少なく、やや浮いた状態のものが多い。これらに完形品ではなく、破損して使えなくなった遺物を遺構廃棄後に捨てたものである。これに対しSE589・706等の底面密着の遺物は、完形もしくはこれに近い状態で出土しており、特に木製品の漆器椀や桶杓・手桶といった曲物類が目立つ。これらは井戸、すなわち水に関連した道具であることから、遺構が機能していた時期の遺物として捉えることができる。

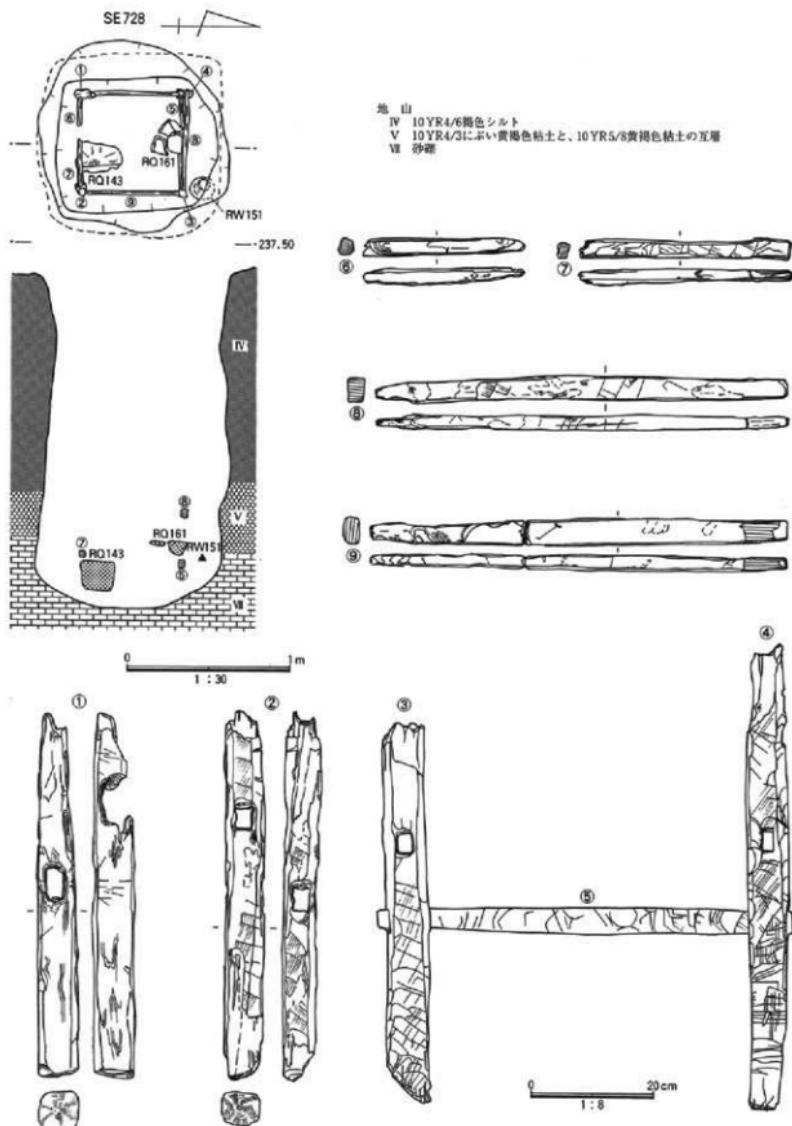
存続時期・同時性について

検出できた150基に及ぶ井戸跡・土壤は同一時期に機能していたわけではないため、これらの前後関係を探ることが重要である。遺構内からは、13世紀~17世紀初頭に位置付けられる遺物が出土している。先に形態的な分類を行なったが、ここでは類似性を追及しただけでそのまま存続時期にまで言及するものではない。出土遺物よりある程度の時期を特定し得る資料も認められ、一部については共存したと思われる遺構を捉えることは可能である。これらを層位的に検討して、他の遺構との関連を探ることが必要であろう。覆土の堆積、すなわち遺構が埋没する過程には側壁の崩壊や自然堆積、それに人為的な埋め立てと、その両者が原因する例がある。土層観察ができた遺構については、人為的に埋められたものはほとんどなく、自然堆積の様相を示すものが大半であった。したがって、同一と思われる層位を結び付けて堆積状況を分析し、遺構の新旧を把握することが今後の検討課題となる。

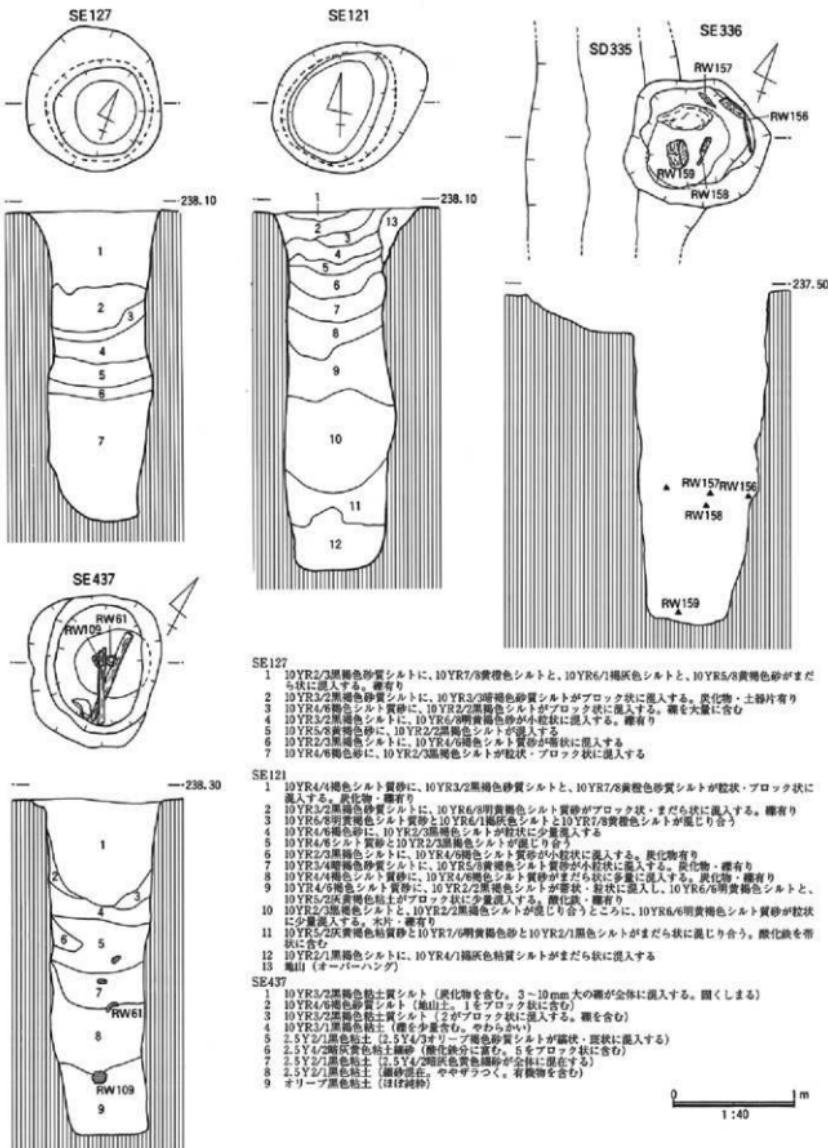
表6 井戸跡・土壤観察表

(単位:cm)

登録番号	検出地区	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	分類	備考
26	20-49	264	203	111		F ₁	10YR3/2黒褐色砂質シルト
54	20-33	109	91	161		D	10YR2/3黒褐色砂質シルト
67	19-31	132	60	49		G	10YR3/4暗褐色シルト質砂
76	19-33	84	62	141	内耳土鍋	E	10YR2/3黒褐色シルト
78	18-34	144	20	59	白磁・内耳土鍋	G	10YR2/3黒褐色砂質シルト
86	17-30	231	148	190		F ₁	10YR2/2黒褐色粘土質シルト
87	16-31	208	64	140		F ₂	10YR2/3黒褐色砂質シルト
118	16-30	122	74	204		E	10YR5/8黄褐色シルト質砂
120	17-32	242	146	182		F ₁	7.5YR4/4褐色シルト質砂
123	18-28	120	92	218	内耳土鍋	D	10YR2/3黒褐色粘土質シルト
327	16-23	114	76	166		C	10YR3/4暗褐色シルト
356	18-13	96	70	202		C	10YR3/4暗褐色粘土質シルト
425	14-45	150	82	111		F ₁	10YR2/3黒褐色粘土
465	15-46	102	76	216		D	
546	11-23	155	131	106	志野瀬反皿	F ₁	10YR2/3黒褐色シルト
548	10-23	173	128	225	砥石?	E	10YR3/2黒褐色砂質シルト
551	6-21	101	51	153		C	
552	6-20	99	72	167	珠州糸すり鉢・石臼	D	
561	7-23	139	98	225	染付皿	E	10YR2/2黒褐色シルト
565	7-22	189	138	203		F ₁	10YR2/3黒褐色シルト
566	9-22	99	64	218	瀬戸天目茶碗・瀬戸皿	E	
578	9-21	126	85	220	かわらけ・土製品・灰	D	
580	8-20	83	79	255	瀬戸灰釉縁折皿・染付椀・白磁	B	
581	8-21	143	73	213	内耳土鍋	D	
584	9-21	89	78	248	砥石	B	
590	8-21	70	59	195		C	
591	9-20	98	70	249		C	
599	12-22	87	67	183	針?	D	
613	11-30	92	54	94		F ₁	
614	11-30	100	90	27		G	
709	13-20	75	52	227		D	
712	13-23	170	147	121		F ₁	10YR2/2黒褐色シルト
713	13-23	213	60	111		F ₂	10YR2/3黒褐色シルト
722	13-12	76	72	200		B	
723	13-11	92	67	218	石臼・砥石	B	
724	13-14	100	76	235		D	
729	13-10	119	78	191		D	
731	13-13	82	75	206	青磁碗・かわらけ・石臼	B	
735	12-12	205	80	25	内耳土鍋	G	10YR3/2黒褐色砂質シルト
740	12-20	89	67	198		B	
741	13-12	98	69	216		D	
746	8-16	152	138	180	砾石・茶臼	F ₁	10YR4/3黄褐色砂質シルト
747	13-12	79	60	184		C	
749	9-17	96	85	212		B	
754	13-13	146	82	217		D	
755	8-18	114	81	226		C	

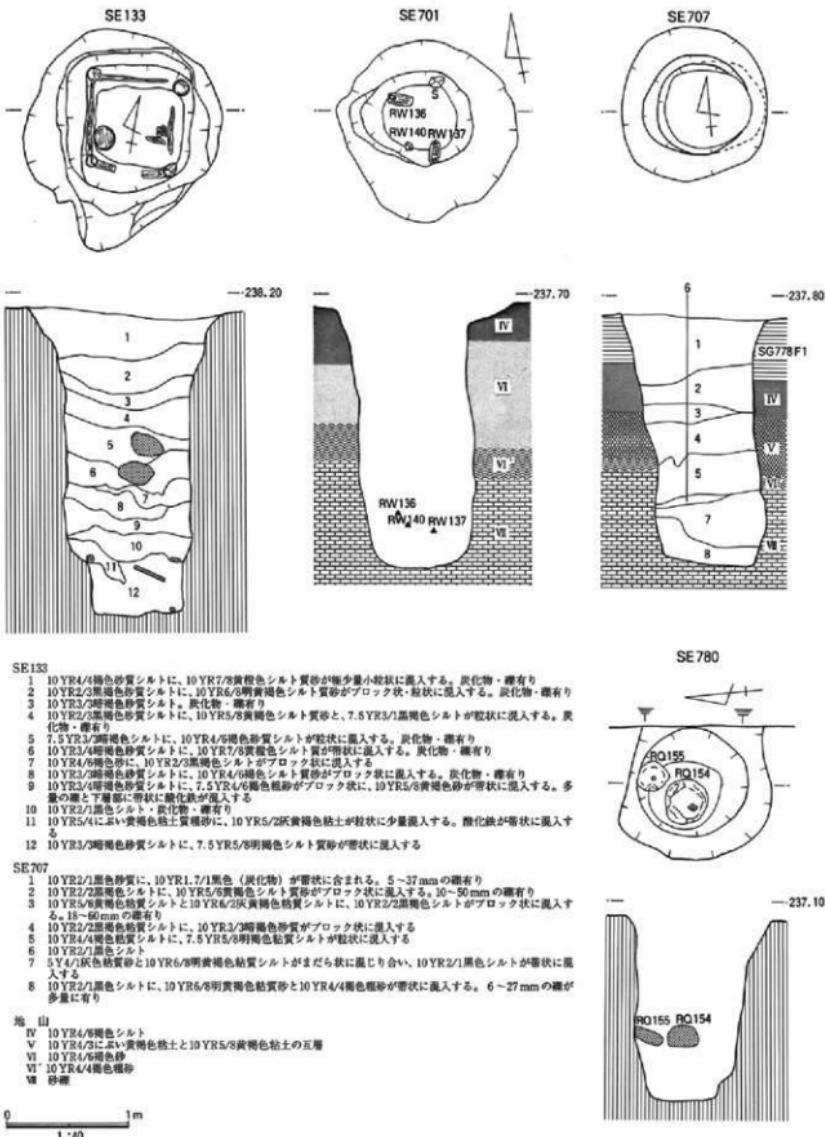


第32図 S E 728井戸跡・井戸枠

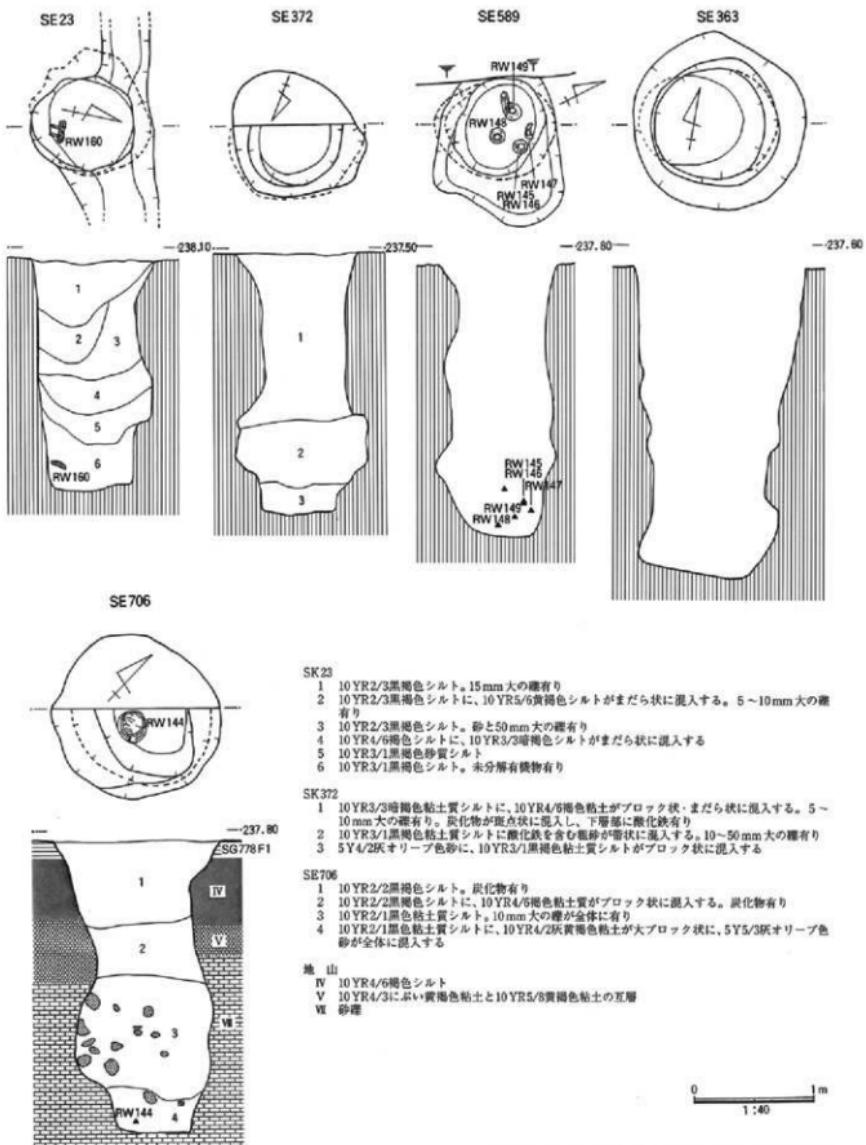


0 1:40 m

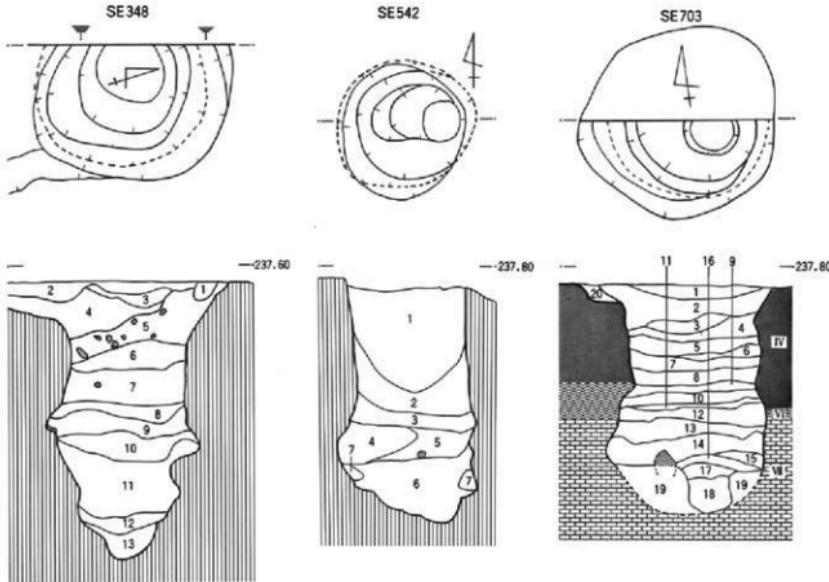
第33図 S E 121・127・336・437井戸跡



第34図 S E 133・701・707・780井戸跡



第35図 S E 23・363・372・589・706井戸跡



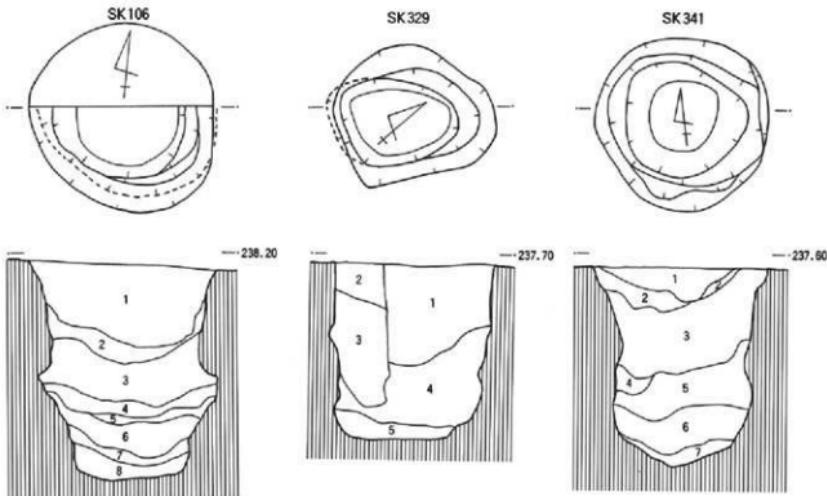
SE542

- 1. 10 YE2/3黑色シルトに、10 YE4/6褐色シルトが斜面に入する。炭化物・礫を含む
- 2. 10 YE2/3黑色シルトに、10 YE4/6褐色シルトが斜面に入する。炭化物有り
- 3. 10 YE4/6褐色シルト・礫を含む
- 4. 10 YE3/5褐色シルト・礫を含む
- 5. 2.5 Y3/1黑色粘土に、10 YE4/6褐色粘土が全体に覆入する
- 6. 2.5 YE1/1黑色土

地 山



第36圖 S.E.348 · 542 · 703井頁跡



SK106

- 7.5YR2/3褐色褐色に、7.5YR断褐色シルトがブロック状に、10Y5/6黄褐色シルト質砂が粒状に、7.5YYR3/4暗褐色シルトがブロック状かつ粒状に混入する。土器片・炭化物・礫有り
- 7.5YR2/2黒褐色シルトに、10Y2/4暗褐色シルトが帯状かつまがら状に混入する。炭化物・礫石有り
- 7.5YR2/3黒褐色シルトに、10Y4/4褐色砂質シルトがブロック状かつ粒状に混入する。土器片・炭化物・礫石有り
- 10YR2/3暗褐色砂質シルトに、10Y5/6黄褐色砂質がまだら状に混入する。炭化物・礫有り
- 10YR3/4暗褐色砂質シルトのプロックと、10Y4/4褐色シルト質砂に二分され、10Y5/6黄褐色砂が粒状に、10YR2/3黒褐色がブロック状かつまがら状に混入する。炭化物・礫有り
- 10YR2/3暗褐色砂質シルトに、10YR2/2黒褐色シルトが一部ブロック状に10Y5/6黄褐色がブロック状に混入する。炭化物・礫石有り
- 10YR5/6黄褐色。炭化物・礫有り
- 10YR2/2黒褐色砂質シルトに、10Y4/4褐色砂がまだら状に混入する。礫有り

SK329

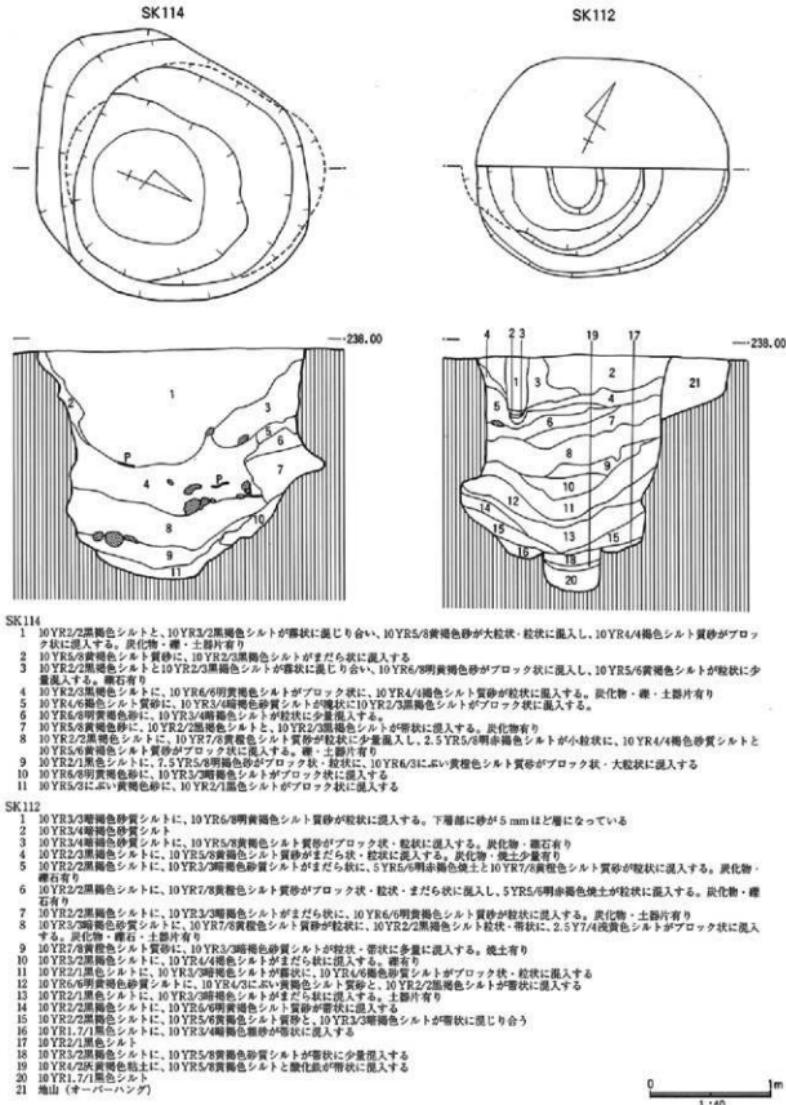
- 10YR3/1黒褐色シルトに、10YR5/8黄褐色砂質シルトと、10YR5/6明黄褐色砂が大粒状に混入する。炭化物・礫を含む
- 10YR2/1黑色シルトに、10YR5/8黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する
- 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR5/6黄褐色砂が斑状に、7.5YR6/8褐色砂質シルトがブロック状に部分的に混入する
- 10YR4/2暗褐色砂質シルトに、10YR6/6明黄褐色砂質シルトがブロック状に、7.5YR6/8褐色砂質シルトが斑状に部分的に混入する
- 10YR5/4に、5.5YR6/6褐色砂と7.5YR6/6褐色砂が混じり合う

SK341

- 10YR3/4暗褐色砂質シルト。炭化物・礫有り
- 10YR3/3暗褐色シルトに、10YR5/6黄褐色シルトが斑状に混入する。炭化物・礫有り
- 10YR3/4暗褐色シルトに、10YR5/8黄褐色シルトが斑状に少しあ入する。礫・大礫が多量に有り。炭化物有り
- 10YR3/4暗褐色シルトに、10YR5/6黄褐色シルトがブロック状に混入する
- 10YR3/4暗褐色シルトに、10YR5/8黄褐色砂質シルトが右部分にブロック状に混入する。炭化物・礫有り
- 10YR3/4暗褐色砂質シルトに、10YR5/6黄褐色シルトがブロック状に混入する
- 10YR4/4褐色砂質シルト



第38図 S K 106・329・341土壤



第39図 SK112・114十倍

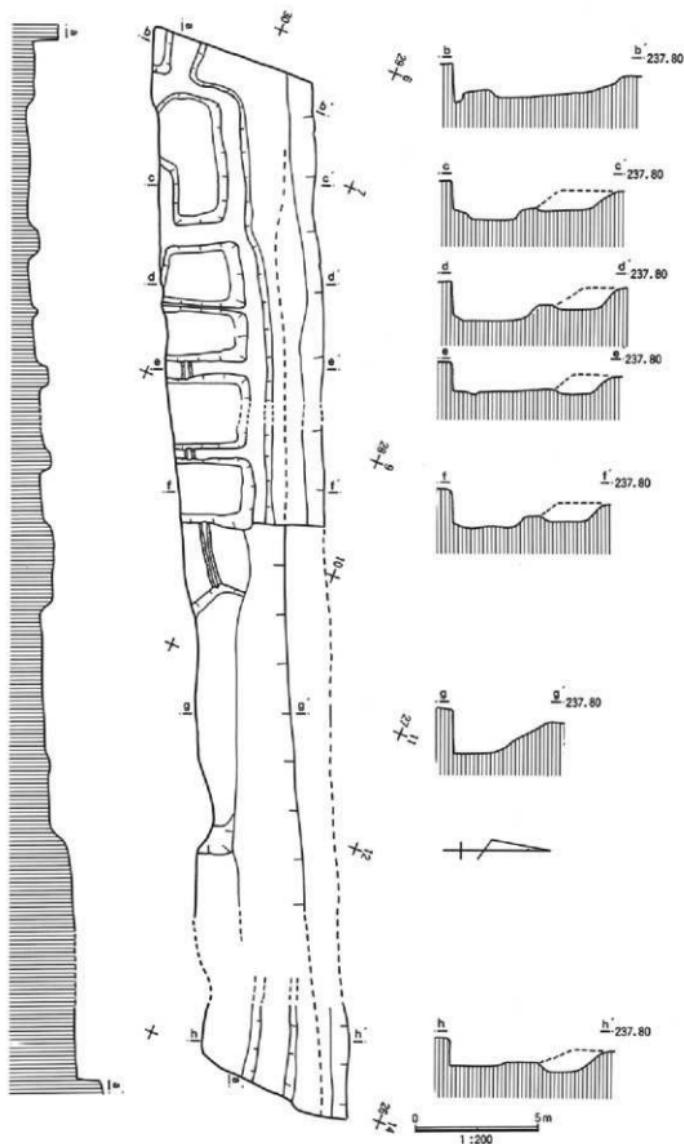
(3) 堀 跡 (第40・41図、巻頭図版1・図版16・17)

S D51・134・308・447は、調査区中央のB・E区をほぼ方形に囲む堀跡である。区画の規模は、堀の外側から外側までで、南北約72m、東西約74mを測る。検出面での堀幅は、東側のS D134が約5.5m、西側のS D447が約5mを測る。北側のS D308、南側のS D51は、現在の水路と重なるため、堀幅は不明である。検出面からの深さはS D51が58cm、S D134が90cm、S D308が95cm、S D447が72cmを測る。S D308の現地表面からの深さは約160cmを測る。堀底は平らであるが、S D134・308は2~3段に掘られる。いずれも最下層には粘質土が堆積し、水堀であったことがわかる。S D51・134・308は直線に掘られるが、S D447は緩やかに蛇行し、自然地形を利用したと思われる。S D134は調査区東端部で東に屈曲し、張り出しを持つと思われる。以下、最も多くの遺物が出土し、特徴的な形態を持つS D308について述べる。

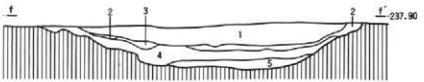
S D308は土層の堆積状況から2時期あることが確認された。古い段階の堀(古S D308)の規模は、底の幅が約1.5m、検出面からの深さが80cm、検出面での幅は床面付近に残存する南壁の立ち上がりの角度からの推定値で2.5m前後を測る小規模なものである。堆積土には地山ブロックが混入し、人為的に埋められている。古S D308の埋没後、より規模の大きい堀がやや南にずれた位置に掘られている。新しい段階の堀(新S D308)は、堀底に高さ20~50cm、幅50~100cmの歓が掘り残され、障子堀状を呈する。堀障子状の施設は西半部で最も遺存状況が良く、3本の歓に仕切られた4つの方形区画を検出した。区画の規模は幅2.5~3mを測る。区画の南側にも歓状の高まりが検出されたが、これが歓となるのか、南側の壁の立ち上がりとなるのかは不明である。それぞれの区画の床面のレベルには差があり、東から2番目の方形区画が他の区画よりも約20cm高くなっている。歓の上部には幅約20cm、深さ約10cmの溝が歓を横切る形で掘られる。方形区画の西側のやや幅の広い歓の上面からは、30~50cm大の碟とともに石臼(RQ133)、石鉢(R Q134)が出土している。西端部では区画が不定型となる。方形区画の東には幅約3mの幅の広い歓が設けられる。それより東には堀障子状の施設は見られないが、A区の掘り下げ部で、わずかに壁面からの張り出しが認められる。同様の施設は、山形県内では庄内地方の藤島城跡(山形県教育委員会1990)に類例がある。

遺物は、古S D308からは青磁碗破片(50-8)等、わずかしか出土しないが、新S D308からは、石臼、石鉢、漆器、瀬戸・美濃皿などが出土している。上層から志野丸皿(47-21~23・26)、戸長里匣鉢(47-36)等が出土していることから、近世初頭には堀としての機能は失われていたと思われる。また、中層から鹿の骨が出土している。下層の粘土層からは用途不明の棒状木製品(57-56・57)が出土している。

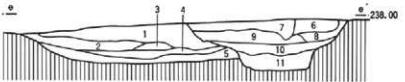
当初、S D51・134・308・447に囲まれるB・E区が館跡の主郭部と考えられたが、地籍図(第4図)を検討したところ、S D308の北側に約200m四方の大区画を確認することができた。新S D308から多く出土する大窯第3~4段階の瀬戸・美濃製品が、S D51・134・447からは全く出土しないことから、古S D308とS D51・134・447が同時に機能し、新S D308は北側の大区画の堀として機能したと考えられる。



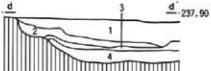
第40図 S D 308堤跡西半部



- 1 10YR2/3黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に多量に混入し、10YR7/1灰白色
- 2 10YR3/2黒褐色質シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入し、10YR7/1灰白色
- 3 10YR3/2黒褐色質シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入し、10YR5/5黄褐色
- 4 10YR3/2黒褐色質シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 5 10YR3/2黒褐色質シルトに、10YR4/6褐色シルトが少量混入し、10YR5/5黄褐色シルトが少ブロック状に数箇所に混入する

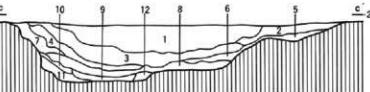
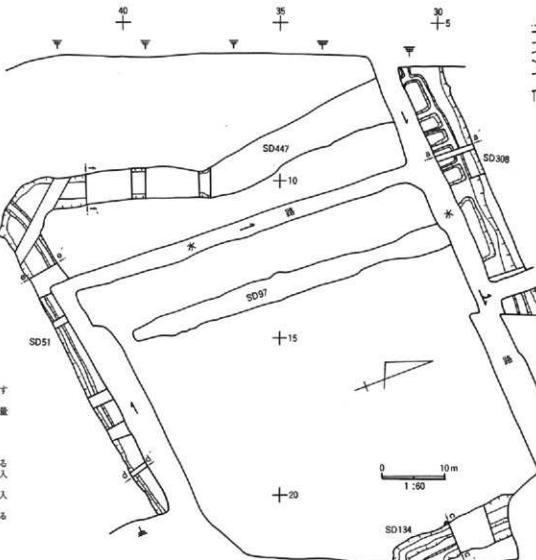


- 1 7.5YR2/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に多量に混入し、10YR7/1灰白色砂が混入する
- 2 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入し、10YR4/4褐色シルトが下層部に少量混入し、10YR7/1灰白色砂が混入する
- 3 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 4 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 5 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが少量混入する
- 6 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に多量に混入し、10YR7/1灰白色砂が混入する
- 7 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 8 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入し、10YR5/6黄褐色シルトが柱状に混入する
- 9 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 10 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する
- 11 10YR3/2黒褐色質シルトに、10YR4/6褐色シルトが柱状に混入する

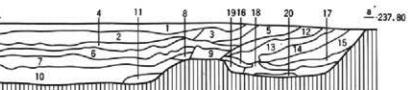


- 1 10YR3/4黒褐色色糞質シルトに、7.5YR5/8明褐色のはげ粘化した有機物が柱状に混入する
- 2 1と同様だが、有機物より多く混入する
- 3 10YR2/3黒褐色色糞質シルトに、同様の有機物が柱状に混入する。2と4の断面移動。灰化鉄有り
- 4 7.5YR2/1黒色粘土に、同様の有機物が柱状に混入する。灰化鉄有り

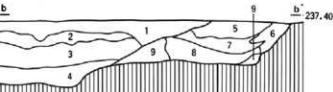
0 2m
1:60



- 1 10YR3/4黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色シルト質砂と、10YR2/3黒褐色シルトが柱状に混入する。小穂有り
- 2 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色色糞質シルトが柱状に混入する
- 3 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色色糞質シルト質砂が柱状かごまだら状に混入する
- 4 10YR3/4黒褐色色糞質シルトに、10YR2/2黒褐色シルトと、10YR5/6黄褐色色糞質シルト質砂が柱状に少量混入する
- 5 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色色糞質砂が柱状に混入する
- 6: 10YR3/4黒褐色色糞質シルトに、10YR6/6黄褐色色糞質砂シルト質砂が柱状に混入する
- 7: 10YR4/6黒褐色色糞質シルトに、10YR2/3黒褐色シルトが、下層部に柱状に混入し、10YR5/6明褐色色糞質砂が大底点状に混入する
- 8: 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR6/6明褐色色糞質砂シルト帶に帯状に少量混入する
- 9: 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR2/2黒褐色シルトがブロック状に混入し、灰化鉄鉱が全体に散在する
- 10: 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、同様の有機物が柱状に混入する
- 11: 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6明褐色色糞質砂シルト質砂が下層部にまだら状に、10YR2/2黒褐色シルトが柱状に、灰化鉄鉱が下部に混入する
- 12: 10YR2/3黒褐色シルトに、10YR5/4にい黄褐色色糞質砂が上部に混入する



- 1 10YR5/2黒褐色色糞質シルト (灰化物を少量含む)
- 2 10YR5/2黒褐色色糞質シルト (灰化物を少量含む)
- 3 10YR3/2黒褐色シルトに、10YR1/1灰色シルトがまだら状に混入し、10YR3/4黒褐色色糞質シルトが柱状に混入する (灰化物少量)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト質砂 (灰化物少量)
- 5 10YR4/6黒褐色色糞質シルト (灰化物少量)
- 6 10YR4/2黒褐色色糞質シルト (灰化物少量)
- 7 10YR3/2黒褐色シルト (灰化物少量)
- 8 10YR4/6黒褐色シルトと、7.5YR5/6明褐色色糞質砂が柱状に混じり合う
- 9 10YR4/6黒褐色シルトと、7.5YR5/6明褐色色糞質砂が柱状に混じる
- 10 10YR3/2黒褐色色糞質シルト (灰化物を含む) 木立を含む
- 11 10YR2/1黒褐色色糞質シルトに、2.5Y/4/2灰褐色色糞質砂が柱状に混入する
- 12 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色色糞質シルトがブロック状に混入する (灰化物含む)
- 13 10YR2/1黒褐色シルトに、10YR4/4褐色シルトが柱状に混入する
- 14 10YR5/6黒褐色シルトに、10YR2/2黒褐色シルトがブロック状に混入する
- 15 10YR2/2黒褐色シルトに、10YR5/6黄褐色シルトが柱状に混入する (遺物含む)
- 16 10YR5/6黒褐色色糞質シルトに、10YR4/2黒褐色色糞質シルトがだら状に混入する
- 17 10YR4/3にい黒褐色色糞質シルトに、10YR5/2黒褐色シルトが柱状に混入する
- 18 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/6黄褐色シルトが柱状に混入する。
- 19 10YR1/7黒褐色色糞質シルトをブロック状に含む
- 20 10YR1/7黒褐色色糞質シルト (灰化物を含む)



- 1 10YR4/4黒褐色粘土シルトに、灰化物を点状に含む。堆積を逆張。根根有り
- 2 10YR4/4黒褐色粘土シルトに、灰化物を点状に含む。堆積を逆張。根根有り
- 3 2.5Y/4/1灰褐色粘土。灰化物を逆張。根根有り。にはぼ泥層
- 4 2.5Y/3/2灰褐色粘土。8.5/4/1粘土層。灰化物を逆張。根根有り
- 5 10YR5/6にい黄褐色色糞質砂シルトに、10YR2/3黒褐色粘土質土質シルトがまだら状に、10YR5/6明褐色色糞質砂シルトがごまだらに混入する
- 6 10YR5/6にい黄褐色色糞質砂シルトと、7.5YR5/1黒褐色粘土質シルトと、10YR6/6明褐色色糞質砂シルトが柱状に混入する
- 7 10YR3/2黒褐色色糞質シルトに、10YR5/1黒褐色粘土質シルトが柱状に混入する
- 8 10YR5/6黒褐色色糞質砂シルトに、10YR6/6明褐色色糞質砂シルトが柱状に混入する
- 9 10YR5/6黒褐色色糞質砂シルトに、10YR2/2黒褐色粘土質シルトが柱状に混入する
- 10 10YR5/6黒褐色色糞質砂シルトに、10YR2/2黒褐色粘土質シルトが柱状に混入する

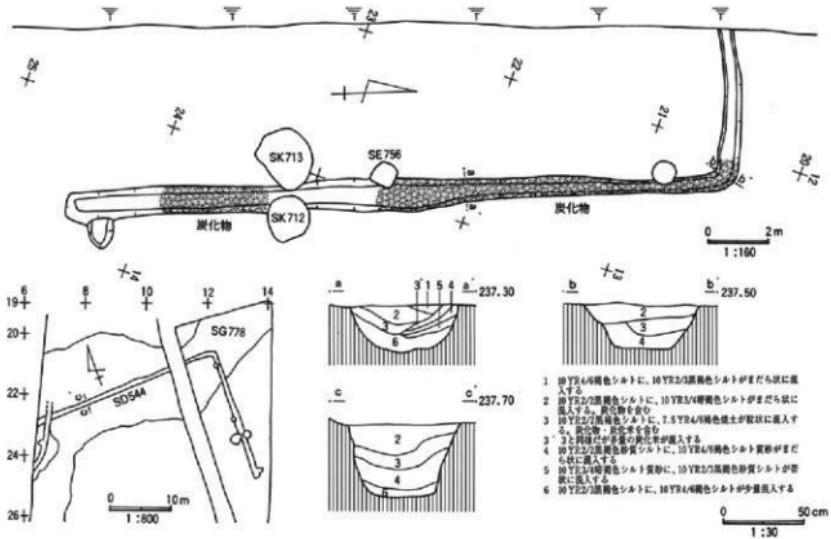
第41図 S D51・134・308・447堀跡

(4) 溝跡 (第42・43図、図版17・18)

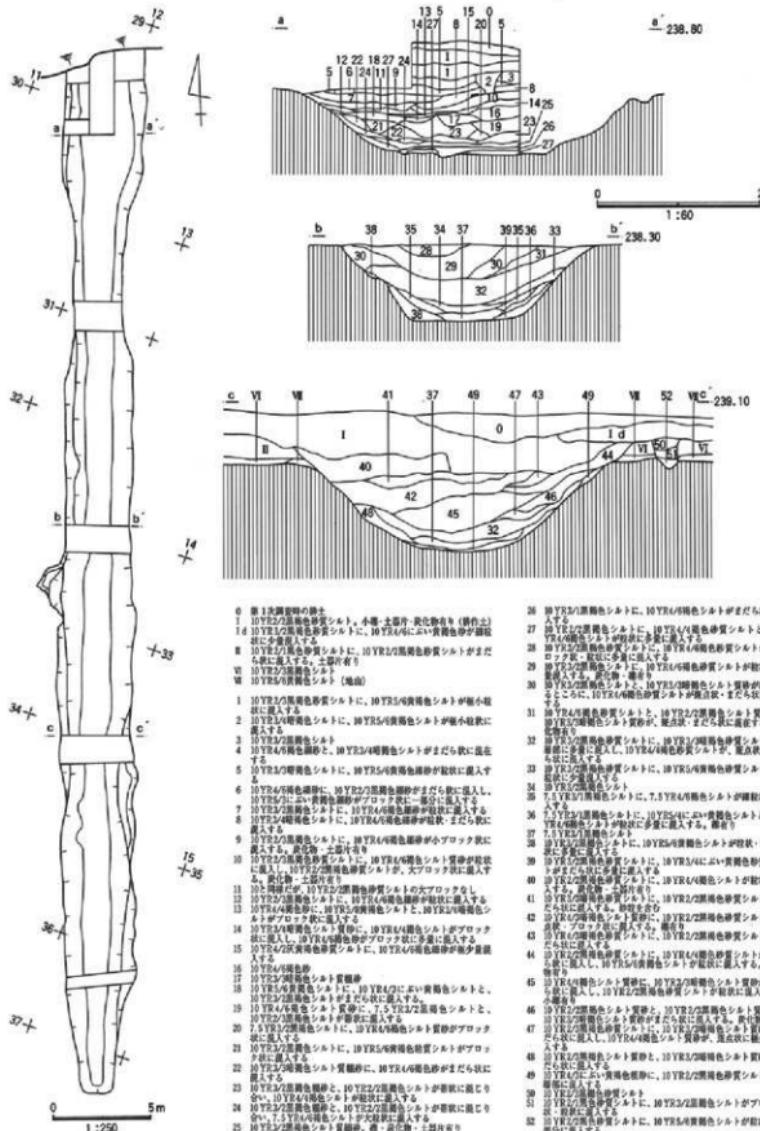
溝跡は46条検出されている。ここでは多量の炭化物が認められたS D544と、内耳土鍋片が集中して出土したS D97について概要を述べる。

S D544はD区南半部において検出された、ほぼ直角に屈曲する溝跡である(第42図)。検出長は東西31m、南北22m、幅50~110cmを測る。SK712、SK713、SE756に切られ、西端でもS D567に切られている。前述の屈曲部近くで瓷器系の壺片と瓦質の擂鉢片が出土しているが、これらを含めて、遺物が出土するのは主に覆土最上層である。覆土中に混在する多量の炭化物はほとんどが炭化米であり、プラン検出時からその塊状のものがいくつか露出していた。この溝は一旦途切れ、約3mを隔して続く。この溝は前述したSD308溝跡と方向を同一にしていることや、溝から数m離れたところに遺構が密に分布していることなどから、土地区画のための溝だったと考えられる。

S D97は南北を主軸とし、ほぼ直線的にのびる(第43図)。長さ約52m、幅150~360cmを測り、検出面から100cmほど掘り込まれている。SK601、SK602を切る。規模的にも位置的にも堀との関連が指摘できる。SD308につながるものと考えられるが、現水路によって妨げられ接続の確認はできなかった。検出北端部の覆土最下層から内耳土鍋を中心の中世の遺物が出土しており、その他同じ層位では須恵器系の壺片も見つかっている。基底面の地山は粗砂である。溝の西側には中世の主だった遺構はなく、溝の東側に偏って井戸跡、土壙が多数存在している。以上のことからこの溝は内堀として中世に機能していたものと考えられる。



第42図 S D544溝跡



第43図 SD97溝跡

(5) 出土遺物

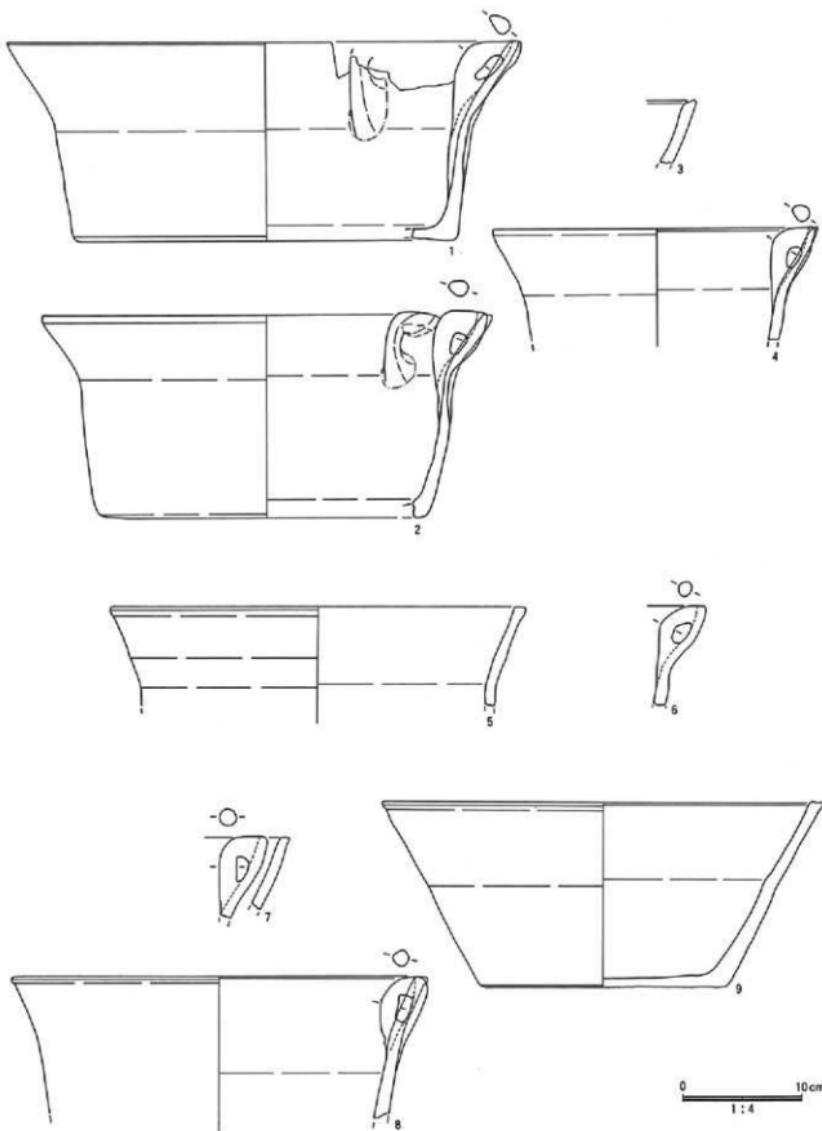
今回の調査では、土器、国産陶磁器、輸入陶磁器、木製品、金属製品、石製品など多様な中近世の遺物が出土し、総点数1,326点(破片数。ただし、漆器、下駄等個体識別の容易なものについては個体数で計算)を数える。その分布は、遺構の分布と同様に調査区北半部に集中する。時期は中世後半から近世初頭を中心であるが、近年まで一部が宅地だったことから、近現代の遺物も219点と相当数出土している。以下、種類ごとに出土遺物の特徴を述べる。

内耳土鍋(第44・45図、図版32・33、表8)

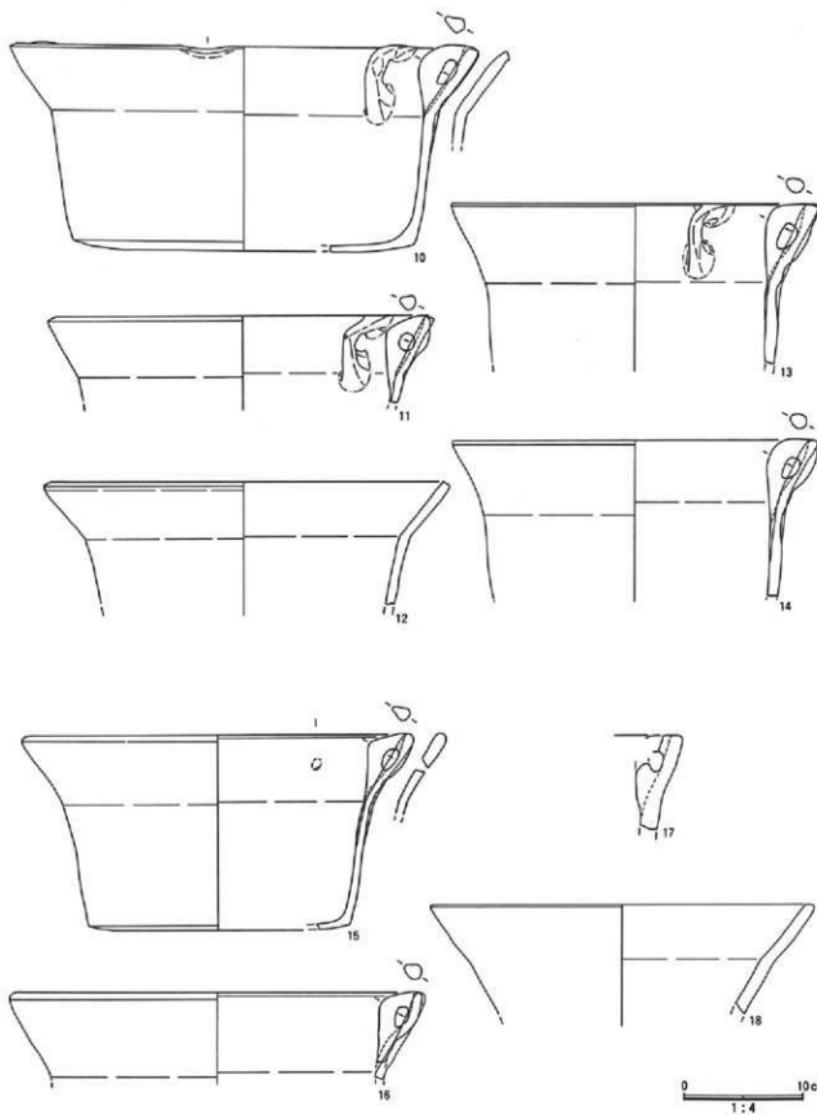
中近世の遺物中でもっとも多く、破片数で513点出土している。器形は、平底で体部がやや外傾し直線的に立ち上がり、底部から約2/3の高さで屈曲し開くもの(1~8・10~17)と、体部が大きく外傾し、屈曲がほとんどなく擂鉢状の器形となるもの(9・18)がある。口径は264~420mmで平均330mmを測る。器高は151~169mmの間で、器高の低い「焰烙型」のものが出現する前段階にあると思われる(浅野1988)。器厚は体部で5~10mmを測り、底部は体部より薄くなる。

口縁部から体部の屈曲点にかけて内面に取手がつけられる。下側の取り付け部は内側にへこみ、上側の取り付け部との間は外側に張り出す。取手は二等辺三角形の頂点にあたる位置3カ所に付く。体部外面に煤の付着するものが多い。口縁部の煤付着部分と付着しない部分の境界は明瞭であり、蓋の存在が考えられる。取手の形状は縦断面が三角形となる。取手上面が口縁部よりやや上に出るもの(2・10)、水平になるもの(1・4・7・8・17)、下に下がるもの(6・12・13・15・16)がある。横断面は卵形、または三角形のものが多いが、円形になるもの(6~8)もある。取手内側に吊り下げによる使用痕は認められず、運搬時にのみ使用されたと思われる。底部外面は被熱しているが煤は付着しない。胎土には砂粒が多く混入する。ほとんどが赤褐色を呈する土師質のものだが、灰色を呈する瓦質のもの(3・7・8)もある。口縁部、取手の形状にいくつかのバリエーションがあるが、これらと器形、焼成技法等との相関関係はみられない。以下、口縁部の形状ごとに個々の特徴を述べる。

1・2は口縁端部が底部と水平になる。1は今回出土した中で最も大形のものであり、口径420mmを測る。3・4は口縁部が鋭角に尖る。4は最も小形のものであり、口径264mmを測る。7・8は口縁部の内側が角張り、外側が丸みを帯びる。9・10は口縁部外側が小さな玉縁状に外側に張り出す。ともに瓦質である。8は屈曲点が明瞭でなく、なめらかに外側に開く。外面の煤の付着はない。9は口縁部外側をつまみ出す。他の鍋と器形がかなり異なるが、外面の煤の付着から、鍋としての使用が考えられる。取手の存在は不明である。10~12は口縁部の内外側の角が直角になり、口縁端部の面は外側に傾く。10は口縁部の一部が片口状にわずかにつまみ出される。12は体部の外傾が大きく、屈曲点からの開きも大きい。13・14は口縁端部が10~12と同様に外側に傾くが、口縁部の角は丸みを帯びる。14の焼成は外面が黄灰色、芯部が暗灰色のサンドイッチ状を呈する。15・16は口縁部が丸みを帯びる。15は口縁から30mm下の位置に直径5mmの穴が、内側から外側に穿孔される。17・18は口縁端部が底部と水平になり、口縁部の内外側が丸みを帯びる。18は9と同様に擂鉢状の器形となる。



第44図 内耳土鍋(1)

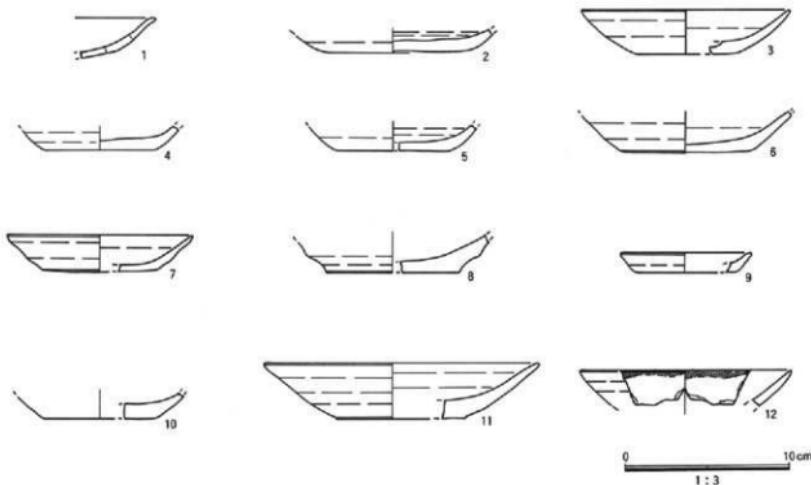


第45図 内耳土鍋(2)

かわらけ（第46図、図版34、表8）

かわらけは破片数で42点出土している。ほとんどが小破片での出土であり、完形での出土はない。包含層、または遺構から単独で出土する例がほとんどで、1つの遺構から複数個の出土は、SE121から8点が出土した1例のみである。口径が70mm前後の小型のもの(9)、120mm前後の中型のもの(3・6・7・12)、180mm前後の大型のもの(11)の3タイプがある。胎土は全般に精製されているが、砂粒の混入するものも認められる。成形技法はてづくねが1点の他はすべてロクロ成形である。

1はてづくね成形のかわらけである。体部と底部の境界が不明瞭で、輪積み痕が残る。口縁部は端反となり、外面のみ約15mm幅で横なで調整が施される。胎土は砂粒が多く混入し、暗灰色を呈する瓦質に近い焼成である。2～4はSE121出土のものである。3点とも外面が被熱している。3はロクロ成形で、やや内弯しながら立ち上がる。4は底部に板目痕が認められる。5は胎土に細砂が混入し、芯部が灰色のサンドイッチ状を呈し、硬めの焼成である。板目痕が認められる。7は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内弯する。瓦質に近い焼成である。底部内面に煤が付着する。8は大きく外反して立ち上がり、底部から約1cmの高さで稜を形成する。9は口径と底径の値が近く器高の低い小型のものである。10は胎土に赤色粒が混入する。11は口径178mmを測る大型のものである。体部は口縁部まで直線的に立ち上がる。内面に煤が付着する。12はやや内弯しながら立ち上がる中型のものである。胎土に砂粒が混入する。口縁部の内外側に煤が付着する。



第46図 かわらけ

国産陶磁器

1) 濑戸・美濃（第47図1～30、図版34～36、表8）

瀬戸・美濃は破片数で57点出土している。窓窓期のものが3点、大窓期のものが54点である。器種構成は窓窓期が卸皿1点、皿2点、大窓期は天目茶碗2点、小壺1点の他はすべて皿である。以下、器種毎に個々の特徴を述べる。時期区分、用語については『瀬戸市史陶磁史編四』（瀬戸市史編纂委員会1993）を参考にした。

1～3は窓窓期の製品である。1は卸皿である。内外面ともに露胎だが、内面に一部灰釉滴が付着する。底部は糸切り痕未調整である。2・3は皿である。2は付高台で、高台内にトチン跡が残る。高台は内側に傾き、高台周辺は釉が薄い。3は器壁を厚くしながら大きく外傾して立ち上がり、最も厚くなったところでさらに外側に開く。口縁部付近の胎土は焼成不良のためか赤褐色を呈する。

4～30は大窓期の製品である。4・6・7は端反皿である。いずれも全面に灰釉が施され、高台内に輪ドチ痕が残る。4は見込みに六花弁の印花が押印される。付高台で、高台先端が摩滅し断面は台形となる。6は見込みの中心から大きくなされた位置に、同心円状の印花が押印される。断面逆三角形の付高台である。7は見込みに釉が厚く溜まり貫入が入る。高台内は段が形成され中央部が凹み、凹部に輪ドチ痕が残る。口縁部に煤が付着する。5は皿である。外面は灰釉が薄く、高台内は露胎となり、輪ドチ痕が残る。断面逆三角形の付高台である。大窓第1段階にあたる。

8・13は天目茶碗である。8は内面、外面上部に厚く鉄釉が施され、下面下部は錫釉が施される。大窓第1段階か。13は薄い鉄釉が施され、高台周辺は露胎である。高台は削り出し輪高台である。胎土は緻密でなく小さな空隙が目立つ。体部外面が一部被熱している。大窓第3段階にあたる。

9～12は折縁皿である。いずれも灰釉が施され、削り出し高台である。9は全面施釉で、見込みと高台内に輪ドチ痕が残る。見込み周辺から体部内面にかけて、同心円状の細かな使用痕が認められる。10・11は見込みに凸部を形成し、釉がぬぐい取られる。10は高台内に輪ドチ痕が残る。被熱している。11は体部内面の釉も一部搔き取られている。見込みと高台内に輪ドチ痕が残る。焼成前に底部を穿孔している。12は体部内面にソギが入る。見込みの釉がぬぐい取られる。9～11に較べ薄手である。被熱しており、釉には細かい気泡が入り、透明感、つやが全くない。漆接ぎ痕が認められる。大窓第4段階にあたる。

14は鉄釉の皿である。見込みと高台内に輪ドチ痕が残る。大窓第3段階か。

15～18は丸皿である。体部外面にはロクロ目が明瞭に残り、口縁部はやや外反する。灰釉が施される。17は削り込み高台で、見込みに凸部を形成し、釉がぬぐい取られる。高台内に輪ドチ痕が残る。18は口縁部に煤が付着し、全体に被熱している。大窓第3～4段階か。

19は小壺である。全面に灰釉が施される。付高台で、高台内に輪ドチ痕が残る。見込み部には厚く釉が溜まり、細い線状の使用痕が認められる。体部過半は丸みを持って立ち上がり、上半部で直線的に立ち上がる。口縁部が数カ所打ち欠かれ、煤とともに赤色の付着物が認められる。

灯明皿、紅皿としての使用が考えられる。

20~27・31は志野丸皿である。口縁部が端反になるもの(20・21・23・24・25・27)とならないものの(22・31)がある。20は削り出し高台で、見込み、高台内に円錐ピン跡が残る。全面施釉だが、高台内は釉が薄く赤みを帯びる。高台は摩滅している。21は削り出し高台で、見込み、高台内に円錐ピン跡が残る。22は削り出し高台で、高台周辺は露胎となる。釉は薄く、黄色味を帯びる。口縁部はやや外反する。23は削り出し高台で、見込み、高台内に円錐ピン跡が残る。体部外面の釉掛けはむらがある。釉の薄いところは赤みを帯びる。24は削り出し高台で、底部に較べ体部が厚い。被熱している。25は削り出し高台で見込み、高台内に円錐ピン跡が残る。胎土は赤褐色を呈する。27は削り出し高台である。31は内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。釉は薄い。28から30は志野菊皿である。29は釉が薄く、体部外面に2条の沈線がめぐる。

2) 戸長里 (第47図32~38、図版36、表8)

米沢市の戸長里窯の製品である。灰白色の胎土に黒色の粒が混入するのが特徴である。破片数で9点出土している。器種構成は擂鉢3点、皿1点、匣鉢5点である。

32・33は擂鉢である。全面に薄い鉄釉が施される。32は口縁が内側に折り返される。口縁端部が摩耗している。一部被熱している。33は口縁部が上下にやや張り出し縁帶を持つ。34は皿である。鉄釉が全面に施される。基筒底風の削り出し高台で、体部外面にはロクロ目が残り、口縁部は端反となる。35~38は匣鉢である。無釉で、体部外面にロクロ目が強く残る。平底である。38は底部外面が被熱している。

3) 唐津 (第47図39~40、図版35、表8)

39・40は唐津の皿である。灰釉が内面、外面上半部に施され、高台周辺は露胎となる。削り出し高台で、口縁部は端反となる。39は漆接ぎ痕がある。40は口縁部に沿って鉄釉が施される。見込みに胎土目跡が残る。

4) 伊万里 (第47図41、図版36、表8)

初期伊万里の皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がりやや内湾する。全面施釉され、豊付けのみ露胎となる。

5) 瓷器系陶器 (第47図42・第48図43~51、図版36・37、表8)

内外面が赤褐色、胎土が暗灰色を呈するもの(43~46・49~51)と、胎土が灰色を呈するもの(47~48)がある。漆接ぎ痕のあるものが多い(44・45・46・50・51)。43~45は同一個体の壺である。46は内外面に漆布が付着する。51は内面に溶けた長石の粒が認められる。

6) 須恵器系陶器 (第48図52~59、図版37・38、表8・9)

52は壺である。わずかに残る肩部に条線状の叩き目が認められる。54は細かい条線状の叩き目が施される。叩き目には木目痕が認められる。

7) 瓦器・瓦質土器 (第49図60~64、図版37、表9)

60は火鉢である。内外面ともに丁寧な磨き調整が施される。61~64は瓦質の擂鉢である。63は赤褐色を呈する土師質のものである。

輸入陶磁器

1) 白 磁 (第50図1~6、図版38・39、表9)

白磁は13点出土している。器種構成は壺が1点、皿が11点、杯が1点である。

1は壺である。内面はロクロ目が残り、露胎となる。2・5は皿である。2は高台の4カ所に抉りが入り、見込みに4つの目跡が残る。胎土は粗く、全体に貫入が入る。被熱している。5は体部下半が露胎となる。森田分類の皿D群にあたる(森田1982)。3・6は端反の皿である。3は全面施釉され、疊付けのみ露胎となる。胎土は緻密である。森田分類の皿E-2・a類にあたる。4は基筒底の杯で体部は外反する。胎土は緻密で、疊付けのみ露胎となる。漆接ぎ痕がある。森田分類の杯E-2類にあたる。

2) 青 磁 (第50図7~18、図版38・39、表9)

青磁は24点出土している。器種構成は碗が14点、皿が3点、水注が7点である。

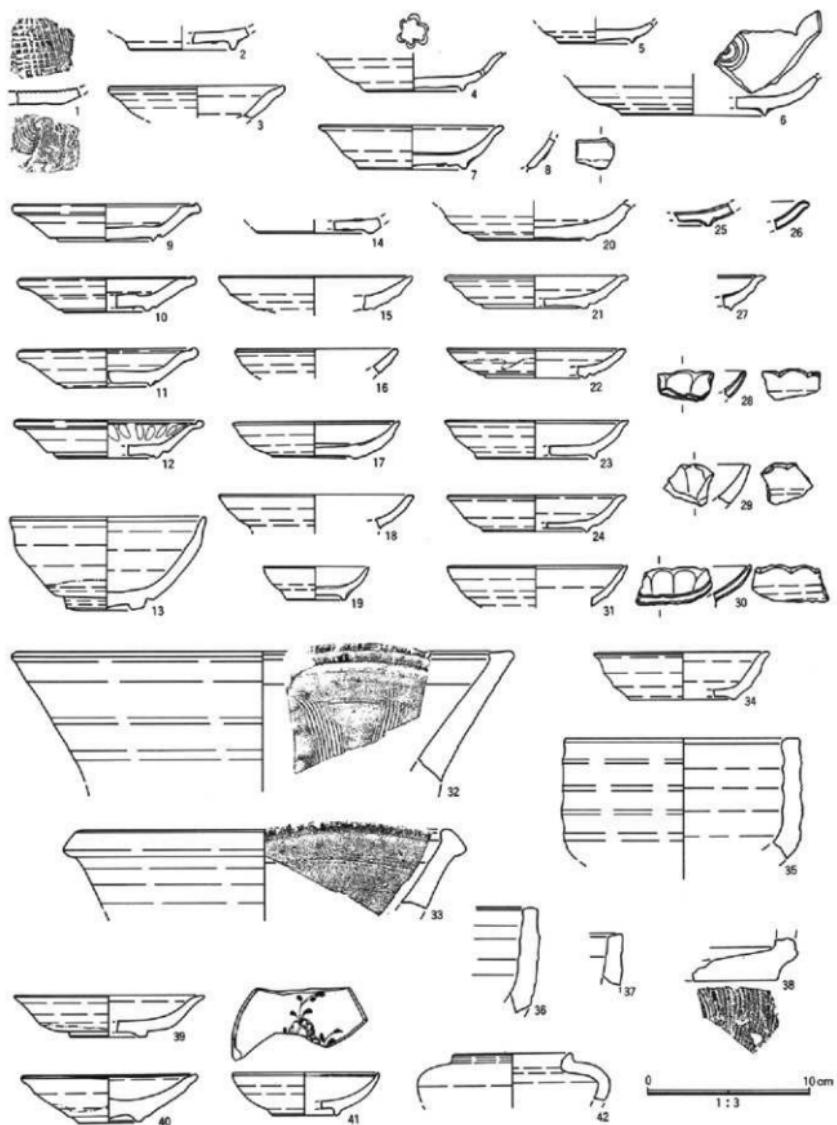
7~10・15・18は碗である。7は片切彫の蓮弁文の碗である。被熱している。上田分類(上田1982)のB II類か。8は口縁部が内弯し、口縁部外面に沈線がめぐる。上田分類のE類にあたる。9・10は口縁部が端反となる。10は釉が薄く、外面にはロクロ目が残る。上田分類のD I類にあたる。15は口縁部がやや端反となる。釉は厚く、胎より厚くなる部分もある。胎土は黒色を呈する。18は外面に鈍い蓮弁を持つ。見込みに印花が押印される。高台外面まで釉がかかり、高台内・疊付けは一部釉が流れるが、露胎となる。上田分類のC II類か。16・17は皿である。16は断面台形の削り出し高台を持つ。高台外面まで釉がかかるが、一部高台内に釉が流れる。高台内に漆書きがある。17は稜花皿である。焼成が悪く胎土は赤褐色から黒褐色を呈する。11~14は同一個体の水注破片である。内外面に施釉され、内面にはロクロ目が残る。外面に綴の沈線(11・12・14)、鈍い蓮弁文(13)が施される。釉には細かい気泡が目立つ。11は注口の付け根、14は取手部分である。高麗青磁か。

3) 染 付 (第50図19~32、図版39、表9)

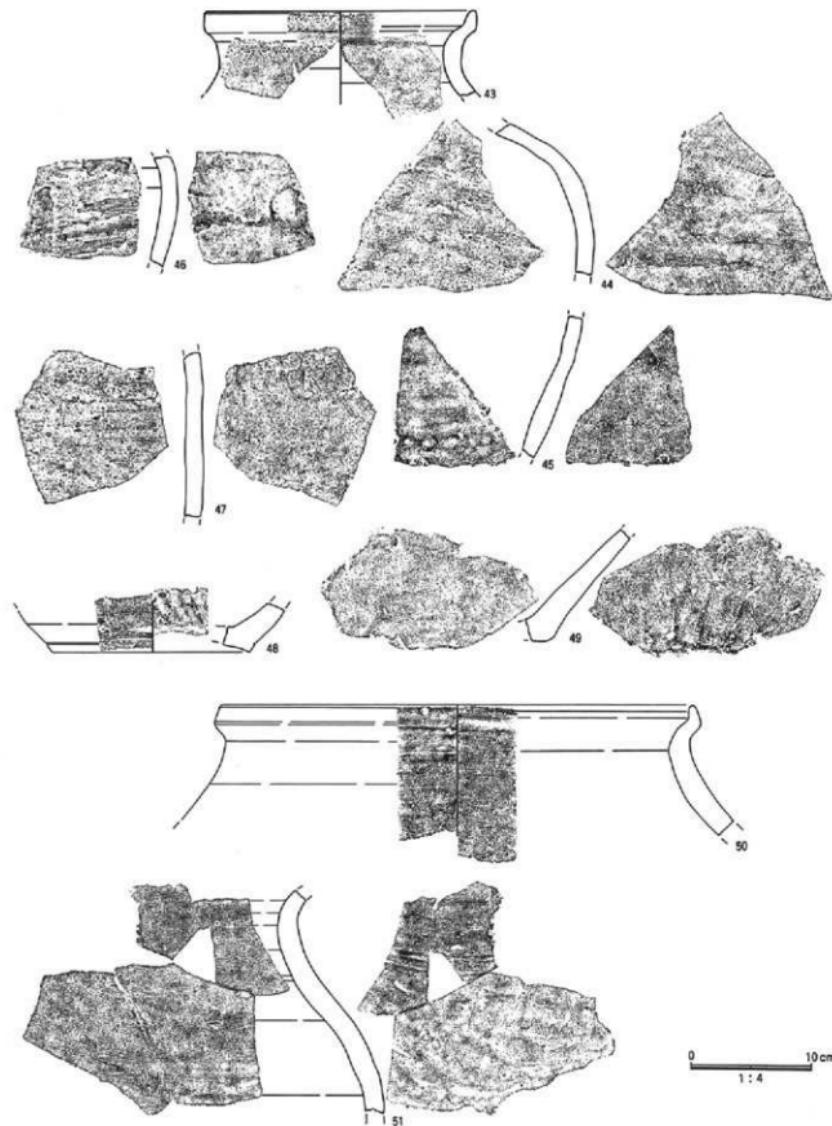
染付は30点出土している。器種構成は皿が17点、碗が13点である。

19~21は端反の皿である。外面に唐草文、見込みに十字花文が描かれる。19は全面施釉、20・21は疊付け・高台内面が露胎となる。21は漆接ぎ痕がある。小野分類(小野1982)のB 1群VI類にあたる。22~24は小破片での出土であるが19~21と同様の器形になると思われる。19は疊付けに砂が付着する。小野分類のB群にあたる。25は口縁部が直線的に立ち上がる。26・27は体部が内弯する器形である。疊付けのみ露胎となる。26は体部外面は無文である。小野分類のE群12類か。28は基筒底で、口縁部が内弯する。釉掛けにむらがあり、口縁部付近の厚さが均一でない。疊付けは露胎である。外面に波涛文、芭蕉葉文が描かれる。小野分類のC群1類にあたる。29は全面施釉である。30は内弯する器形で、内外面に界線が描かれる。31・32は碗である。31は体部に較べ底部が薄く、高台内は露胎となる。内外面に界線が描かれる。貫入が入る。小野分類のB群か。32は外面に渦巻き状の花文が描かれ、内面は無文である。疊付けが露胎となる。染付部の色調は緑色に近い藍色を呈する。

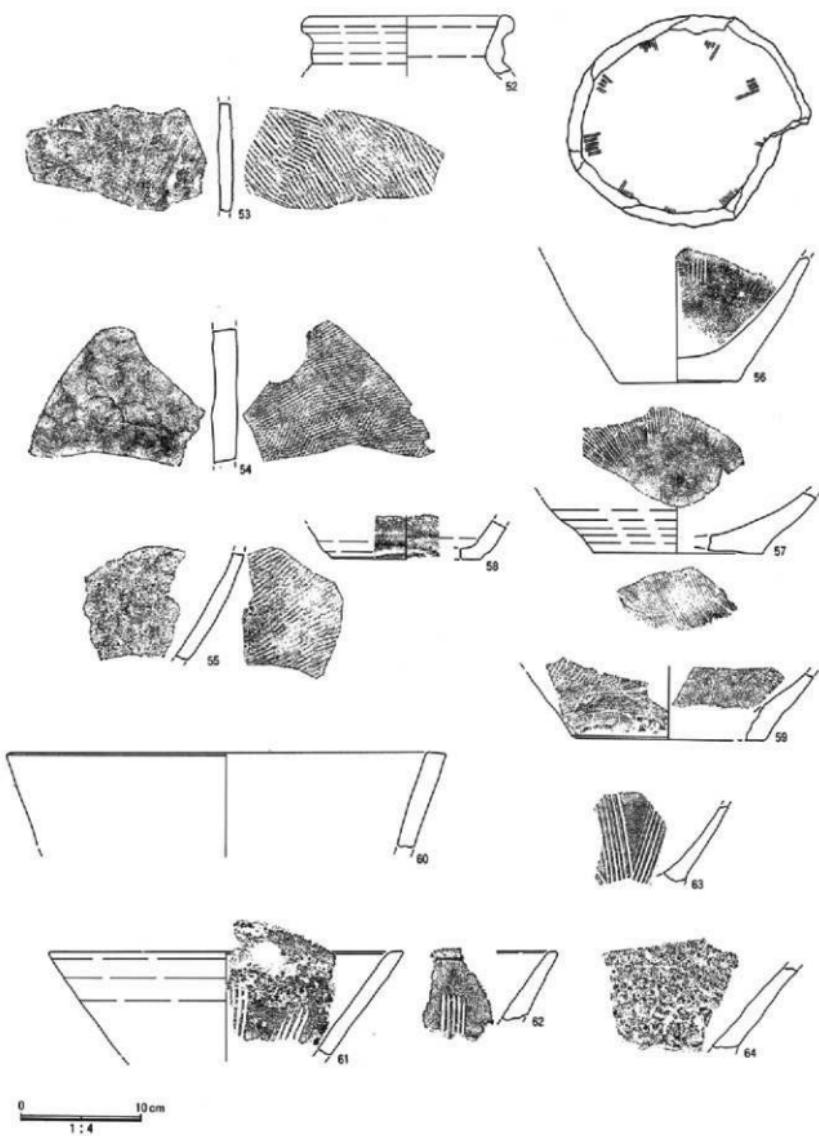
33は天目茶碗である。1点のみ出土している。口縁部が茶色を呈し、鋭く尖る。



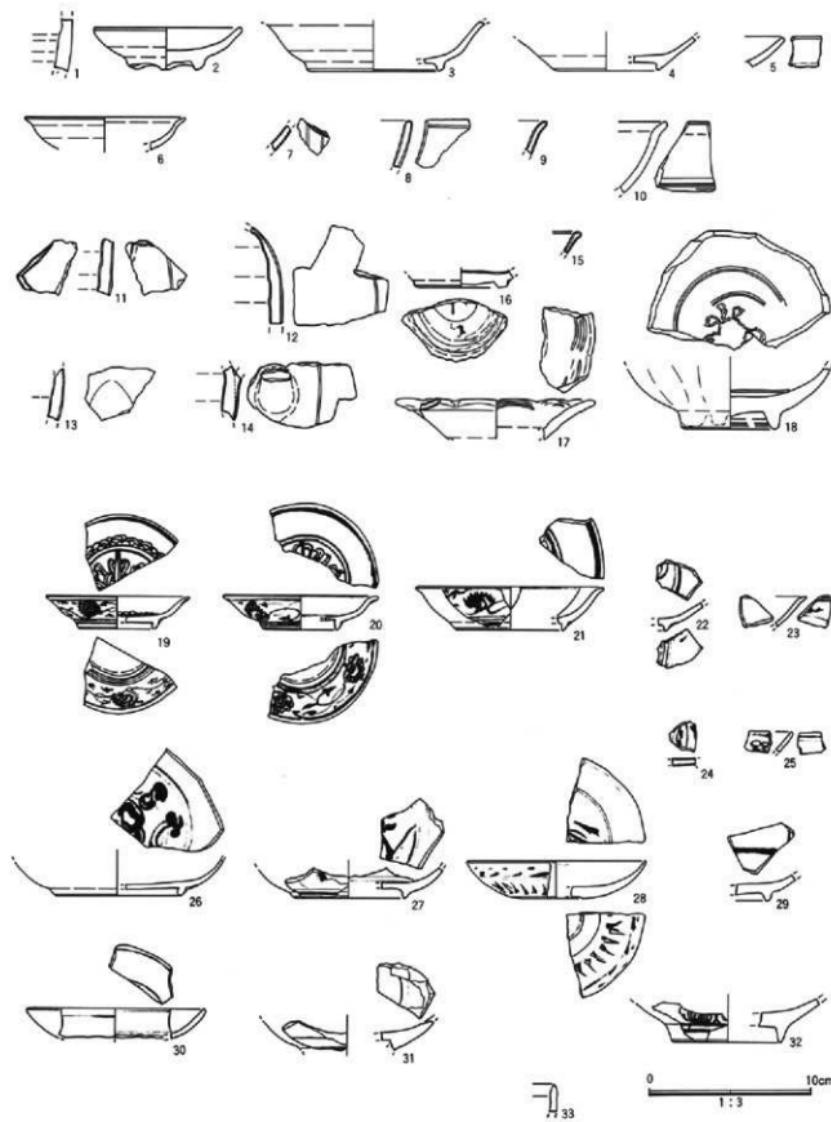
第47図 国産陶磁器



第48図 国產陶器(1)



第49図 国產陶器(2)



第50図 輸入陶磁器

金属製品等（第50・第51図、表7・10、図版40・50）

古銭（第50図1～12）は16点出土している。B区北東隅、SD134の東側に検出したSK259土壌より洪武通寶を含む4枚が一括出土しているが、取り上げに至ることができなかつたため図示していない。この他18-12グリッドの包含層より3枚が出土している。この2例以外は、単独での出土である。10の寛永通寶はSD308堀跡の擾乱部分からの出土である。

第51図1～4は鉄製品である。1は刀子である。鍔以外の身の部分は厚さ3mm、幅17mmを測る。2は断面が中空の長方形を呈する。用途は不明である。3は釘である。長さ40mm、直径3mmを測る。釘と思われる鉄製品はこの他に4点出土している。4は火打ち金である。身の部分の厚さは3mmを測る。上部に穴のあった痕跡がある。

5～7は銅製品である。5は小柄である。鉄製の芯に銅板を巻き付けてある。中央部には飛天の浮き彫りが張り付けられる。飛天の衣、蓮花部分には金箔状の物質がわずかに残存する。以前は飛天の全面に施されていたと思われる。飛天の周囲には細かい魚々子が施される。6はかんざしと思われる。中央部には何らかの装飾を差し込んだと思われる穴があく。7は笄である。6と同様に中央部に穴があけられ、その周囲に細かい魚々子が施される。

8～10は金属加工に関わる遺物である。8は碗型滓である。鉄滓・銅滓は27点出土している。9・10はふいご羽口である。いずれも先端部は融解し一部ガラス化している。ふいご羽口は18点出土している。A・B・D区全体から出土するが15-10グリッドの包含層から10点が出土している。

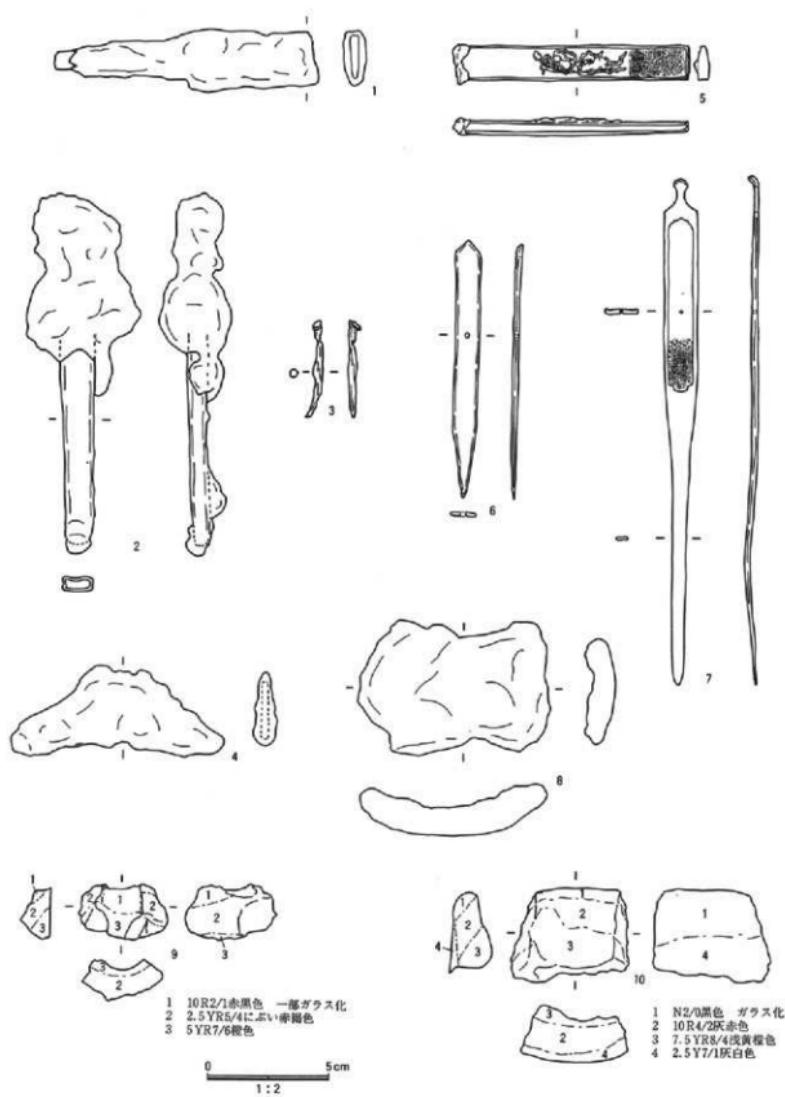


表7 古銭観察表

擇図 番号	銅貨名	初鑄年	計測値 (mm)	出土位置
			直径 厚さ	
52-1	光祐通寶	1086	24	1 12-25G
52-2	元豐通寶	1078	24	1.3 10-15G
52-3	政和通寶	1111	24	1 20-11G
52-4	洪武通寶	1368	24	1 SK353
52-5	永樂通寶	1408	23	1 SK341
52-6	永樂通寶	1408	(24)	1 SK726
52-7	永樂通寶	1408	24	1 18-12G
52-8	永樂通寶	1408	24	1 18-12G
52-9	永樂通寶	1408	24	1 18-12G
52-10	寛永通寶	1656	24	1 SD308
52-11	不明		21	1 SK361
52-12	不明		22	1.5 SP777



第51図 古銭



第52図 金属製品・金属関係遺物

木製品

今回の調査では多種多様な木製品が出土した。ほとんどが井戸跡または堀跡下層の粘質土層からの出土である。遺存状態は全般に良好である。

1) 漆器 (第53図・第54図、図版41・42、表13)

器種構成は、個体数で椀が18点、皿が6点、片口鉢が1点出土している。器形は、高台の高い椀(3・5・11・13・21・22)、高台の低い椀(1・2・4・6・9・12・14・20・23)、器高が低く杯形となるもの(7・8)、皿(16~19)、片口鉢(10)がある。加飾方法は内面赤色漆、外面黒色漆のものが最も多く18点を数える。内外面ともに黒色漆のものが5点である。全て高台内まで漆が塗られる。絵付けは赤色漆で施されるものがほとんどだが、黄漆で施されるもの(3・22)、赤色漆と黒色漆を混ぜ一部に濃淡を表したもの(5~7)がある。赤色漆はベンガラが多く、朱漆の可能性があるのは7・12のみである。赤色漆の同定は四柳嘉章氏の表面観察による。

1は界線の間に笹竹が描かれる。2は界線の間に笹竹と鶴亀が描かれる蓬莱文である。鶴亀は対称となる位置に2単位描かれる。3は鶴丸が三盛で3単位描かれる。鶴丸は黄漆で描かれ、くちばしと足が赤色漆で描かれる。内面には放射状に刷毛目が残る。4は漆膜の剥離が著しく、文様は不明である。土圧によって変形している。5~7は伊達家の家紋である三引両紋が描かれる。三引両紋はいずれも左右の線が弧を描く「しない三引両」で、間に意匠不明の文様が描かれる。1~5・17はS E 589井戸跡からの一括出土である。5の内面には重なって出土した3の高台の跡が残る。8は3と同様の鶴丸が赤色漆で2つずつ2単位描かれる。9は桐(?)が描かれる。10は片口鉢である。注口部は欠損する。界線の間に、中央の線が細い三引両紋が3単位、笹竹、鶴、すすきが描かれる。注口の周囲には雲形文が描かれる。高台内に細線が描かれるが意匠は不明である。11はS E 728井戸跡の掘り方最下層より出土した。外面は漆膜の剥離が著しい。見込みには千鳥とそれを囲むすすきが描かれる。12は界線の間に波瀾文と雲形様の意匠が描かれる。高台内に文様が描かれるが意匠は不明である。13は界線と格子目が描かれる。15は椀の破片である。界線と上向きの千鳥が描かれる。16は千鳥が3単位描かれ、その間をすすき文がうめている。11の内面に描かれたものと文様の組み合わせが共通している。17~19は無文で内外面ともに黒色漆が施される。22は高台内に赤色漆で「完」の字が書かれ、その左上の位置に黄漆で文字が2文字書かれるが判読不能である。24~26は挽物である。外面にはロクロ目が明瞭に残る。24・25は皿である。24は器壁が薄く、土圧による変形が著しい。26は鉢である。25・26は高台の削り出しの形態が類似している。

三引両紋の描かれた漆器は、山形県では大浦C遺跡(米沢市教育委員会1992)、宮城県では仙台城跡(仙台市教育委員会1985)、北目城跡(仙台市教育委員会1993)、下草古城跡(宮城県教育委員会1994)、福島県では川俣城跡(川俣町教育委員会1993)で出土している。中央の線が細い10と同じタイプのものは、大浦C遺跡にのみ類例がある。

2) その他の木製品 (第55~57図、図版43~45、表14)

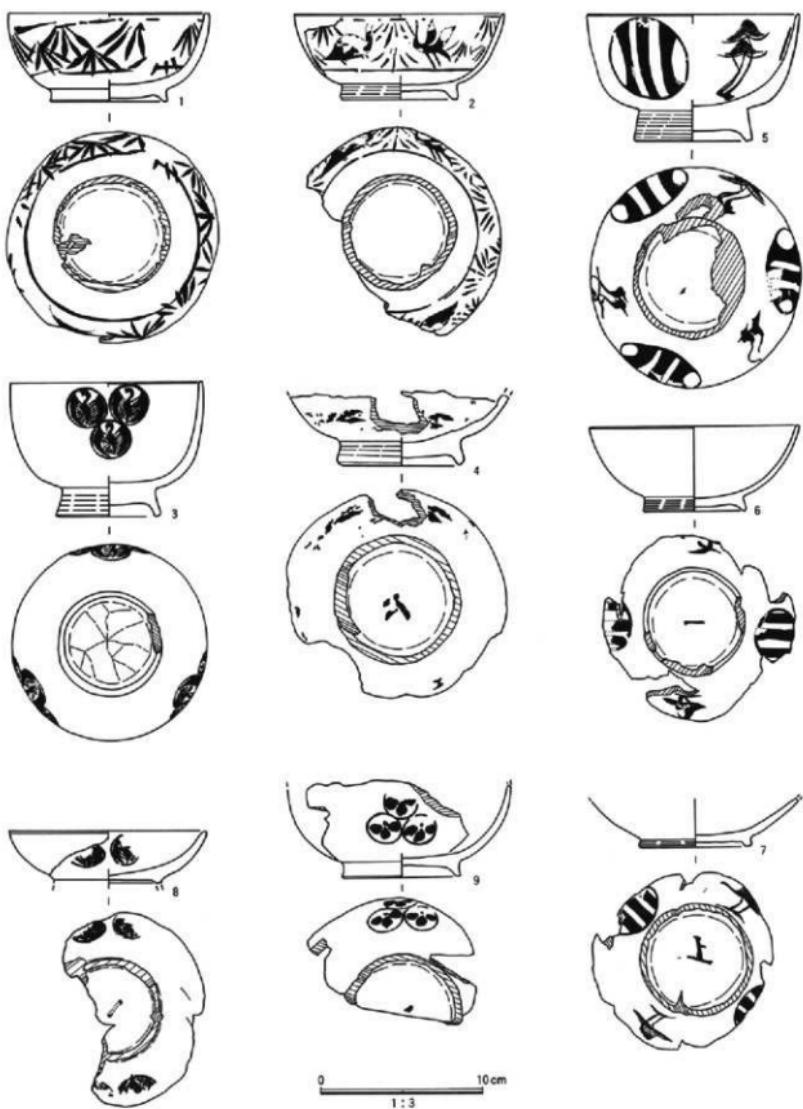
26~34は箸である。完形で出土したものから推定すると、長さ250mm前後、直径5~8mmを測り、断面は梢円形を呈するものが多い。両端を尖らせる。27は中央から折られて出土した。35・

36は用途不明の板状木製品である。いずれも下半部が削られ、取手状の形態となる。35は側面の一方は角を取りし、もう一方を鋭角的に削っている。上部には記号、または絵と思われる墨書きが認められる。取手部は2カ所穿孔されている。37は「小國□□」と書かれた木簡である。上部に穿孔される。38は上端部に墨書きが認められるが、判読不能である。40~43は折敷である。40~42は角を落とし、八角形になると思われる。41は外周に釘跡が認められ、41は木釘が残存する。42は黒色漆が一部に残る。44~46は曲物である。44は下にタガが残る。45・46は小型の曲物である。47~49は曲物底板である。48・49は側面に釘穴が見られ、一部に木釘が残る。50は上端、下端から約3cmの位置に界線状の線刻があり、その外側に不連続に木釘が打たれる。木釘は内面まで貫通しない。推定直径28cmを測る。外面は炭化している。用途は不明である。51は円筒状の木製品である。側面に刃物による傷状の使用痕が認められ、作業台としての用途が考えられる。52・53はへら状の木製品である。53は取手部の付け根に穿孔される。54は横槌と思われる。55は削物の未製品である。上面には加工する位置を示したと思われる線が方形に刻まれる。56~58は棒状木製品である。56は一方の端部をつまみ状に削り出し、もう一方を尖らせる。57は上端部に穴が穿たれる。58は端部が半円状に削られ、その部分が炭化しており、火鑄臼と思われる。中央部に穿孔される。59・60は農耕具である。59はスコップ状となり、内面が一部炭化している。60は鍬である。

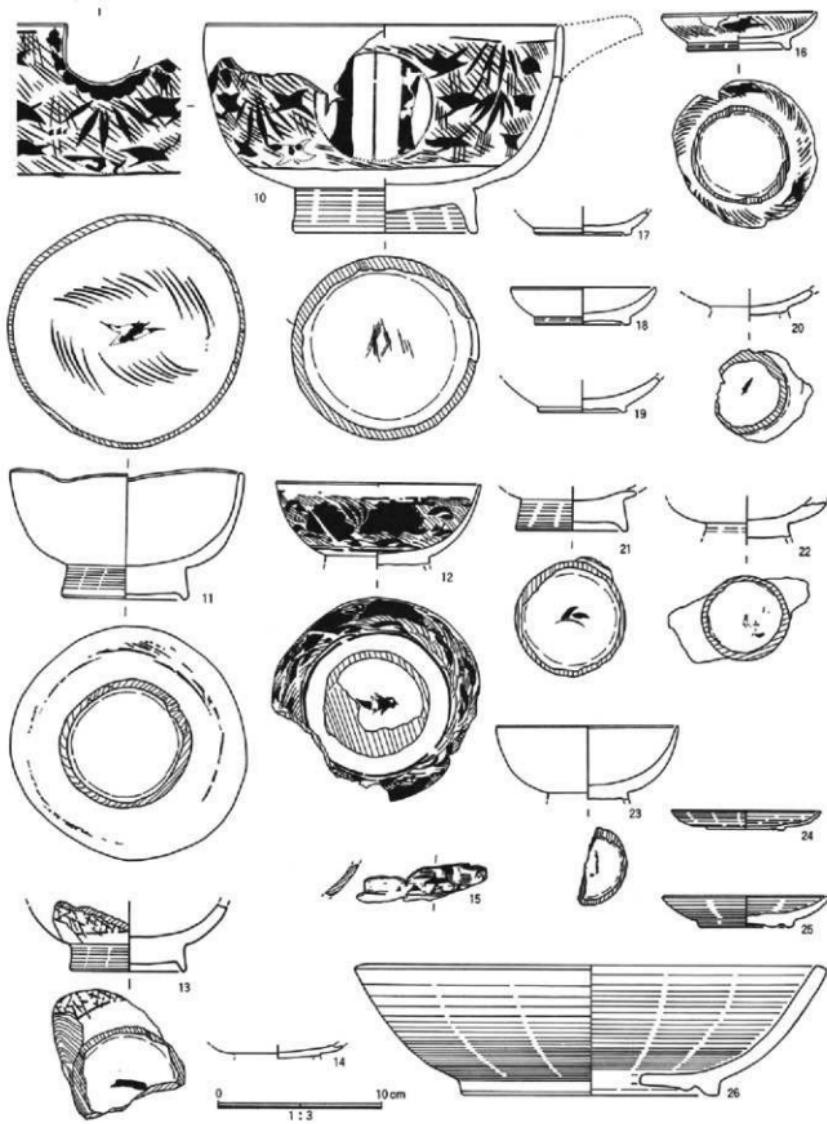
3) 下駄 (第58・59図、図版45・46、表15)

下駄は個体数で13点出土している。単独での出土が多いが、セットになると思われるものが2組認められた。歯先が摩耗し、砂粒がくい込んでいるものが多い。

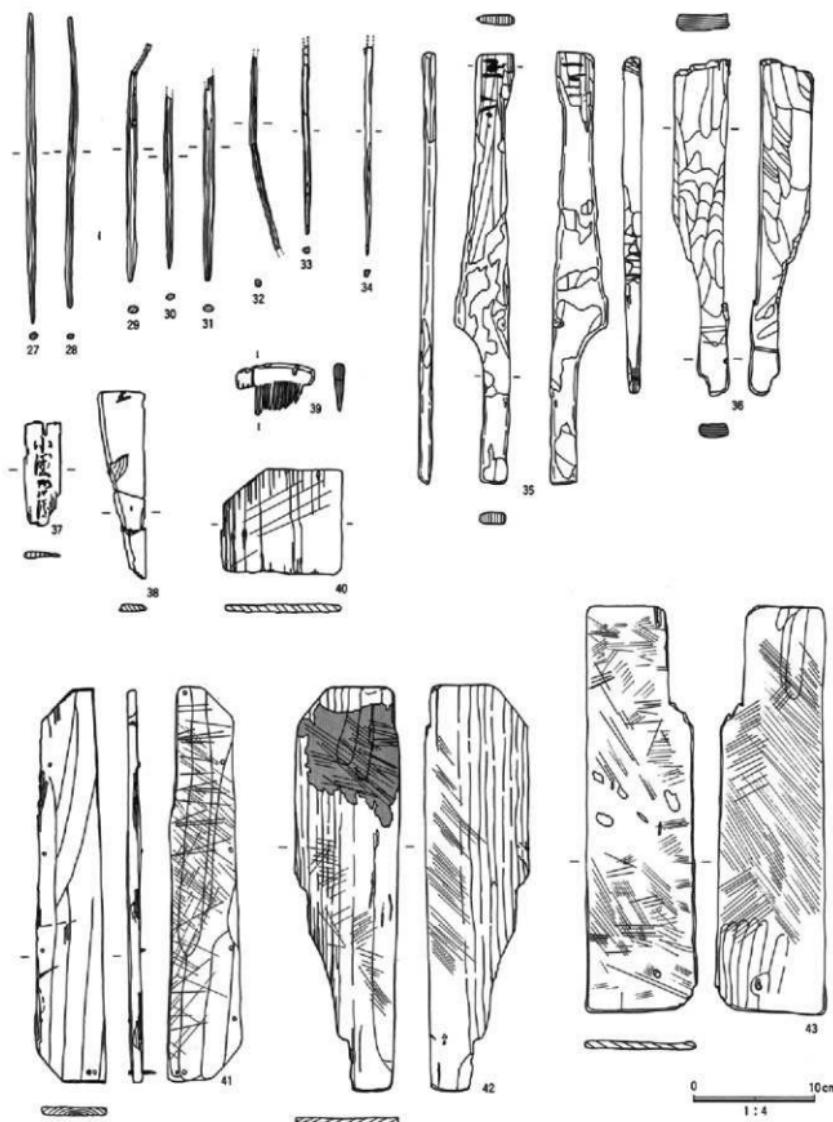
61~63は連歯下駄である。61・62は方形の緒穴が穿たれる。台の前部と後部は半円形を呈する。62は前歯の後方に円形の穴が穿たれる。63は小型品で、円形の緒穴が前に向かって斜めに穿たれる。台部が炭化している。64~70は差歛下駄である。全て露卯である。平面形態は、台の前部が方形、後部がやや尖った半円形を呈するもの(64~68)、前後部とも方形を呈するもの(69・70)がある。64は台部上面に線刻が施される。緒穴の周囲を丸く囲み、全面に斜めの線が認められる。65は後ろのはぞ孔の後方に半菊文、前方に菊花文が施される。後端部には斜め格子が線刻される。台部上面には、はぞ孔の幅で前部から後部にかけて線刻され、前端部の折れ線状の線に連続する。台部下面には、台前後部は前緒穴の幅で2本縦線が刻まれ、台中部は後緒穴の内側の線を延長した線が刻まれる。加工の基準とするための線か、装飾かは不明である。66は歯が欠損している。66・67は、ともにSE701井戸跡からの出土であり、計測値がほぼ同様の値を示すことからセットになると考えられる。斜め格子文様の呪術的性格(四柳・下村1996)から、片方にのみ線刻が施されることが注目される。67は台後部に斜め格子、中部に葉、前端部に沿って線が刻まれる。68は同タイプの他のものに較べやや小型である。69・70は、ともにSE371井戸跡から出土しており、緒穴の形態がやや異なるが計測値は似た値を示しており、セットになると考えられる。69は緒穴が台下面で方形を呈するのに対し、70は上下面ともに円形を呈する。



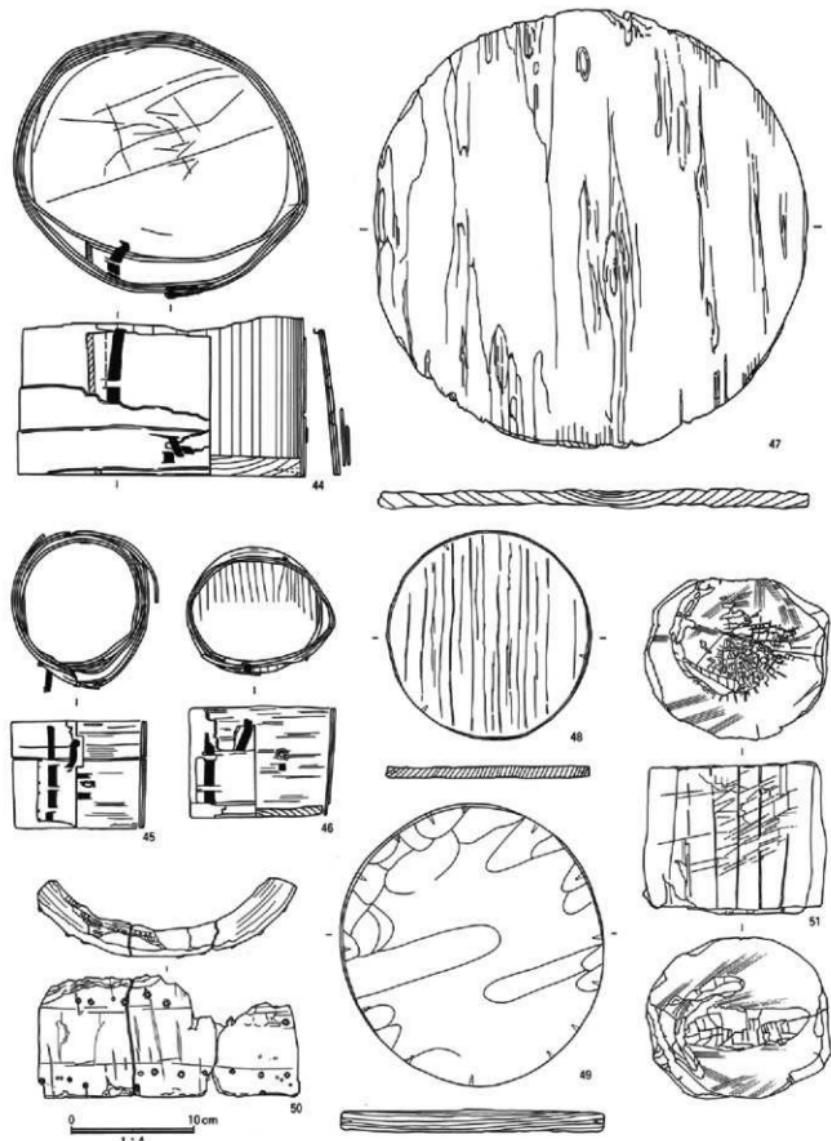
第53図 漆器(1)



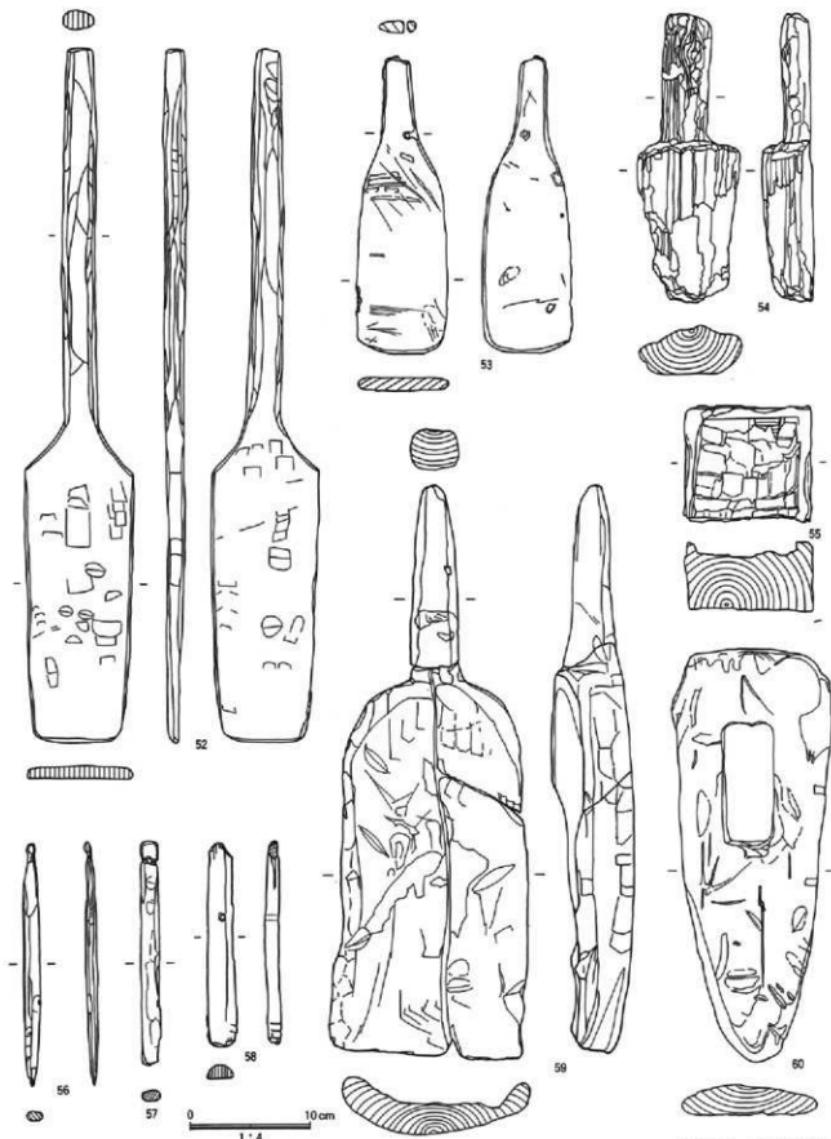
第54図 漆器(2)



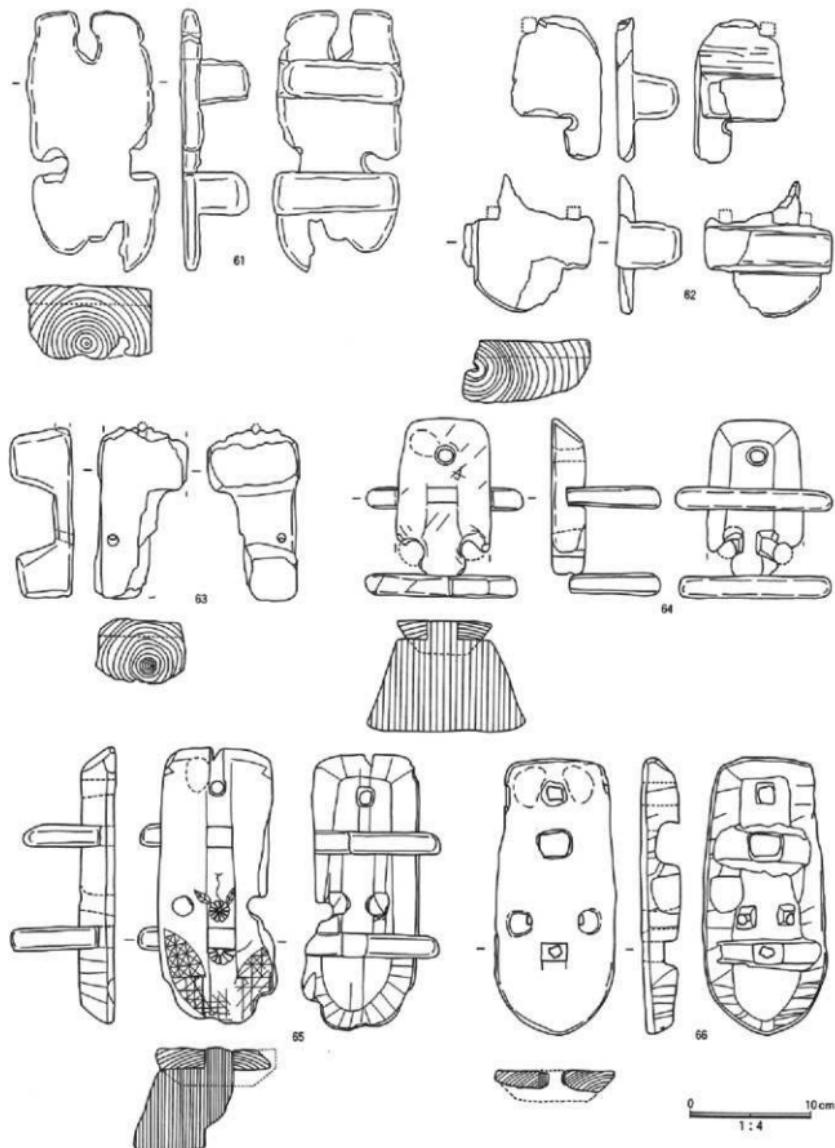
第55図 木製品(1)



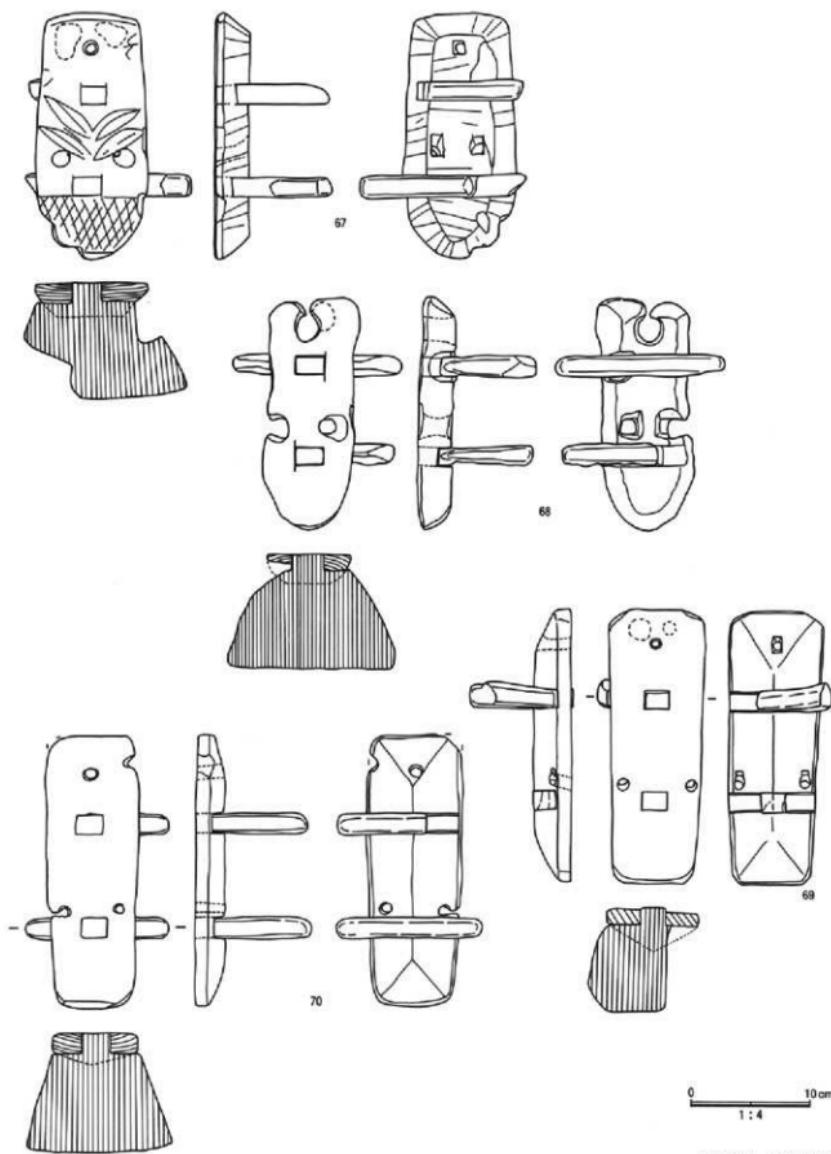
第56図 木製品(2)



第57図 木製品(3)



第58図 下駄(1)



第59図 下駄(2)

石製品・土製品

1) 石臼 (第60図1~8・第61図9~21、図版47・48、表12)

石臼は上臼が10点、下臼が9点、茶臼が5点出土している。上臼と下臼の比はほぼ1:1であるが、上臼と下臼のセット関係のわかるものはない。茶臼は下臼のみの出土である。摺り目のパターンは確認できるものだけで、6分角が1点(8)、8分角が2点(2・13)、放射状が7点(3・9・12・15・18~20)を数える。

1は大型のもので、供給口の直径が約6cmを測る。挽手孔が2カ所に穿たれる。2は8分角で6条の副溝を持つ。1・2とも上縁部が打ち欠かれている。3は挽手孔の深さが6cmを測り、ふくみが大きい。8は6分角である。副溝に切り合いが認められ、目立てをしたと思われる。9~15は下臼である。9・10は摺り面の周縁部が平らになる。9~12はよく使われており、摺り面が斜めになっている。10はS P 379の底面から出土した。単独のピットであるが、根石と考えられる。14はS B 403掘立柱建物跡の根石に転用されている。15は摺り面が平らで、ふくみがほとんどない。下臼に造り付けの受け皿が付くものを茶臼と分類した(16~20)。底部にはノミによる加工痕が明瞭に残る。摺り目は全て放射状である。

2) 石鉢 (第61図21・第62図22~27、図版49、表12)

個体数で8点出土している。器壁が厚く内湾または直線的に立ち上がるもの(22・24・26・27)と、器壁が薄いもの(23・25)がある。21は小型の石鉢である。23は口縁部が鋭角的に尖る。底部中央部で器壁が最も薄くなる。外面は被熱しており、内面には黒色の付着物が認められる。24は片口鉢である。26は内面下半部が摩耗している。

3) 五輪塔 (第62図28・29、図版49、表12)

28は火輪である。摩滅が著しい。29は地輪である。上面中央部がややへこむ。

4) その他の石製品 (第62図30~35・第63図49~52、図版49・50、表12)

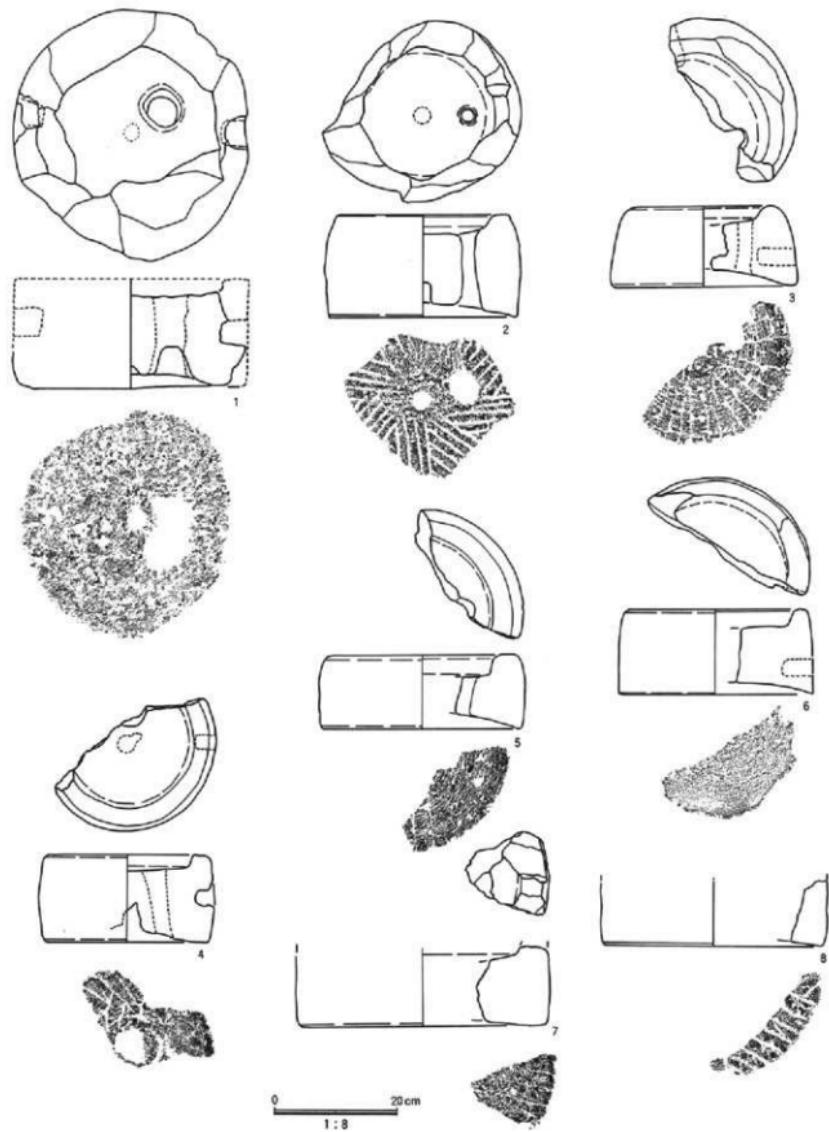
30・31は中央部にくぼみを持つ石製品である。くぼみの形態は、直径6~7cm、深さ1.5~2cmの半球状となる。内面は摩耗している。30~34は棒状の石製品で、両端または片方の端部に敲打痕が認められる。33は敲打部に液体が付着していた痕跡がある。35は石硯である。両面に陸部と海部を作り出しているが、使用痕が認められるのは片面のみである。49は蓋である。50は角形の鉢である。底部内外面、口縁部の一部に煤が付着する。51・52は円盤状の製品である。S E 767井戸跡から3点出土している。52は片面中央部を方形に彫り込む。

5) 砧石 (第63図36~48、図版50、表12)

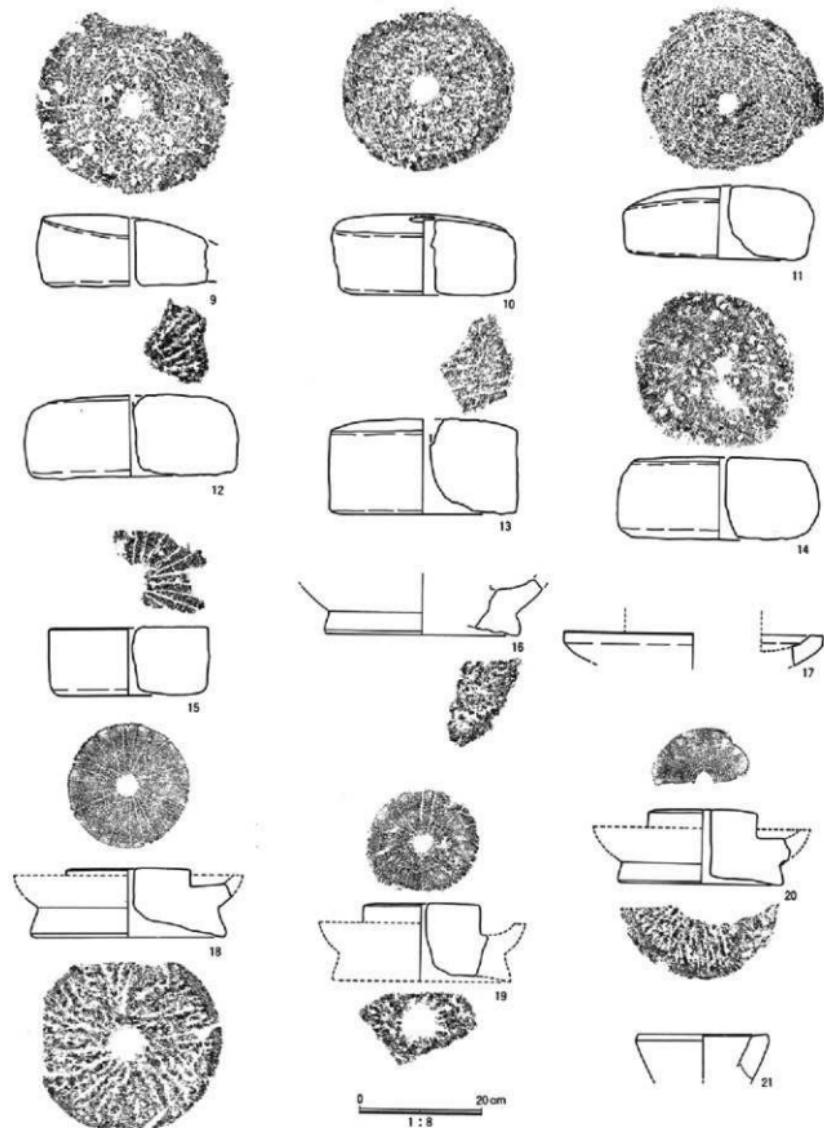
砥石は26点出土している。形態は柱状、板状、不定形、小型品等がある。39は大型の柱状のタイプで、他のものに較べ石質が粗く、粗砾と考えられる。研ぎ面の一部が幅約2cm、長さ5cm程くぼんでいる。46は断面6角形を呈するが、使用しているのは1面のみである。45・48は両面または周囲から切り込みを入れ、そこから折った痕跡がある。

6) 土製品 (第63図53・54、図版49、表12)

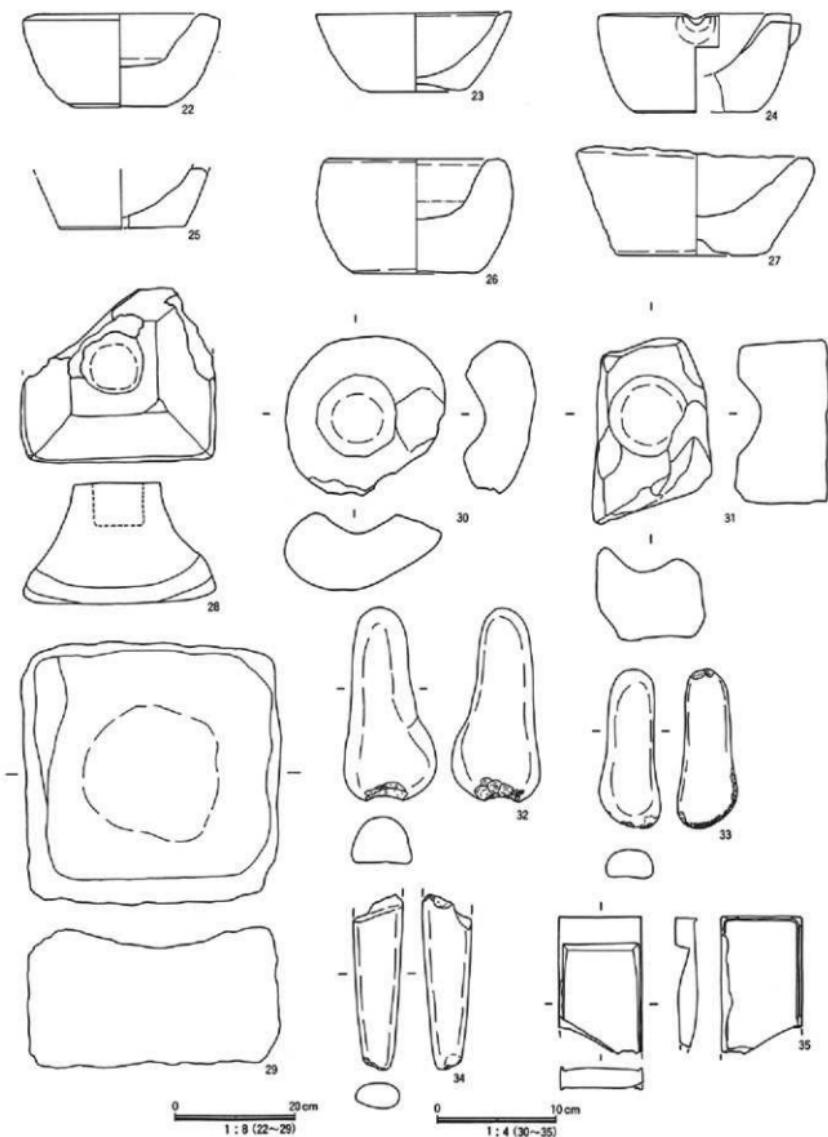
53は土人形である。内面に型押しの際の指圧痕が残る。耳に穴が穿たれる。大黒天か。54は行火である。胎土は土師質で赤褐色を呈し、砂粒が混入する。



第60図 石製品(1)



第61図 石製品(2)



第62図 石製品(3)



第63図 石製品(4)、土製品

表 8 土器・陶磁器觀察表(1)

表9 土器・陶磁器觀察表(2)

件番 番号	種 别	器 形	計測値(mm) 口径 筒径 高さ	出土位置 山土表面	色			考
					内面	外面	底	
49-50	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S097	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色		
49-51	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S098	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	15mmに5点の縁口	15mmに5点の縁口
49-52	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S099	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	25mmに5点の縁口	25mmに5点の縁口
49-53	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S099	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	25mmに10点の縁口	25mmに10点の縁口
49-54	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S099	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	2.576/185白色	2.576/185白色
49-55	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S099	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	2.576/185白色	2.576/185白色
49-56	須恵器系高足 茶碗	茶碗	S099	2.576/265白色	ST6/15色	10786/1褐色	2.576/185白色	2.576/185白色
49-57	瓦片	瓦片	(360)	5.036	NSL/1周白色	NSL/1周白色	7.535/185色	
49-58	瓦片	瓦片	(360)	5.036	NSL/1周白色	NSL/1周白色	7.535/185色	
49-59	瓦片	瓦片	(360)	5.036	NSL/1周白色	NSL/1周白色	7.535/185色	
49-60	瓦片	瓦片	(360)	5.036	NSL/1周白色	NSL/1周白色	7.535/185色	
49-61	瓦質土器 すり鉢	すり鉢	(340)	S0707	572/1オーブ無色	572/1オーブ無色	2.576/250白色	22mmに5点の縁口
49-62	瓦質土器 すり鉢	すり鉢	(340)	S0708	1079/1オーブ無色	7.574/15色	2.576/250白色	19mmに5点の縁口
49-63	瓦質土器 すり鉢	すり鉢	(340)	S0744	2.576/265白色	10786/1褐色	2.576/250白色	25mmに7点の縁口
49-64	瓦質土器 すり鉢	すり鉢	(340)	S0747	2.576/265白色	10786/1褐色	2.576/250白色	25mmに4点の縁口
50-1	白磁	白磁	(360)	5.036	1079/15色	1079/15色	7.535/185色	
50-2	白磁	白磁	(360)	5.036	572/15色	572/15色	7.535/185色	
50-3	白磁	白磁	(62)	S133	572/15色	572/15色	NBL/0A白色	白磁角
50-4	白磁	白磁	(62)	S134	572/15色	572/15色	NBL/0A白色	白磁角・透眼孔
50-5	白磁	白磁	(62)	S138	2.576/250白色	2.576/250白色	2.576/250白色	2.576/250白色
50-6	白磁	白磁	(100)	S097	572/15色	572/15色	NBL/0A白色	白磁角
50-7	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-8	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-9	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-10	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-11	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-12	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-13	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-14	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-15	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-16	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-17	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-18	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-19	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-20	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-21	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-22	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-23	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-24	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-25	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-26	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-27	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-28	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-29	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-30	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-31	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-32	青磁	青磁	(360)	S250	7.5676/15色	7.5676/15色	577/15色	青磁角・青磁芯
50-33	中國茶 天目茶碗	天目茶碗	(360)	5.036	NSL/1周白色	7.5783/2周白色	10786/250白色	透明釉

表10 金属製品・金属関係遺物觀察表

件番 番号	材質	器 形	計測値(mm) 底径 壁厚 高さ	出土位置 山土表面	備 考	地		
						内壁	外壁	底
51-1	銅	刀子	(100) 25 9.45					
51-2	小形銀製品	小形銀製品	146 46 29.2673					
51-3	銅	剪刀	49 31 313.136					
51-4	銅	火薬金	88 30 81.9361					
51-5	銅	鍍金 小刀	(90) 14 51.50502					
51-6	銅	かんざし	90 10 21.610					
51-7	銅	井	55 11 56.9249					
51-8	銅	外筒 内筒 亂条	55 55 11					
51-9	ふくい鉄	ふくい鉄	(38) 320 53 15-106					
51-10	ふくい鉄	ふくい鉄	(100) 30 30 50					

表11 石臼觀察表

件番 番号	種 别	計測値(mm) 底径 壁厚 高さ	出土位置 山土表面	記録番号	備 考	地		
						内壁	外壁	底
60-1	上臼	(388)	S270	SD154				
60-2	上臼	(324)	166 56(327)					
60-3	上臼	(306)	151 58(321)	SD159	8分角 & 頂面削			
60-4	下臼	252	145 50(268)	SD153				
60-5	下臼	(340)	120 50(308)	SD158				
60-6	下臼	(280)	139 58(283)	SD153				
60-7	下臼	(280)	139 58(283)	SD153				
60-8	下臼	(280)	139 58(283)	SD153				
60-9	下臼	(284)	119 58(286)	SD141	6分角 & 頂面削			
60-10	下臼	272	130 58(279)	SD141	模打状			
61-1	下臼	310	118 58(313)	SD153				
61-2	下臼	(350)	132 60(346)	SD157	模打状、櫛石軸用			
61-3	下臼	(322)	154 58(367)	SD157	8分角か			
61-4	下臼	(320)	153 58(368)	SD155	模打状			
61-5	下臼	(319)	153 58(368)	SD155	模打状			
61-6	上臼	(314)	98.274					
61-7	上臼	(421)	SD265					
61-8	上臼	206 333	111 58(278)	SD143	模打状			
61-9	上臼	190	SD97	SD5	模打状			
61-10	上臼	128 270	120 58(276)	SD150	模打状			

表12 石・土製品觀察表

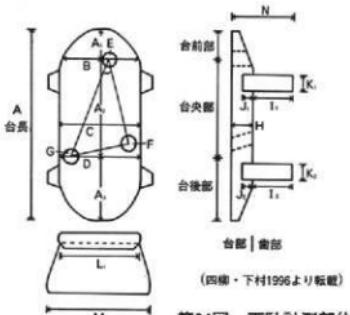
件番 番号	器 形	計測値(mm) 底径 筒径 高さ	出土位置 山土表面	記録番号	備 考	地		
						内壁	外壁	底
52-1	石斧	(210)		SD705				
52-2	石斧	(320)	(160) 155	SD208	II2/34			
52-3	石斧	(330)	(160) 128	SD728	外側被熱・内面暗褐色付			
52-4	石斧	(200)	(204) 161	SD780	片口形			
52-5	石斧	(280)	(200) 180	SD374				
52-6	石斧	(292)	(235) 176	SD377	II2/35			
52-7	石斧	(340)	(244) 145	SD997				
52-8	石斧	(340)	(244) 145	SD997				
52-9	石斧	91	38 17	SD336				
52-10	石斧	178	78 44	SD336				
52-11	石斧	140	44 39	SD376				
52-12	石斧	125	38 28	SD376				
52-13	石斧	122	44 26	SD778				
52-14	石斧	(91)	56 56	SD305				
52-15	石斧	(141)	42 42	SD556				
52-16	石斧	(71)	65 60	SD577				
52-17	石斧	65	38 17	SD585				
52-18	石斧	65	69 48	SD358				
52-19	石斧	110	38 17-19	SD358				
52-20	石斧	125 (74)	62	SD353	底部、内面被熱			
52-21	河原石削留品	36	51	SD677				
52-22	河原石削留品	46	51	SD679				
52-23	人頭	49	29 29	SD159	大頭丸			
52-24	人頭	(180) 210	140	SD529	人頭質			

表13 漆器觀察表

番号	種類	計量(重量)		出土位置	追跡番号	内面	外側	文	様	備考
		目	重量(g)							
53-1	漆器鉢	131	62	S5369	HW145	赤	黒	鶴文(外側)		
53-2	漆器鉢	130	72	S5369	HW147	赤	黒	鶴文(外側)		
53-3	漆器鉢	117	64	S5369	HW145	赤	黒	鶴文(外側)		
53-4	漆器鉢	25	—	S5369	HW149	赤	黒	不明(外側) + (上)(高台内)		黄道
53-5	漆器鉢	131	61	S5369	HW145	赤	黒	不明(外側) + (上)(高台内)	土庄による変形	
53-6	漆器鉢	130	64	S5362	HW145	赤	黒	不明(外側) + (上)(高台内)	内面に萬葉脚	
53-7	漆器鉢	70	—	S5326	HW145	赤	黒	二引鉢(外側) + (一)(高台内)		
53-8	漆器鉢	130	—	S5329	HW145	赤	黒	二引鉢(外側) + (上)(高台内)		
53-9	漆器鉢	(70)	—	S5329	HW145	赤	黒	鶴文(外側) + (一)(高台内)		
53-10	漆器鉢	235	112	S5329	HW122	赤	黒	鶴文(外側) + 鳥文(内側) + すさみ文(外側) - 不明(高台内)	吉口火候	
53-11	漆器鉢	130	—	S5329	HW145	赤	黒	鶴文(外側) + (上)(高台内)	外は漆の剥離が著しい。口縁は刷毛彌	
53-12	漆器鉢	56	—	S5327	HW145	赤	黒	鶴文(大字) + 明(外側) - 不明(高台内)		
53-13	漆器鉢	(72)	—	S5270	HW149	赤	黒	鶴文(大字) + (外側) - 不明(高台内)		
53-14	漆器鉢	S5048	—							
53-15	漆器鉢	S5006	—							
53-16	漆器鉢	(96)	60	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-17	漆器鉢	130	—	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-18	漆器鉢	90	—	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-19	漆器鉢	50	24	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-20	漆器鉢	50	—	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-21	漆器鉢	69	—	S5327	HW145	赤	黒	不明(高台内)		
53-22	漆器鉢	—	—	S5269	HW145	赤	黒	不明(高台内)	黄道で文字が書かれる	
53-23	漆器鉢	(112)	—	S5006	HW145	赤	黒	不明(高台内)		
53-24	漆器鉢	46	—	S5327	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		
53-25	漆器鉢	354	58	S5324	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)	土庄による変形	
53-26	漆器鉢	(388)	—	S5355	HW145	赤	黒	千鳥文 + すさみ文(外側)		

表14 木製品觀察表

學名	目 科	計測値 (mm)	原產地	出產位置	登記番号	備 考
BB-27 雜	蝶形科	255	7	6	S5336	
BB-28 雜	蝶形科	249	6	5	S5336	
BB-29 雜	[蝶形科]	202	8	6	S5336	
BB-30 雜	[蝶形科]	142	6	5	S5336	
BB-31 雜	[蝶形科]	148	8	6	S5336	
BB-32 雜	[蝶形科]	155	7	5	S5336	
BB-33 雜	[蝶形科]	172	9	6	S5336	
BB-34 雜	[蝶形科]	172	7	6	S5336	
BB-35 粗狀木蝸牛	335	44	9	S5345	兩面山遺產	
BB-36 細狀木蝸牛	[338] (43)	12	S5336			
BB-37 木蝸	66	15	5	S5446	黑街 [小標二三] 黑街	
BB-38 板狀木蝸牛	[154]	38	6	S5448		
BB-39 節	[65]	42	9	S5448		
BB-40 扁形	100	35	6	S5482		
BB-41 蝶形	322	60	7	S5835	木財現存 僅存?	
BB-42 蝶形	230	60	7	S5835		
BB-43 扁形	355 (90)	7	S5336			
BB-44 蟲食	直徑 236	[31]	S5336			
BB-45 蟲食	直徑 110	[92]	S5336			
BB-46 蟲食	直徑 105	[90]	S5336			
BB-47 前齒葉吸蟲	直徑 363	15	S5824			
BB-48 前齒葉吸蟲	直徑 165	9	S5371			
BB-49 前齒葉吸蟲	直徑 215	15	S5700	木財現存 木財現存 - 外觀變化 上面橫紋 - 無毛殼		
BB-50 前齒葉吸蟲	直徑 160	15	S5700			
BB-51 石灰木蝸牛	150	160	[14]	S5427	木財現存 - 外觀變化 上面橫紋 - 無毛殼	
BB-52 木螺	870	85	25	S5336		
BB-53 木螺	[245]	74	12	S5336		
BB-54 穩螺	237	86	41	S5327		
BB-55 明窗木蝸牛	[63]	93	66	S5822		
BB-56 粗狀木蝸牛	[99]	13	8	S5308	RW135 免施藥物化	
BB-57 粗狀木蝸牛	[83]	15	8	S5308		
BB-58 小白日蝶	[165]	25	10	S5382		
BB-59 斑蝶木蝸牛	[462]	152	45	S5767	中央現存 中央現存	
BB-60 斑蝶木蝸牛	[462]	152	45	S5767		



第64図 下歎計測部位

表15 下肚钢管表

辨 別 番 号	右				左				頭				胸				全高	基部 角度	出土位置	指 考			
	A	A1	A2	A3	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N						
58-61 進齒	208	26	96	86	90	99	(105)	17	17	16	—	—	—	—	—	—	49	57	38	新潟市	駿賀番号		
58-62 進齒					78					13	11	14	—	—	(108)	(109)	49	52	37	同上			
58-63 進齒					90					15	8	—	—	—	72	36	51	56	36	同上			
58-64 進齒	30	77	71	78	28	14	17	17	17	—	13	—	123	26	36	92	32	32	同上	複葉(梅子子)			
58-65 進齒	226	31	100	95	87	(97)	(98)	28	11	(18)	18	—	—	—	—	—	82	31	37	同上	複葉(梅子子)		
58-66 進齒	225	28	102	95	(85)	97	98	27	19	17	17	—	—	—	—	—	93	29	36	同上	複葉(梅子子)		
58-67 進齒	202	28	92	82	81	87	92	29	10	13	16	—	(58)	—	—	—	95	31	36	同上	複葉(梅子子)		
58-68 進齒	191	27	81	83	73	68	(74)	27	19	18	16	—	149	56	54	93	26	32	同上	複葉(梅子子)			
58-69 進齒	224	29	113	82	77	74	71	32	4	9	9	—	—	—	—	—	83	27	36	同上	複葉(梅子子)		
58-70 進齒	221	29	113	70	76	75	72	26	10	9	9	—	81	187	71	94	25	36	同上	複葉(梅子子)			

V まとめと考察

1 調査のまとめ

今回の調査は、国道121号(館山②)道路改良工事にかかる緊急発掘調査である。2カ年にわたる調査の結果を要約すると、以下のようになる。

- 1) 荒川2遺跡は山形県米沢市塙井町塙野字荒川下に所在し、北流する最上川や鬼面川によって形成された後背湿地上に立地する。遺跡の面積は約50,000m²で、今回の発掘調査は遺跡にかかる事業計画部分約19,500m²を対象として実施した。その結果、遺跡の性格は縄文時代中期末頃の狩猟場、奈良・平安時代の集落跡、中世室町時代および近世安土桃山時代の館跡であることが明らかとなった。
- 2) 検出された遺構は、縄文時代の陥し穴、奈良・平安時代の井戸跡や土壙、この時代に埋没したと考えられる旧河川、中世の建物跡・井戸跡・土壙・堀跡・溝跡などである。遺構の分布は調査区全域に及んでおり、その状況から中世堀跡内部の主郭にあたる調査A・B・D区で特に密集する傾向が指摘できる。
- 出土した遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器類、瓷器系・須恵器系等の陶器、瀬戸・美濃や青磁・白磁等の国産・輸入陶磁器、漆器・下駄等の木製品、笄・古錢等の金属製品、石器・石臼・石鉢等の石製品、その他土製品や自然遺物等、整理用のコンテナにして総計86箱分である。
- 3) 縄文時代の陥し穴は45基検出された。これらは調査区中央部と西側に広く分布しており、ある程度のまとまりとして捉えられるが、規則的な配列を成すものは一部に限られる。掘り方や規模、主軸方向などにより何類かに分類できる。対象動物を追い落とした狩猟法が想定され、構築時期は出土遺物等から縄文時代中期末葉と考えられる。
- 4) 奈良・平安時代では、集落跡の主体となるべき建物跡が検出されなかった。建物に付随する井戸跡の存在や、河川跡に流れ込んだ多量の土器群の在り方等から、調査区の東西において集落域が展開するものと推察される。井戸跡や土壙の遺構内出土および包含層出土土器等の帰属時期は、8世紀中葉から9世紀後半に位置付けられる。
- 5) S G21・25・435の河川跡からは奈良・平安時代の遺物がまとまって出土した。S G21は土層堆積状況よりI～III期に区分され、遺物を包含するのは覆土最上層であり、河川がほぼ埋没した時期(III期)にあたる。特に、置賜地方を中心に確認されている須恵器稜塊が多く出土しており、組成や特徴等から8世紀中葉～9世紀前半の土器群と比定される。S G435はF 1～7の層序毎に多量の土器を包含する覆土が堆積しており、F 4・6は洪水が原因したと考えられる砂の堆積層である。各層位毎に組成や様相を異にする土器群が検出され、総体的には8世紀前半～9世紀末までの約180年に亘る土器変遷と認識することができ、変遷を探る上では当該地域における基礎的な資料となり得るものである。
- 6) 検出した建物跡は竪穴建物跡1棟と掘立柱建物跡が7棟であり、これらの分布は旧河川間の微高地上を中心認められる。付随する井戸跡や堀跡との位置的関係等から、中近世に所

属する建物跡と判断される。長方形を呈し、床面周壁沿いに柱穴が並ぶ小規模な竪穴住居は倉庫跡と考えられ、青森県根城跡(八戸市教育委員会1993)等に類例が見られる。掘立柱の建物群は主に烟による区画の外側に分布し、主軸方向の差異により3大別が可能であったが同時存在性や新旧関係、あるいは存続期間を確定できるまでの検討資料は得られなかった。S B403は建物の柱穴底面に扁平な根石を配して柱を据える建築手法が用いられ、近接する上谷地c遺跡(山形県教育委員会1995)での検出例から、15世紀後半~16世紀前半の年代が与えられるものであり、他の建物群においても同様な年代幅の中で捉えたい。

- 7) 中近世に属する井戸跡・土壙は約180基が検出されており、ほとんどが堀区画内のいわゆる主郭に存在している。これら遺構内からは遺存状態が良好な木製品が多数出土しており、出土状況等から遺構廃棄後に捨てられたものが多い。掘り方の形態により7タイプに分類されるが、井戸跡に関しては枠組施設を認めず素掘りで使用された例が大半を占める。その密集した分布状況からは、地下水位が安定しないために部分的な不透水層があることによりできる、「宙水」と呼ばれる滞水層の水脈を探りながら掘り込んだと推測される。構内出土遺物から予測されるこれら井戸跡・土壙の構築および廃絶時期は、13世紀代~17世紀初頭に亘ると考えられる。
- 8) 調査B・E区をほぼ方形に囲む堀跡は一辺72m程を測り、約半町四方の規模を持つ単郭式館跡の外堀と判断される。西堀は中央部が内側に反る掘り方から、自然地形を利用したと思われ、東堀には張り出しが認められることから、虎口に相当すると考えられる。S D97はその西側に当該期の遺構が希薄な状況から、主郭部を区画する内堀と認識できる。
- 北堀にあたるS D308は、一旦埋められた後にやや南側に位置をずらして再構築されている。堀底には畦状の高まりがある程度の間隔で認められ、障子堀の工法による構築と判断される。地籍図の検討によりこの堀跡は、約200m四方に区画された大規模な方形館跡の南堀にあたることが判明し、その北側一帯(A・D区)も主郭の一部と思われる。堆積層出土の遺物から判断して、堀が埋没しその機能が失われた時期は近世初頭の16世紀末葉と考えられる。
- 9) 調査で出土した中近世の遺物は、かわらけ・土鍋・国産陶磁器・輸入陶磁器・木製品・金属製品・石製品など多様な種類を認め、総数は1,300点を超える。これらの分布は調査区北半部、すなわち館跡主郭部に集中する傾向が指摘され、遺構の分布状況と軸を1にするものである。口縁内側に3単位の取手を有する内耳土鍋は、米沢市を中心に中世の遺跡から出土が確認されている。内耳取手形式は14世紀代に出現して15世紀代に最も発達し、取手の形状と口縁部の形態に微妙な変化が生じることにより、年代指標となり得る器種である。国産磁器では大窯第3~4段階の瀬戸・美濃製品が多く認められ、S D308堀跡や周辺の井戸跡等から出土している。他にも天目茶碗の出土、木製品では伊達家紋である三引両が付された漆器椀や菊花・格子目等を線刻した下駄の存在、金属製品における飛天が施された小柄、石臼や茶臼の数量の多さ等々、遺跡の性格を窺うことのできる特異な遺物が出土している。

2 中近世出土遺物の検討

今回の調査で出土した中近世の遺物は、輸入陶磁器や瀬戸美濃等の年代観から、次の4時期に分けることができる。

- I期 13世紀～14世紀前半
- II期 14世紀後半～15世紀前半
- III期 15世紀後半～16世紀前半
- IV期 16世紀末～17世紀

I期の遺物には、SD134堀跡出土の青磁水注などがある。SD544出土の瓷器系陶器もこの時期に当たると思われる。この時期の遺物は量、種類ともごくわずかであり、出土状況も流れ込みの様相を呈する。

II期の遺物は、白磁皿、青磁碗等が中心となる。A・B・D区を中心に分布する。SD447・古308よりこれらの遺物が出土していることから、この時期にB・E区を囲む堀が掘られたと考えられる。

III期の遺物は、瀬戸美濃、染付、白磁の端反皿などがある。II期の遺物と同様の分布を示す。遺物の量、種類が最も多くなるのがIV期である。瀬戸美濃折縁皿や志野丸皿、漆器碗等がある。その分布はA・D区に中心があり、F区の河川跡間の微高地にも少量分布する。SD51・134・308・447堀跡に囲まれたB・E区(南館地区)からは、IV期の遺物は全く出土していない。この南館地区をはさんで、その南北にIV期の遺物が分布している。

I期からIII期にかけては、北館、南館両地区に同様に遺物が分布しているが、南館地区が堀に囲まれていることから、南館地区に中心があったと思われる。IV期にA・D区(北館地区)を囲む堀が掘られ、中心が北館地区に移り、南館地区は使用されなくなったと考えられる。

第63図に主な遺物の分布状況を示した。内耳土鍋は、北館地区、南館地区のみから出土しており、調査区南半部のC・F区からは全く出土していない。前述したように、内耳土鍋には、土師質のものと瓦質のものがあるが、瓦質のものが出土しているのは北館地区のみである。かわらけは内耳土鍋とほぼ同様の分布状況を示すが、SE121井戸跡より7点が出土していることが注目される。図示しなかったが、輸入陶磁器も同様の分布状況を示す。

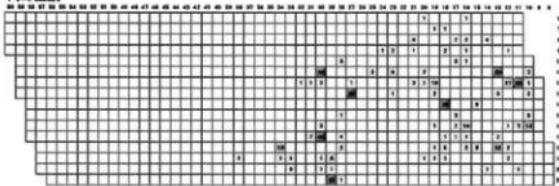
漆器と瀬戸美濃製品は似た分布状況を示している。北館地区に分布の中心があるが、特にその西半部に偏りが見られる。地籍図から、調査区の北西には北館地区の中心部と思われる小区画の存在が想定され、その付近に漆器椀・皿、瀬戸美濃皿等の供膳具が集中している。

ふいご羽口、鉄滓、銅滓等の金属加工に関わる遺物は、漆器、瀬戸美濃製品の分布域の周辺に分布している。生活の場と生産の場の使い分けが想定できる。

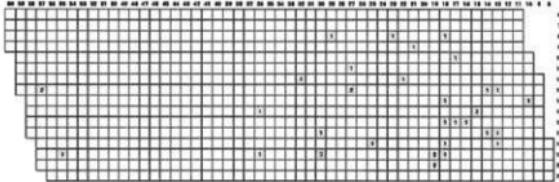
第64・65図には、遣構出土の遺物のなかで特に一括性が高いと思われる井戸跡出土のものについて、木製品と土器・陶磁器等が伴出しているものを中心図示した。

米沢市を含む置賜地域の中世を考える上で、普遍的に出土する内耳土鍋の年代観が重要な問題になると思われる。また、かわらけ・瓦質土器・瓷器系陶器・戸長里製品等、在地の土器・陶磁器の検討が今後の課題である。

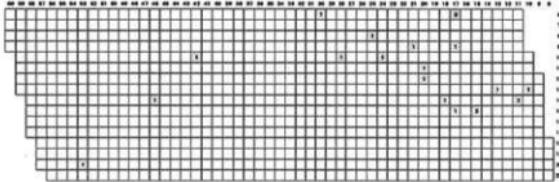
内瓦土網



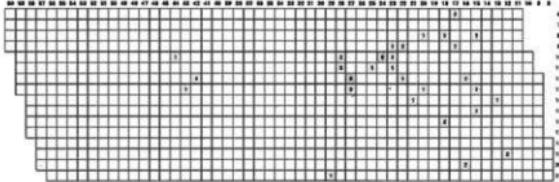
かわらけ



漆器



漆戸・美濃漆（大富期）



ふいご・羽口・銀涼・銅涼

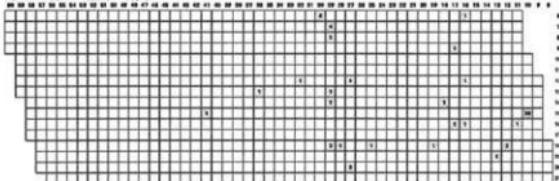


表16 出土遺物点数表

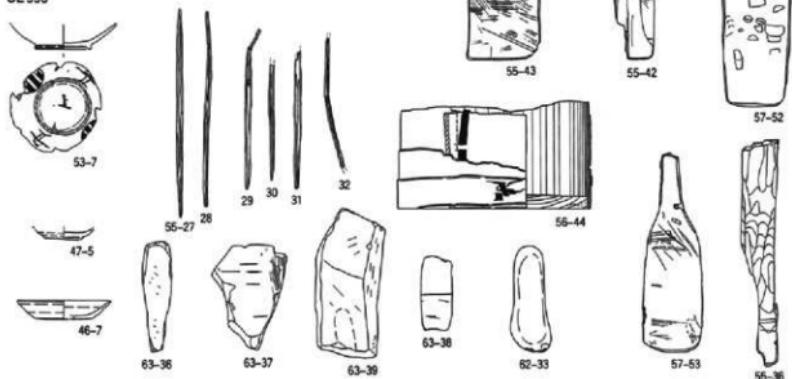
内瓦土網	
上郷質土網	513
からわけ	42
南戸・美濃	3
(音楽期)	1
漆戸	28
漆	4
漆戸・漆器	2
漆戸	1
漆器	1
漆器	19
漆	5
漆	1
漆器	3
漆器	5
漆器	11
漆器	10
漆器	7
漆器	11
漆器	2
火拂	4
漆器	14
漆	12
漆器	3
漆器	14
水注	7
漆	17
漆	13
中國漆	1
天目茶碗	1
その他の漆器	219
漆器片口	1(個体数)
漆器片身	4(個体数)
漆器脚	1(個体数)
木製品	2(個体数)
漆物漆	1(個体数)
漆物漆	1(個体数)
下駄	1(3個体数)
漆	23
その他	25
漆口	1(2個体数)
漆身	9(個体数)
漆口	5(1個体数)
石器	5(個体数)
鏡石	36
その他	30
古鏡	16(個体数)
金属製品	4(個体数)
釘	22
鐵鋤・鋤頭	17
金属關係	18
金	1,326

第65図 種類別遺物分布図

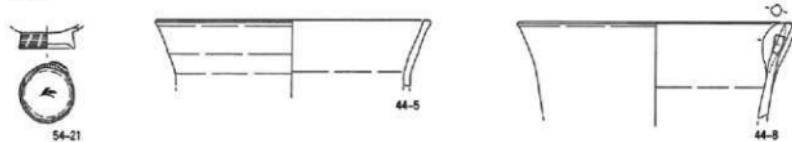
SE82



SE336



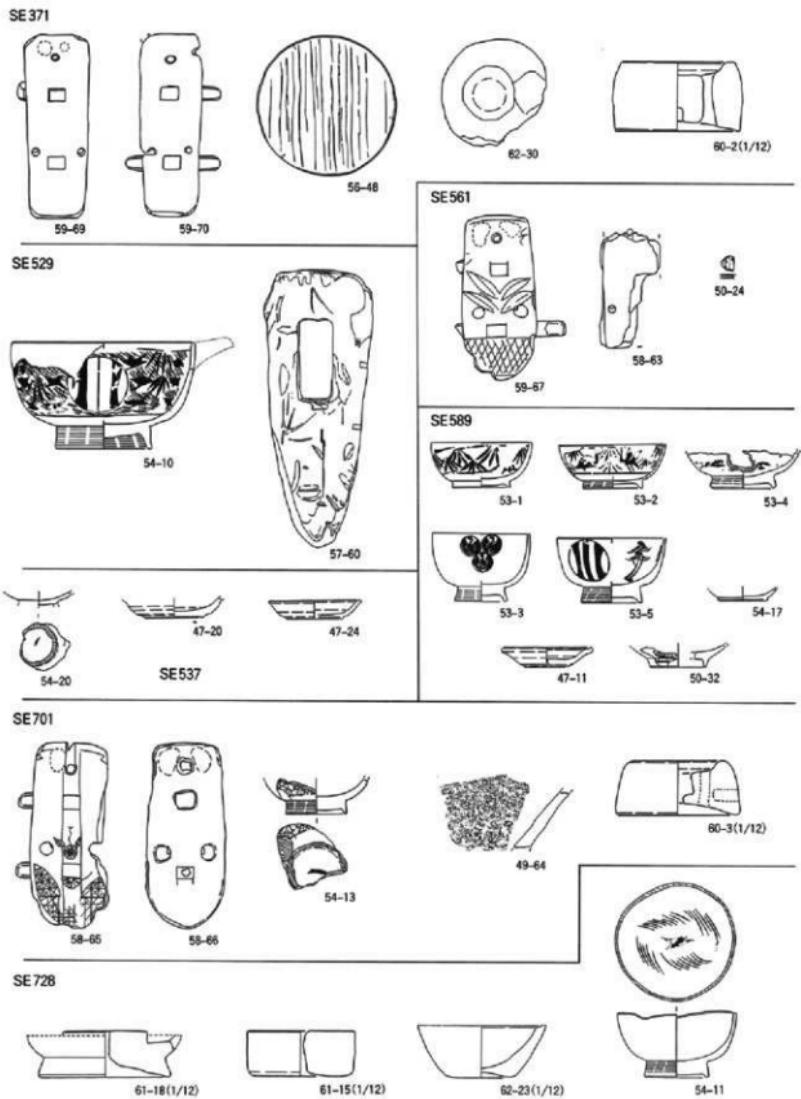
SE347



SE376



第66図 遺物組成図(1) S = 1:6



第67図 遺物組成図(2) S = 1 : 6

3 館跡の成立と年代

米沢市には県内では最古級の木和田館跡をはじめ、山城・平城等の貴重な中世遺跡が存在している。14世紀後半から15世紀に入る頃には、平地に一町四方の方形館跡が出現する。万世町の桜山館や関根の北館がこれに相当し、その性格は武士団が武力で在地農民や豪族を統合した際の拠点と見られている。15世紀後半には、半町四方の単郭式の小規模な屋敷と呼ばれる館跡が現れるようになる。本遺跡調査B・E区を堀で囲う方形館跡はこの段階で成立したと考えられ、主郭部の遺構内より出土した土鍋等からも15世紀後半の年代が与えられる。16世紀に入ると河川を自然防衛施設とした平地館跡や、主郭周辺に副郭を配した平城が出現するようになり、やがてこの形状が本丸・二の丸を配した近世の城郭形態へ発展していくものと予測される。

15世紀代における当該地の歴史的な背景は、伊達氏の影響が濃厚となり、支配地域の要として在地豪族を各地に配置しながら、軍事的な機能を持つ館跡が配備されたと思われる。これらの豪族らは、伊達氏に取り入る選択をすることで自らの所有権の維持や領地の拡大を図り、やがて伊達氏の支配制度に組み入れられていったと推測される。

地籍図によって確認できた遺跡北半の約一町半四方におよぶ方形館跡は、出土遺物の内容等から伊達支配の有力豪族あるいは家臣の居館跡と考えられる。『伊達正統世次考(卷之十下)』の文献によると、十五代晴宗の資料の中に「夏五月十日、……中略……今接するに、永禄之初、米沢の本城を輝宗公に譲り、自ら新川(あらかわ)邑に移り住す。……」とある。伊達晴宗は1548年に家督を相続し、城を米沢に移している。その後、1564年に家督を輝宗に譲って隠退するが、その際の隠居先が新川邑、すなわち現在の荒川地区とすれば、大規模な方形館跡が居館であったと推察されよう。三引両紋入りの漆器椀類は、形態等からその年代が16世紀前半に位置付けられるため、遺物資料でも実証できる可能性が高いと考える。晴宗が当地に居館したのは短期間であり、その後福島市の杉目城(近世の福島城)に移って没している。

いずれにしても、本遺跡は伊達治世の時期の館跡であるが、地元に全く伝承がないことは当地域に残された多くの中世城館跡と共通する事由であり、断絶の大さを物語っている。

《引用・参考文献》

- 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁と分類と編年」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付瓶、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No.2」日本貿易陶磁研究会
- 仙台市教育委員会 1985 「仙台城三の丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集
- まんぎり会 1986 「戸長里廻路第1次発掘調査報告書」
- 浅野晴樹 1988 「開東における中世在地土器について」「財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要第4号」
- 山形県教育委員会 1990 「藤島城跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 米沢市教育委員会 1992 「大浦C遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 米沢市教育委員会 1993 「大浦C遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第178集
- 八戸市教育委員会 1993 「根城 一 本丸の発掘調査 一」八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 仙台市教育委員会 1993 「北目城跡現地説明会資料」
- 川俣町教育委員会 1993 「川俣城跡検討会資料」
- 宮城県教育委員会 1994 「下草古城跡はか」宮城県文化財調査報告書第146集
- 山形県教育委員会 1995 「上谷地C遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第196集
- 米沢市教育委員会 1995 「我妻館跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 四柳嘉章 1996 「漆器考古学の方法と中世漆器」「考古学ジャーナル401号」ニュー・サイエンス社
- 四柳嘉章・下村好美 1996 「能登の木製用具 下駄の研究方法と木製品にみる中世の民間信仰」「第9回 北陸中世土器研究会 講演・道ぶ、折るの木製用具」北陸中世土器研究会

報告書抄録

ふりがな 書名	あらかわ2いせきはくつちょうさほうこくしょ 荒川2遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	須賀井新人・高桑 登・豊野 潤子							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荒川2	山形県 米沢市 塩井町塩野 字荒川下	202	平成4年 登録	37度 55分 45秒	140度 6分 47秒	第1次調査 19950717 19951130 第2次調査 19960508 19960927	7,200 12,300	国道121号 (館山②) 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項	
荒川2	狩獵場 集落跡	縄文時代 奈良・ 平安時代	陥し穴 縦穴建物跡 河川跡 井戸跡	45 1 4 1	縄文土器片 石籠 土器器(坏・高坏・蓋・壺) 須恵器(坏・高坏・蓋・壺・ 壺・盤)	漆器碗5点が一括出土。 15世紀後半~16世紀末 葉にかかる伊達支配の 方形館跡		
	館跡	中近世	掘立柱建物跡 堀跡 溝跡 井戸跡	7 4 46 180	土器・陶磁器(からわけ・内 耳土鍋・瀬戸・美濃・ 輸入陶磁器・戸長里) 木製品(漆器碗・下駄・曲物) 石製品(石臼・茶臼・他) 金属製品(古銭・小柄・笄)	計 86 箱		

図 版



調査区全景（空中写真）

図版 2



調査区設定



重機械表土除去



基準点測量



面整理



検出遺構マーキング



遺構精査



記録（断面実測）



調査説明会



D区遺構検出状況（北から）



D区掘り下げ状態（北から）



F区遺構検出状況（南から）



A区・B区遺構検出状況（南から）



E区遺構検出状況（北から）



C区掘り下げ状況（北から）



F区掘り下げ状況（北から）



SK 74陥し穴完掘状況



SK 147陥し穴完掘状況



SK 239陥し穴完掘状況



SK 241陥し穴完掘状況



SK 601陥し穴完掘状況



SK 601陥し穴土層断面



SK 615陥し穴完掘状況

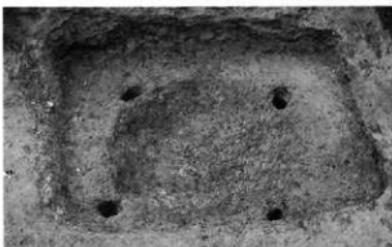


SK 617陥し穴完掘状況

図版 6



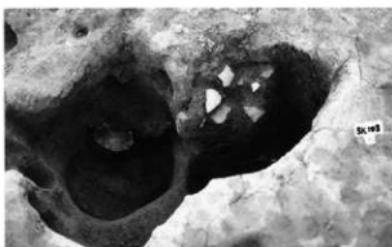
S E 73井戸跡半截状況



S E 73井戸跡完掘状況



S K 96土壤土層断面



S K 103土壤遺物出土状況



S K 115土壤遺物出土状況



S G21河川跡検出状況



S G21河川跡遺物出土状況



S G21河川跡掘り下げ状況



S G21河川跡土層断面



S G21河川跡土層断面

図版 8



S G 435河川跡遺物出土状況



S G 435河川跡土層断面



S G 435河川跡土層断面



S G 435河川跡遺物出土状況



S G 435河川跡完掘状況



S T 332整穴住居跡



S B 11掘立柱建物跡



S B 401掘立柱建物跡

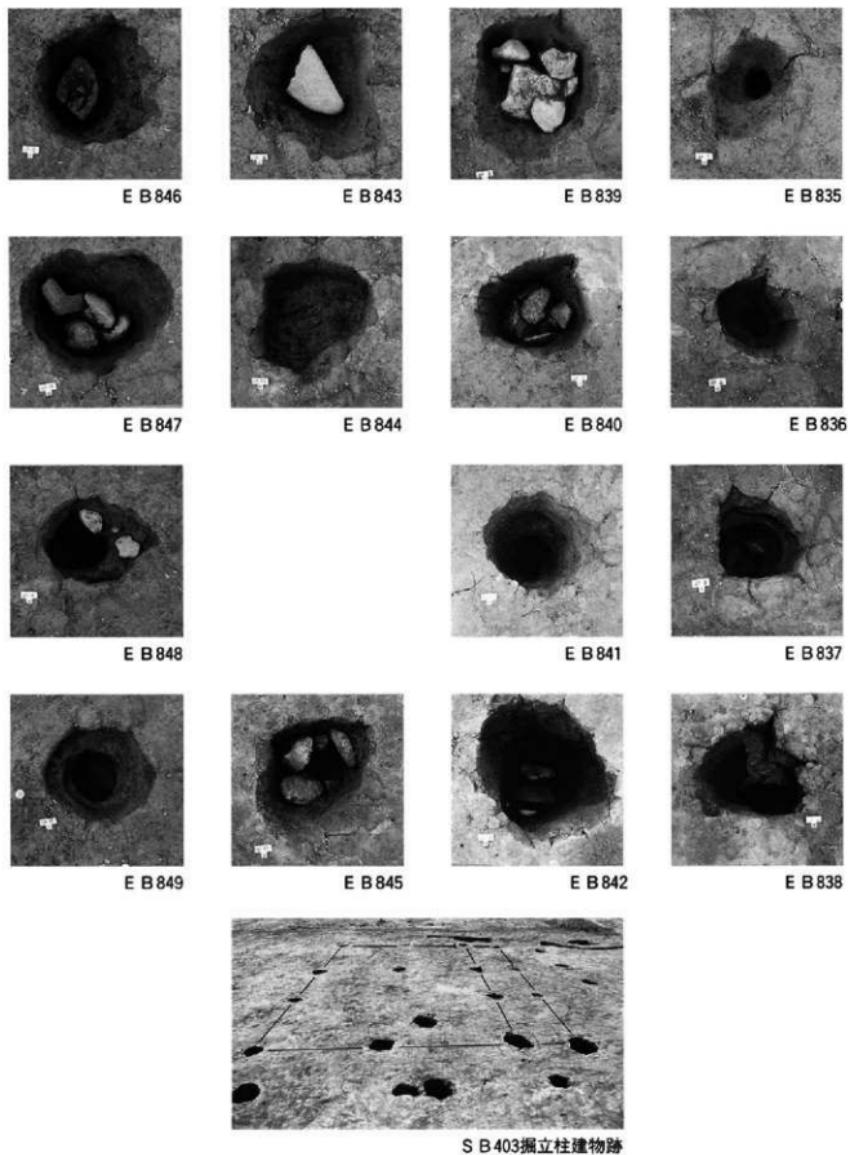


S B 404・405掘立柱建物跡



S B 406掘立柱建物跡

図版10

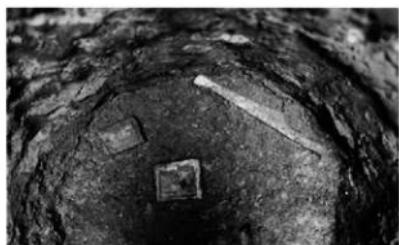




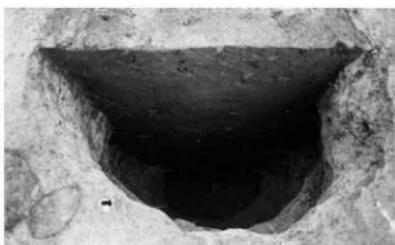
S E 23井戸跡完掘状況



S E 23井戸跡遺物出土状況



S E 82井戸跡遺物出土状況



S K 106土壤土層断面



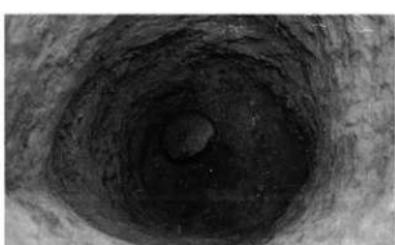
S K 112土壤土層断面



S K 114土壤土層断面



S E 133井戸跡井戸枠検出状況

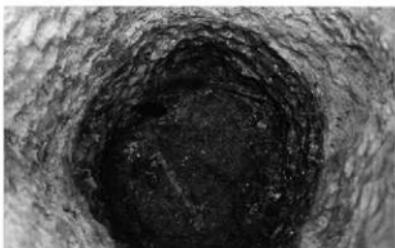


S E 153井戸跡遺物出土状況

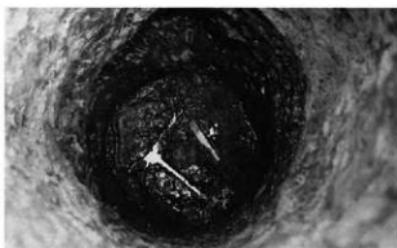
図版12



S E 336井戸跡遺物出土状況①



S E 336井戸跡遺物出土状況②



S E 336井戸跡遺物出土状況③



S E 336井戸跡遺物出土状況④



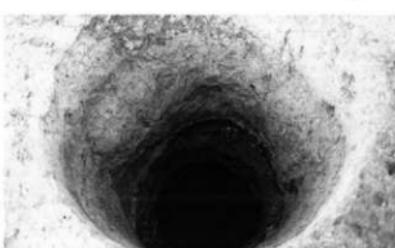
S E 340井戸跡土層断面



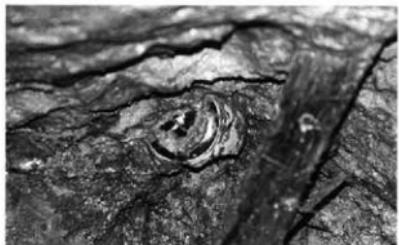
S K 341土塘土層断面



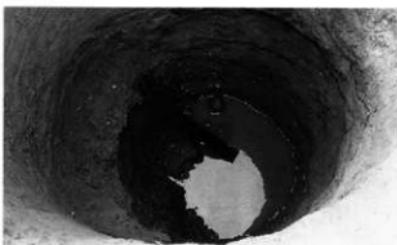
S E 348井戸跡土層断面



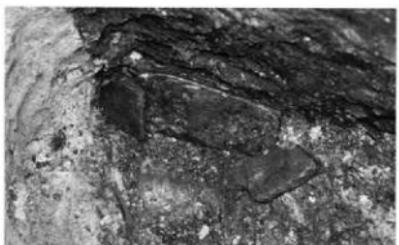
S E 363井戸跡完掘状況



S E 437井戸跡遺物出土状況



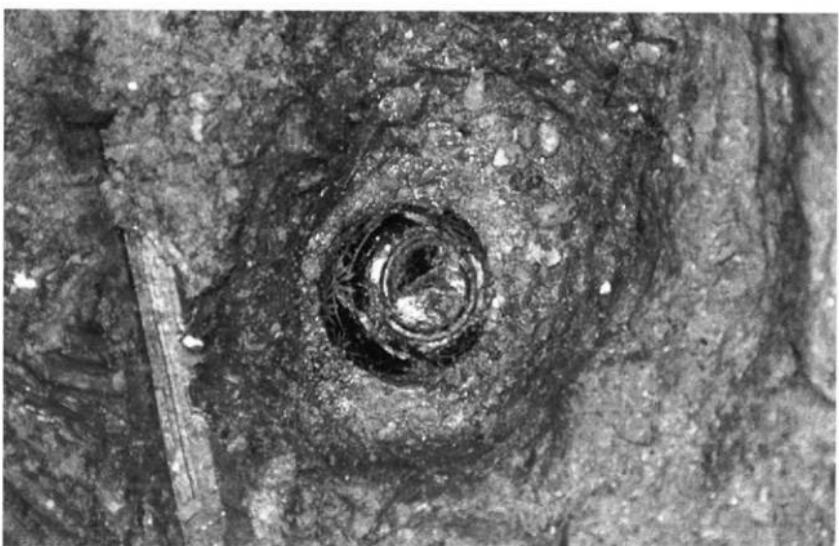
S E 437井戸跡完掘状況



S E 561井戸跡遺物出土状況



S E 589井戸跡遺物出土状況①



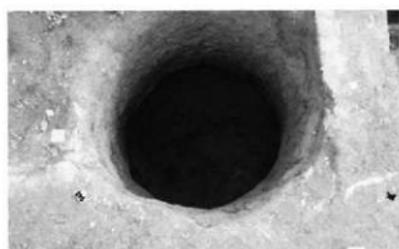
S E 589井戸跡遺物出土状況②



S E 529井戸跡遺物出土状況



S E 529井戸跡完掘状況



S E 542井戸跡完掘状況



S E 701井戸跡遺物出土状況



S E 701井戸跡遺物出土状況



S E 703井戸跡土層断面



S E 706井戸跡遺物出土状況



S E 706井戸跡遺物出土状況



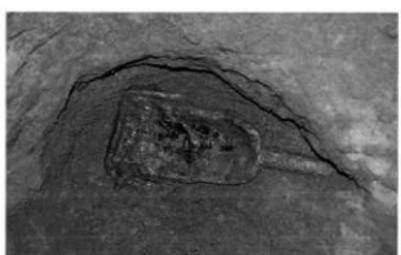
S E 728井戸跡遺物出土状況



S E 728井戸跡完掘状況



S E 728井戸跡遺物出土状況



S E 767井戸跡遺物出土状況



S E 780井戸跡遺物出土状況



S D 308堀跡掘り下げ状況①



S D 308堀跡掘り下げ状況②



S D 308堀跡掘り下げ状況③



S D 308堀跡遺物出土状況



S D 308堀跡遺物出土状況



SD 51 堀跡掘り下げ状況



SD 97 溝跡検出状況



SD 134 堀跡土層断面



SD 97 溝跡土層断面



SD 447 堀跡土層断面



SD 97 溝跡土層断面



S D 97溝跡遺物出土状況



S D 97溝跡遺物出土状況



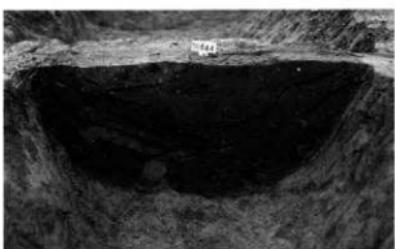
S D 26溝跡掘り下げ状況



S D 544溝跡炭化物検出状況



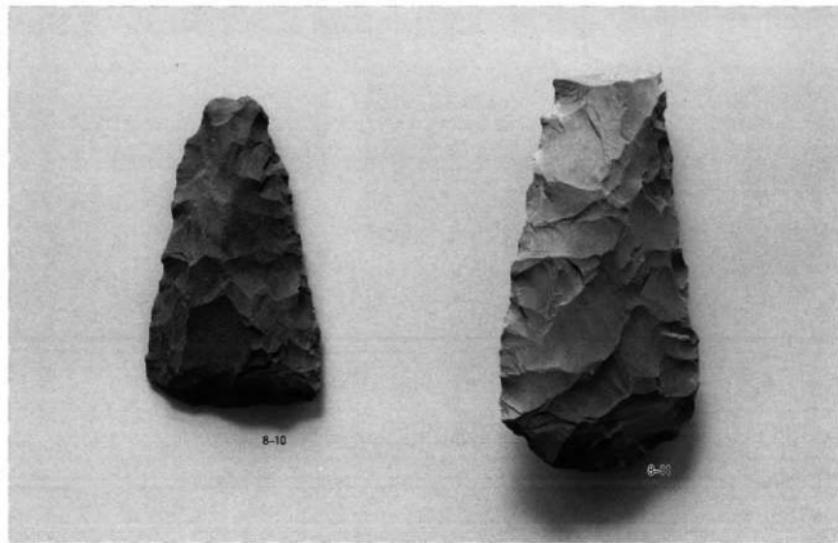
S D 26溝跡土層断面



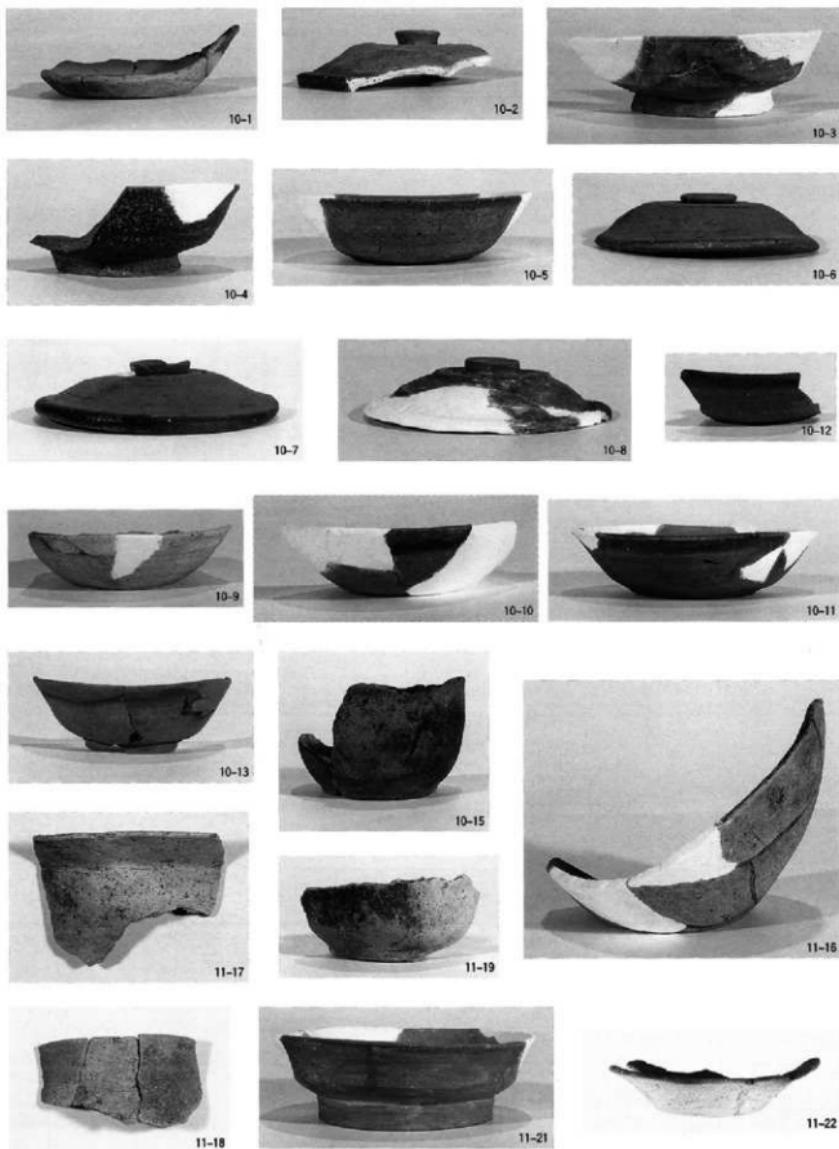
S D 544溝跡土層断面



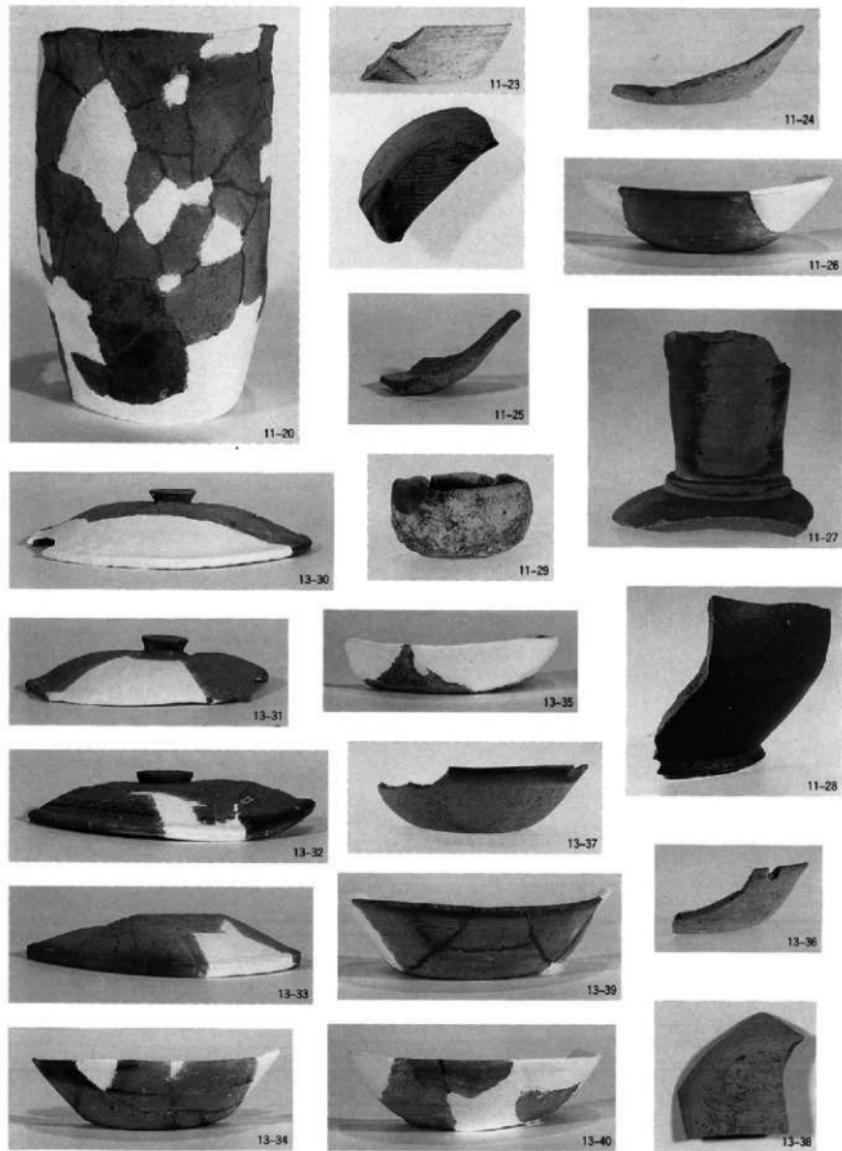
繩文土器（中期末）



石 簸

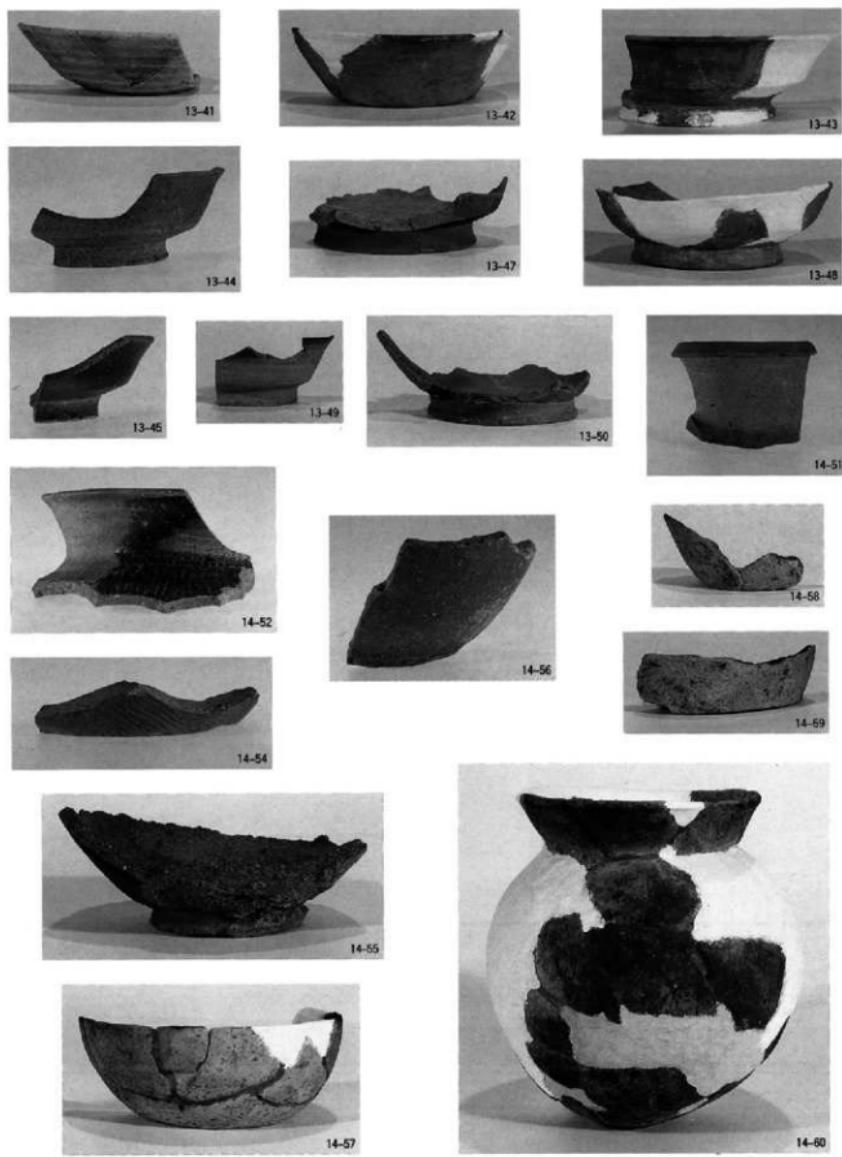


出土土器(1)

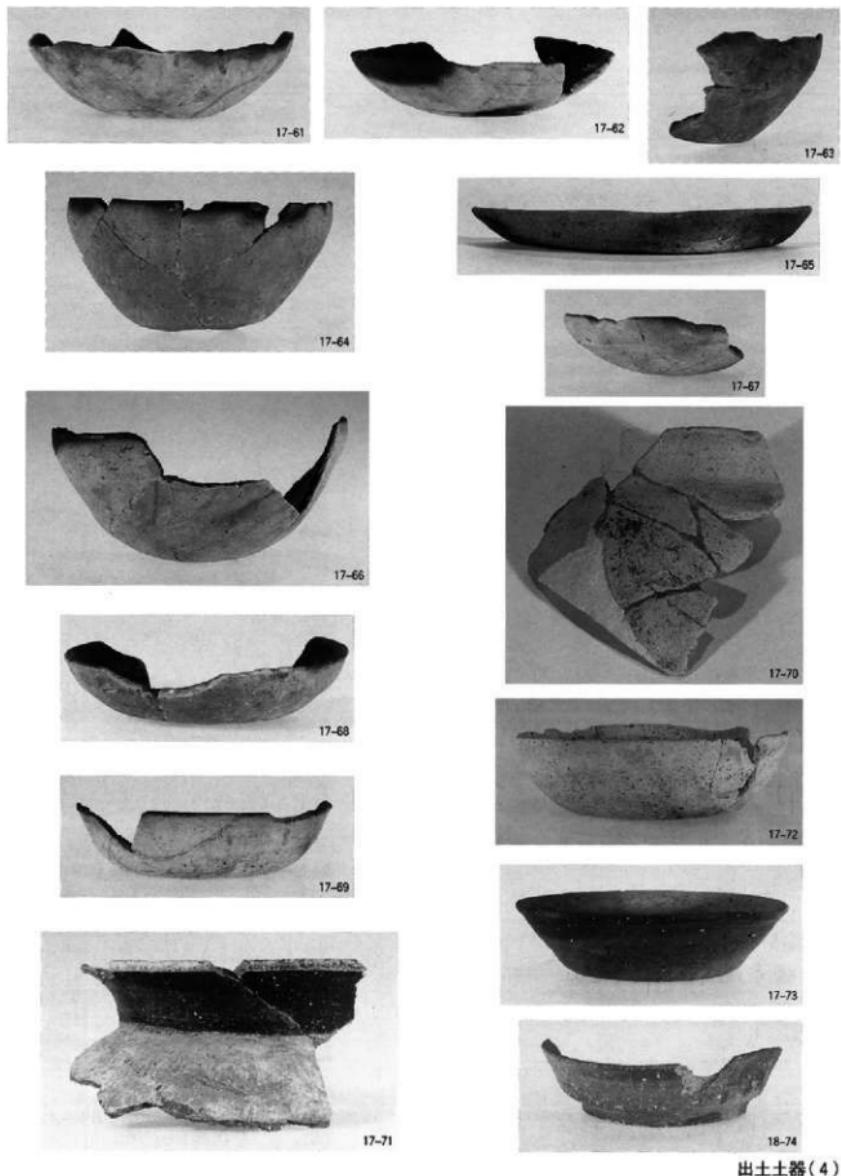


出土土器(2)

図版22



出土土器(3)



出土土器(4)

図版24



18-75



18-76



18-79



18-78



18-77



18-80



18-82



18-81



18-83



18-84



19-87

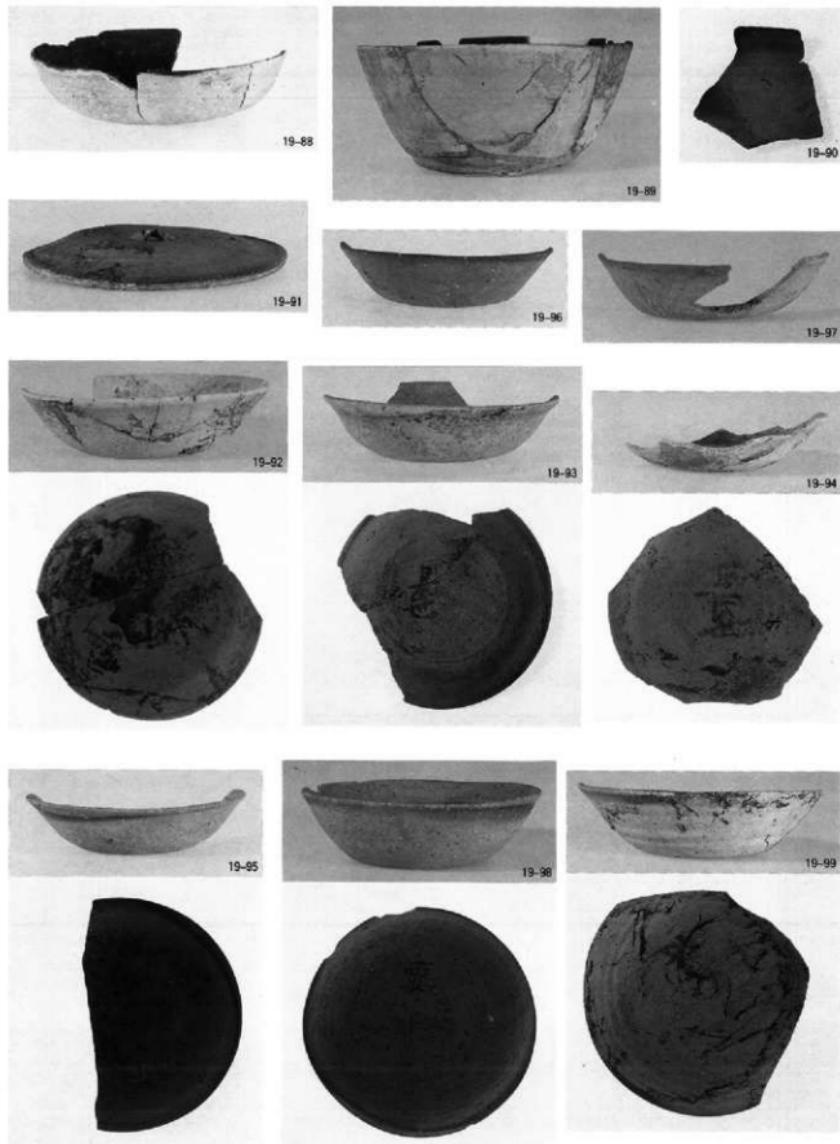


18-85

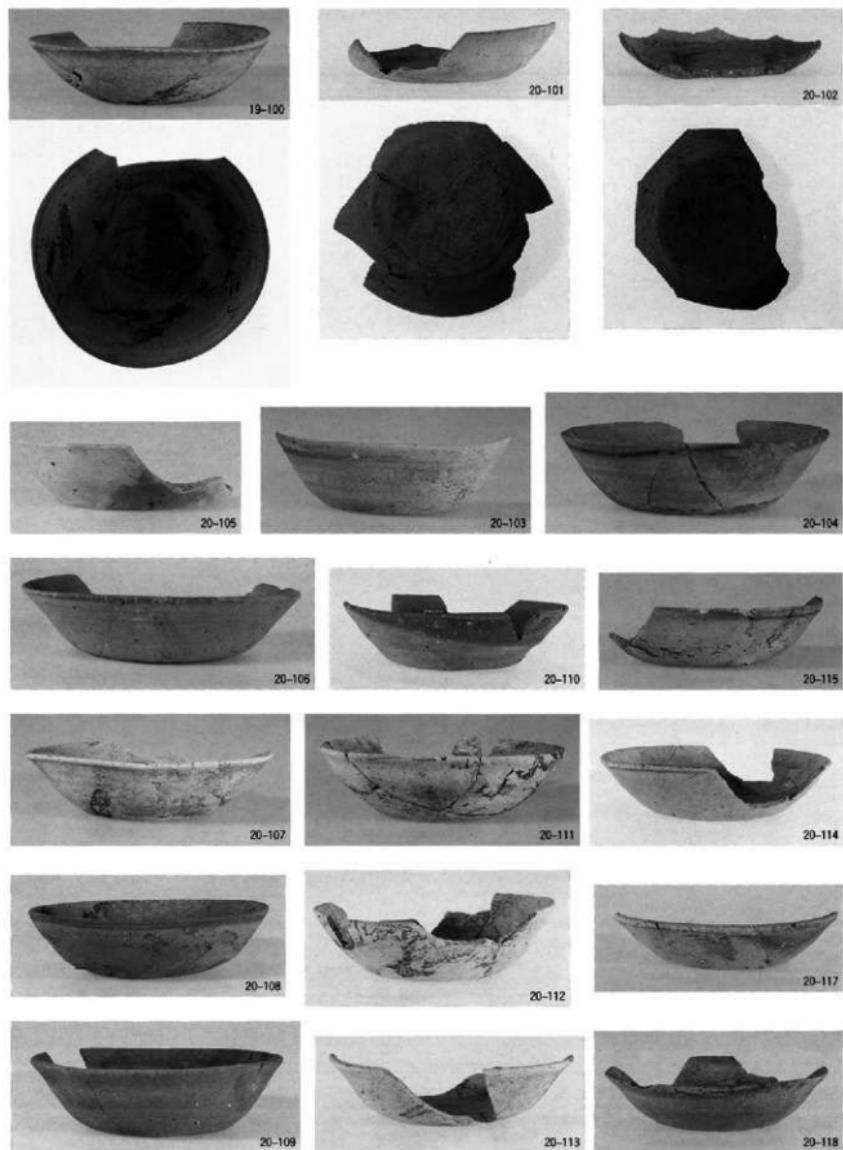


18-86

出土土器(5)



出土土器(6)



出土土器(7)



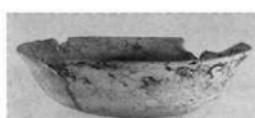
20-116



20-120



21-122



20-119



21-121



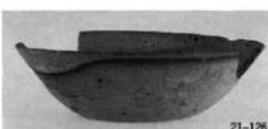
21-125



21-123



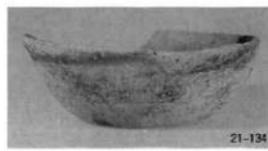
21-124



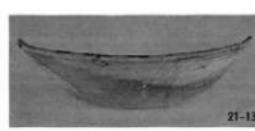
21-126



21-127



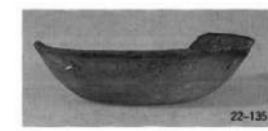
21-134



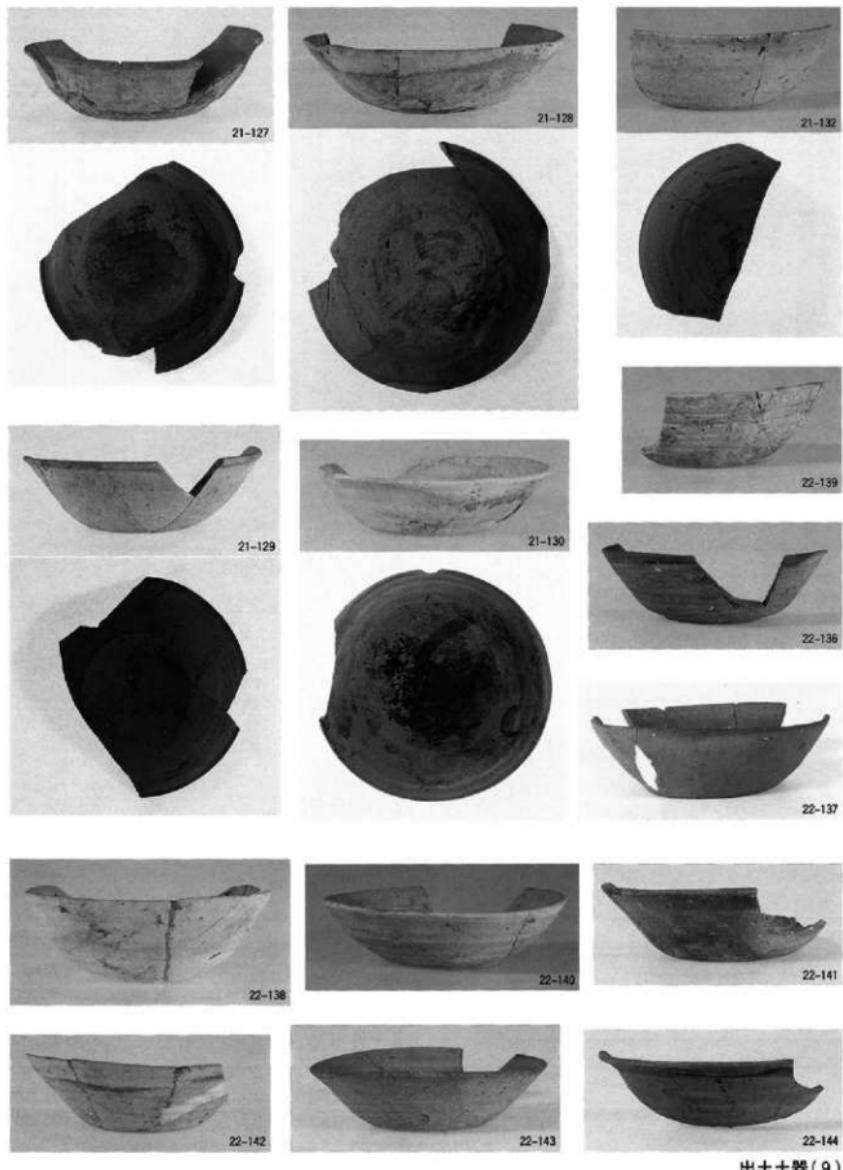
21-131

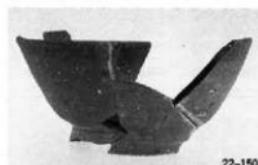


21-133



22-135





22-153



22-154



23-157



23-161

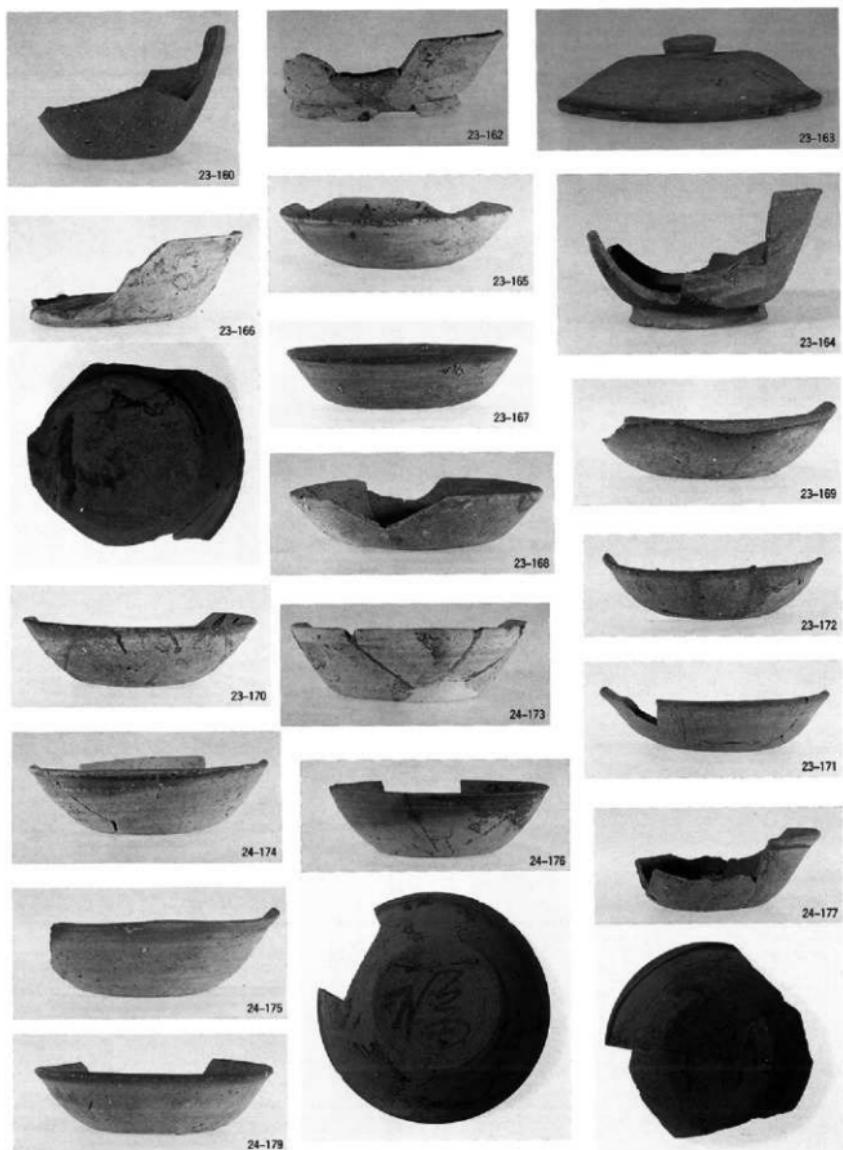


23-156

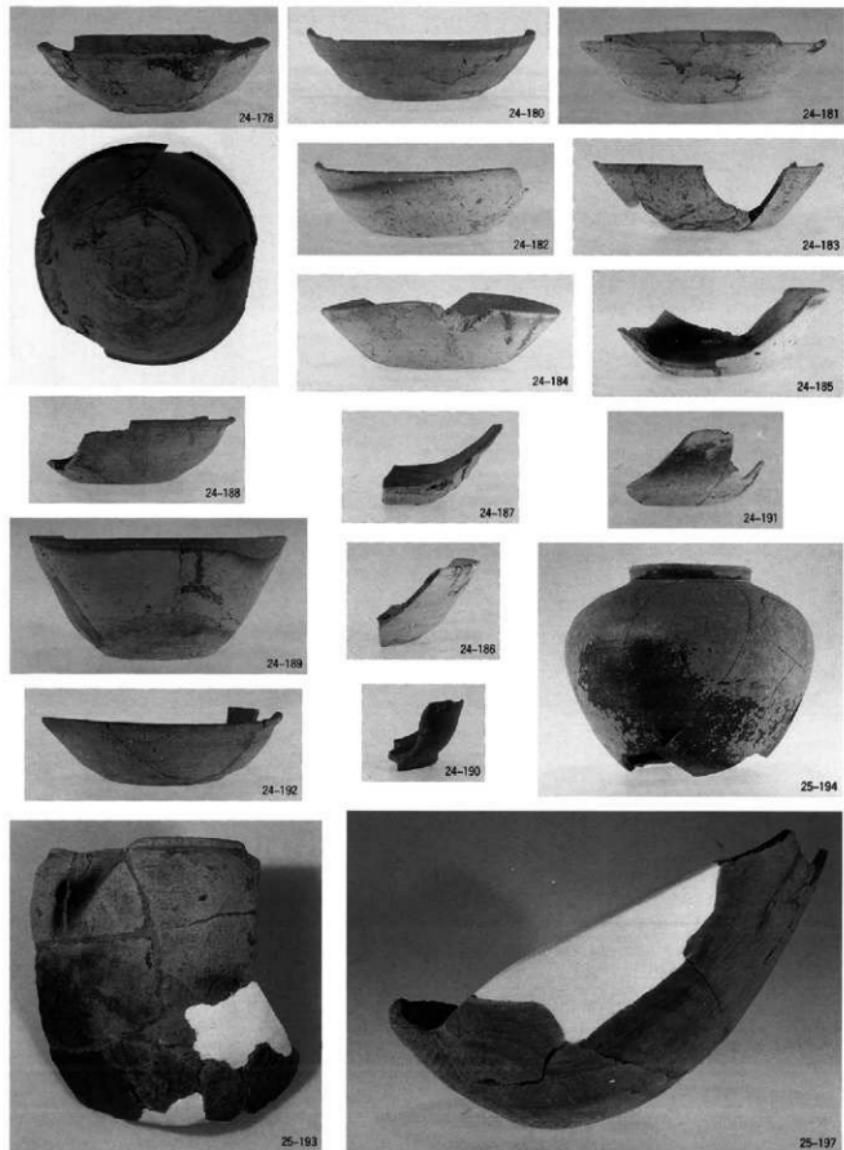


出土土器(10)

図版30



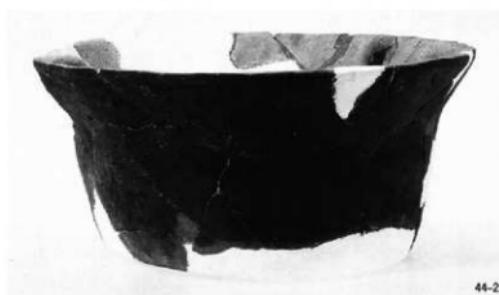
出土土器(11)



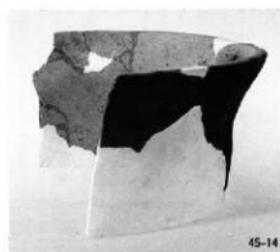
出土土器(12)



44-1



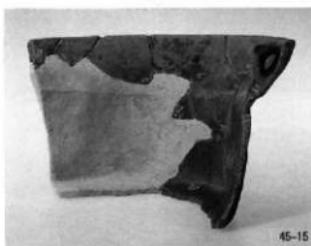
44-2



45-14



45-10



45-15

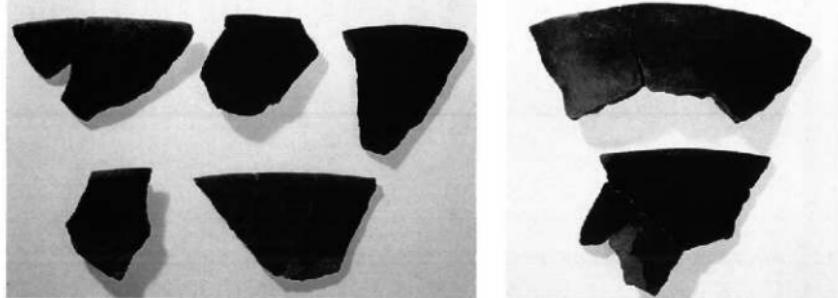
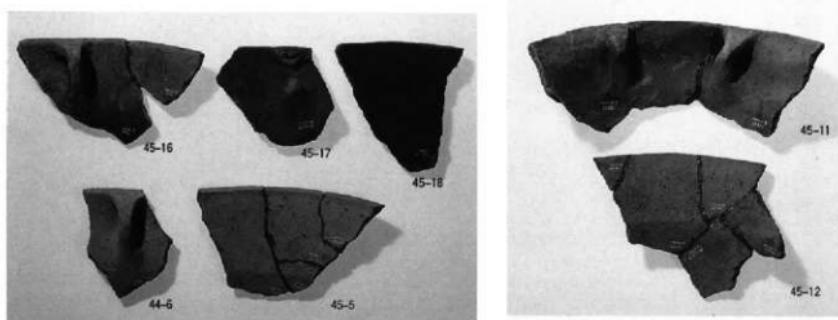
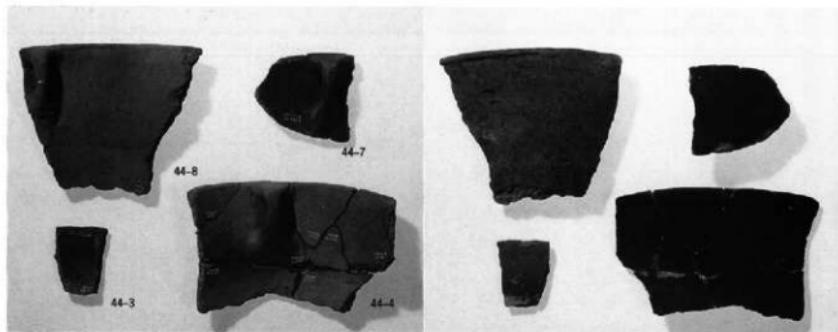


45-13



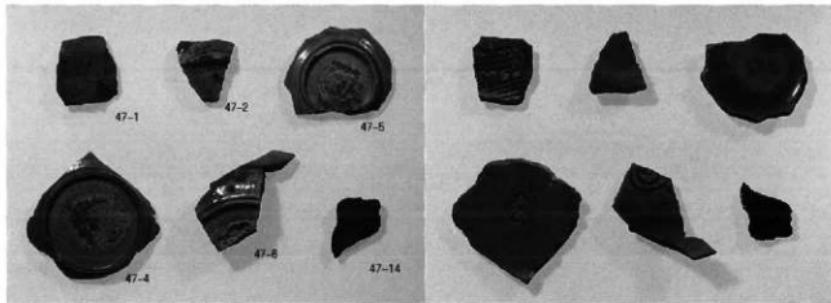
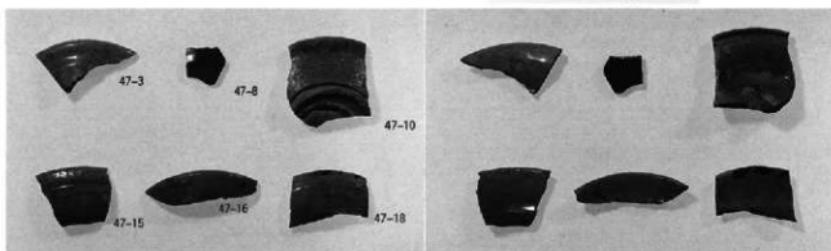
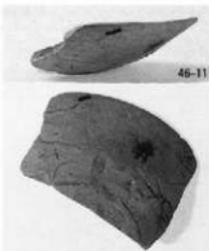
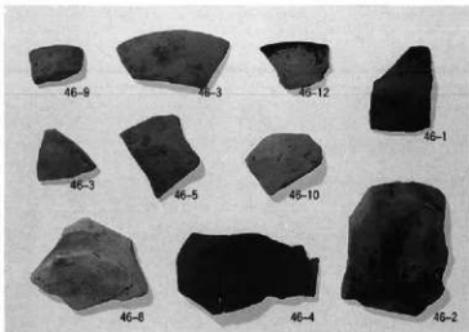
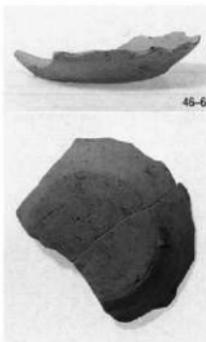
44-9

內耳土鍋(1)

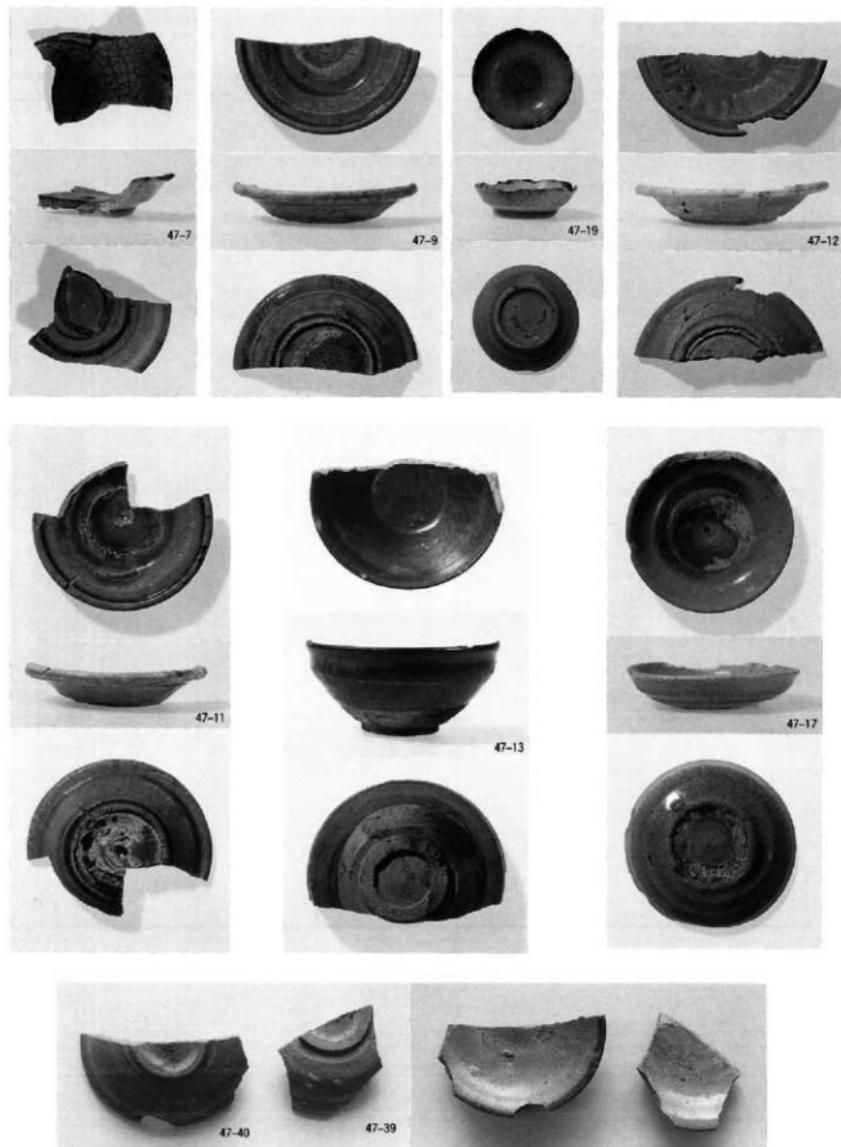


内耳土鍋(2)

図版34

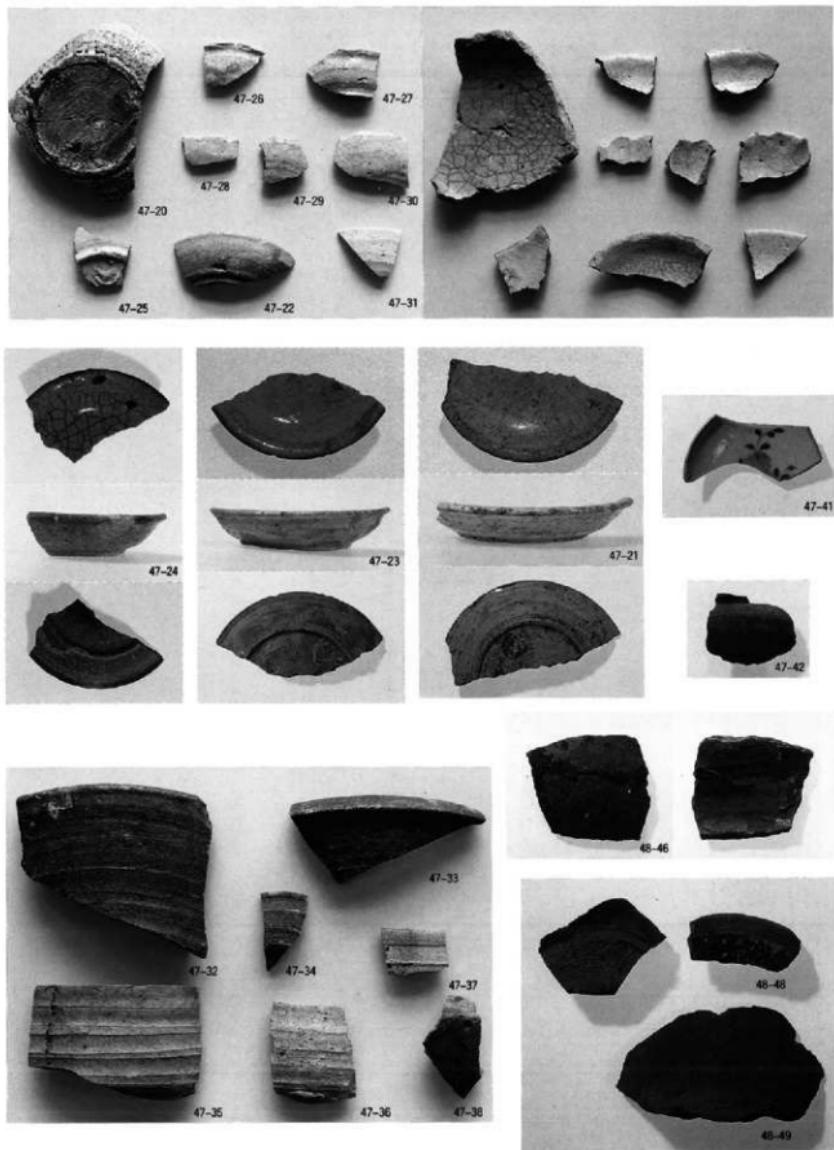


かわらけ・国産陶器

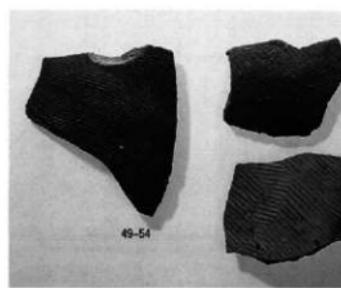
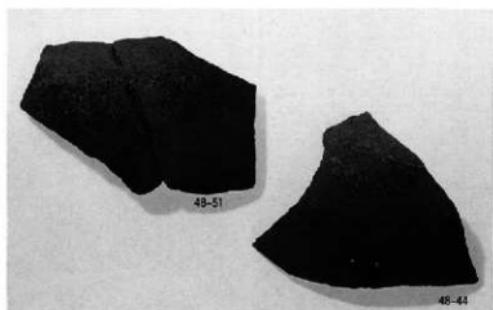
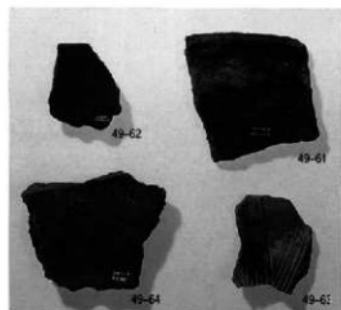
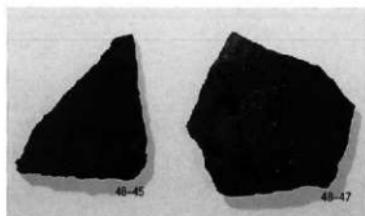
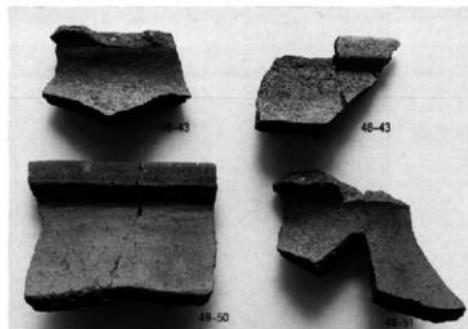


国産陶器(1)

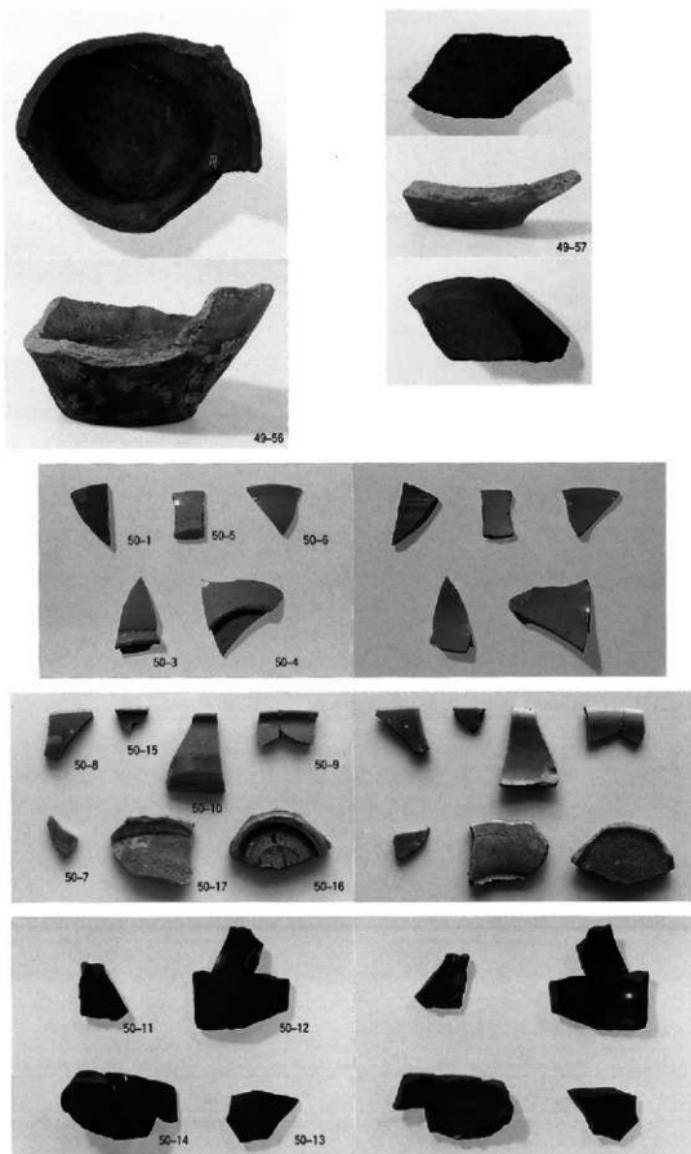
図版36



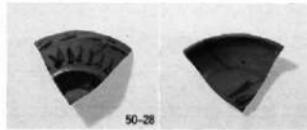
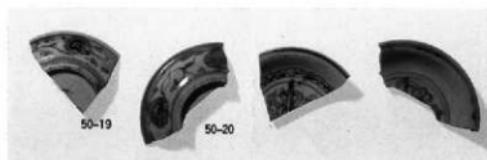
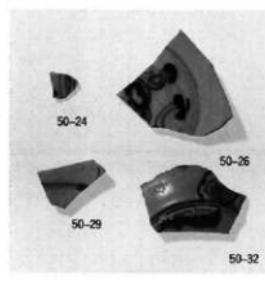
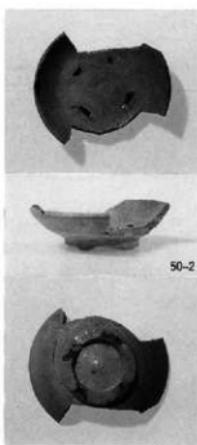
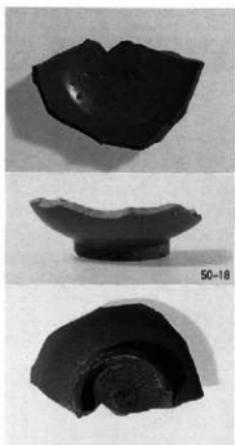
国産陶磁器

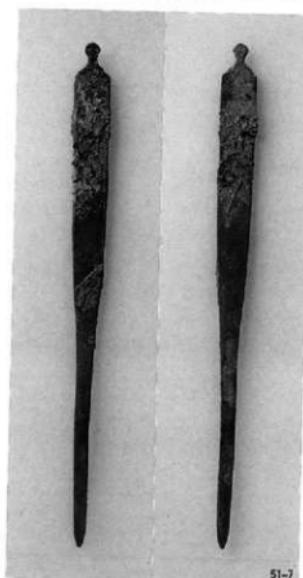
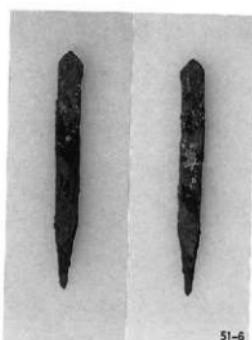


国産陶器(2)



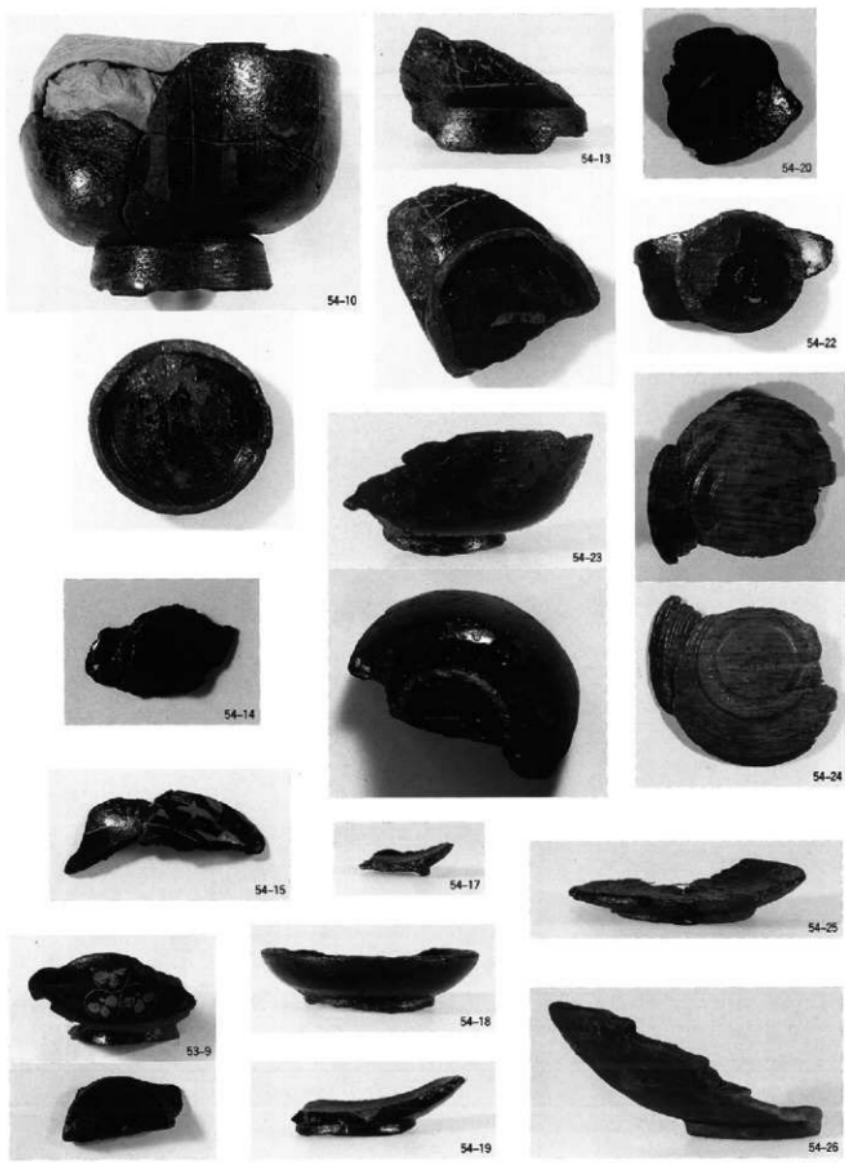
国産陶器・輸入磁器



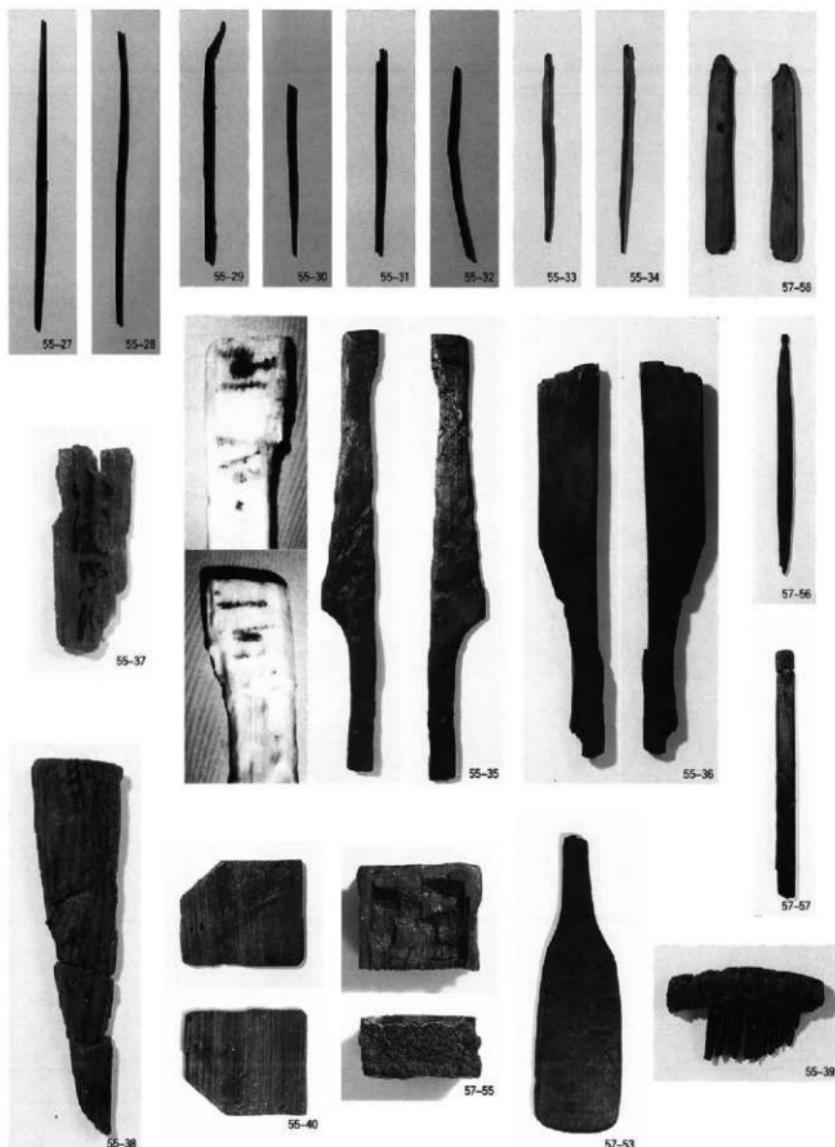


金属製品





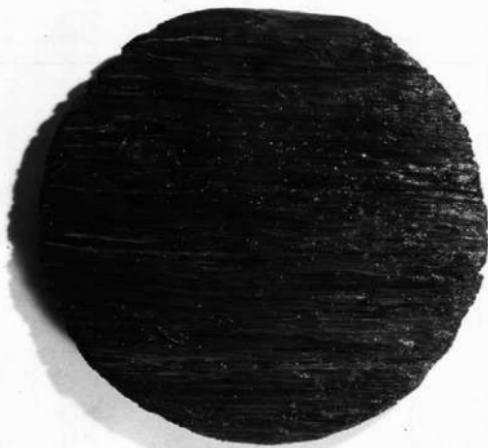
漆器椀(2)



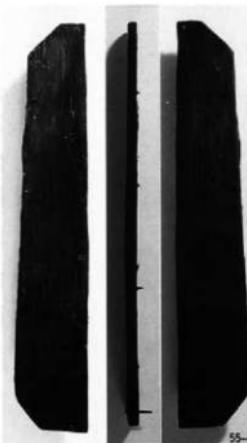
図版44



56-44



56-47



56-41



56-45



56-46



56-42



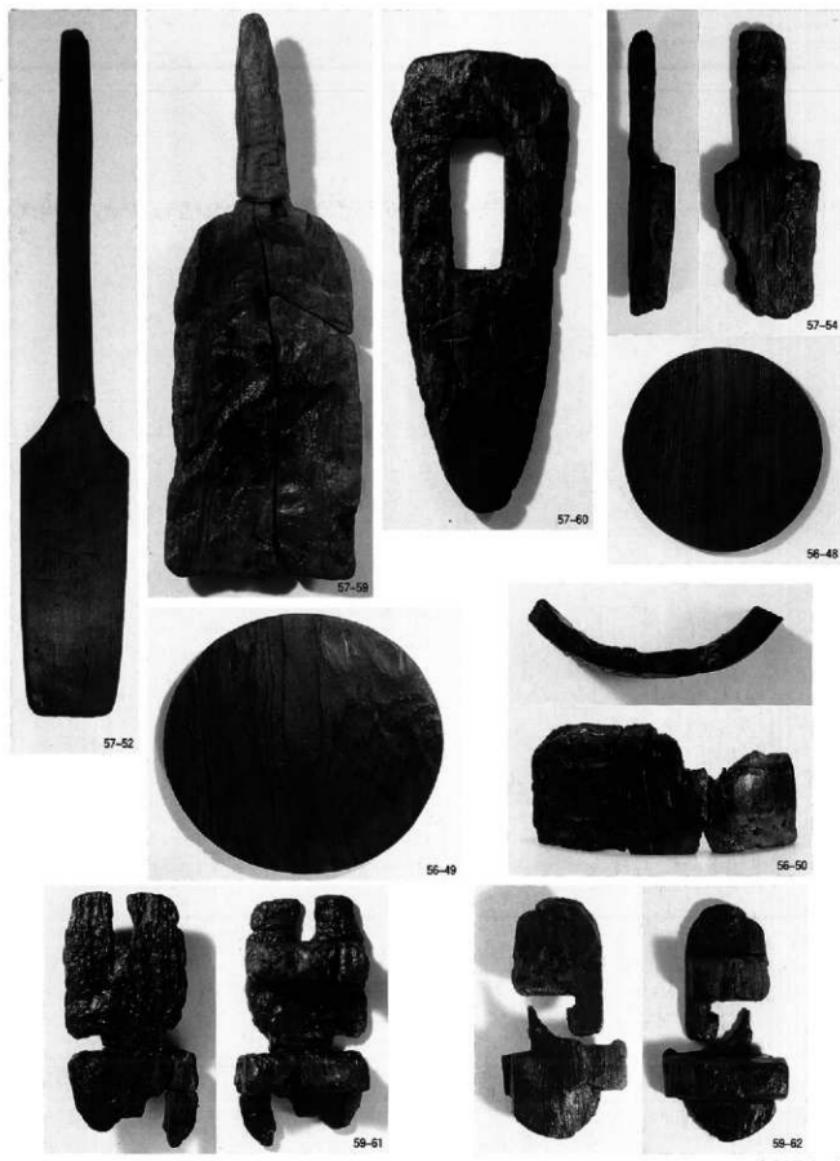
56-43

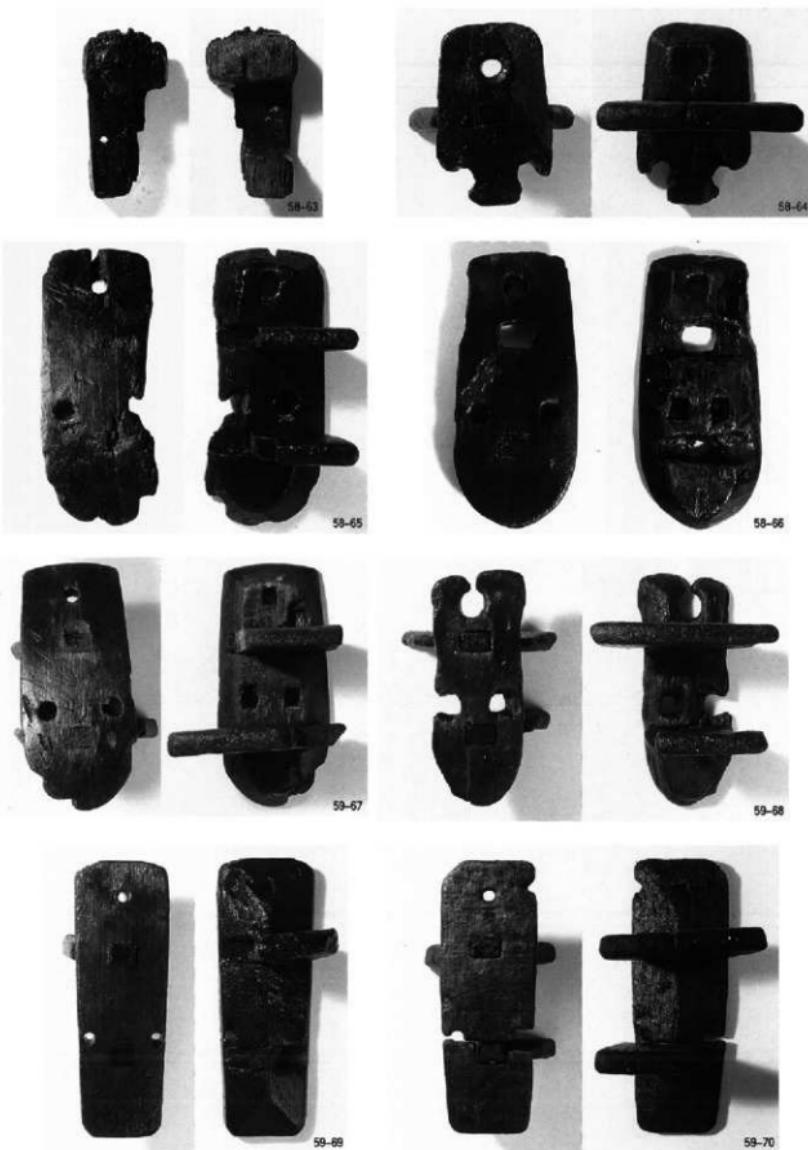


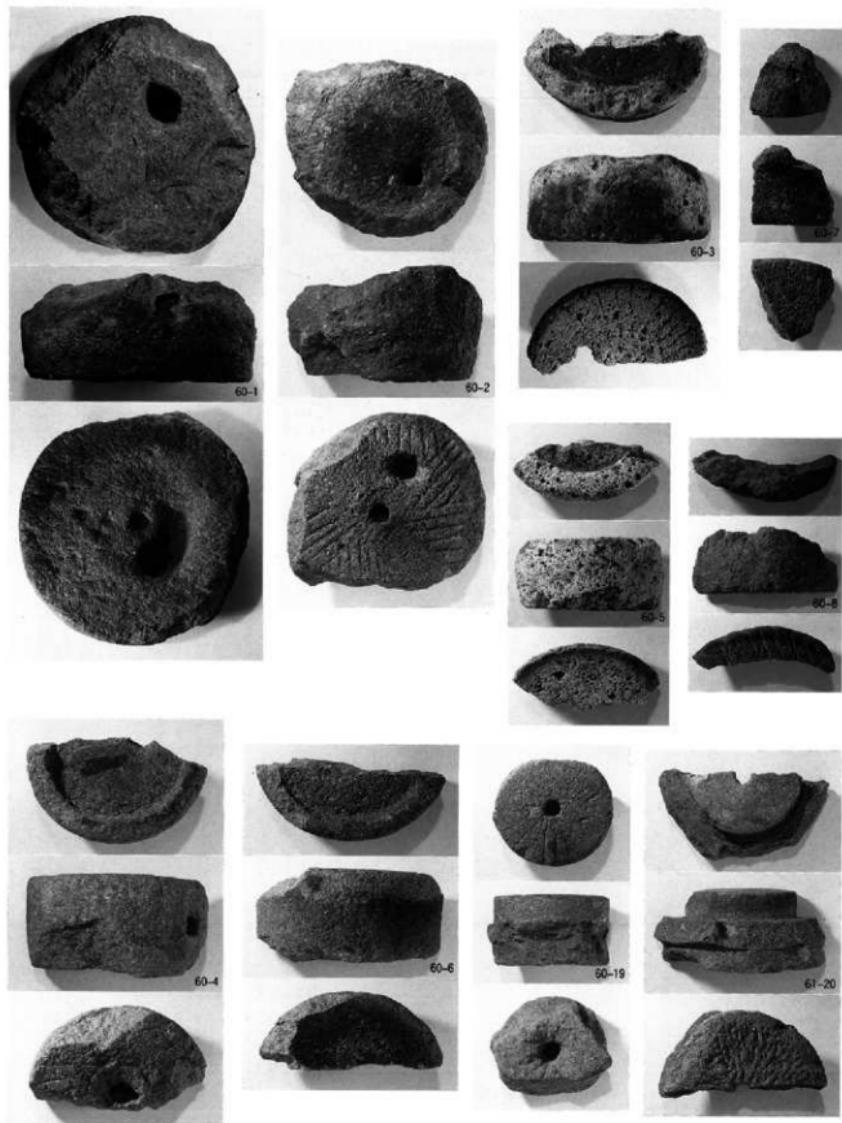
56-43



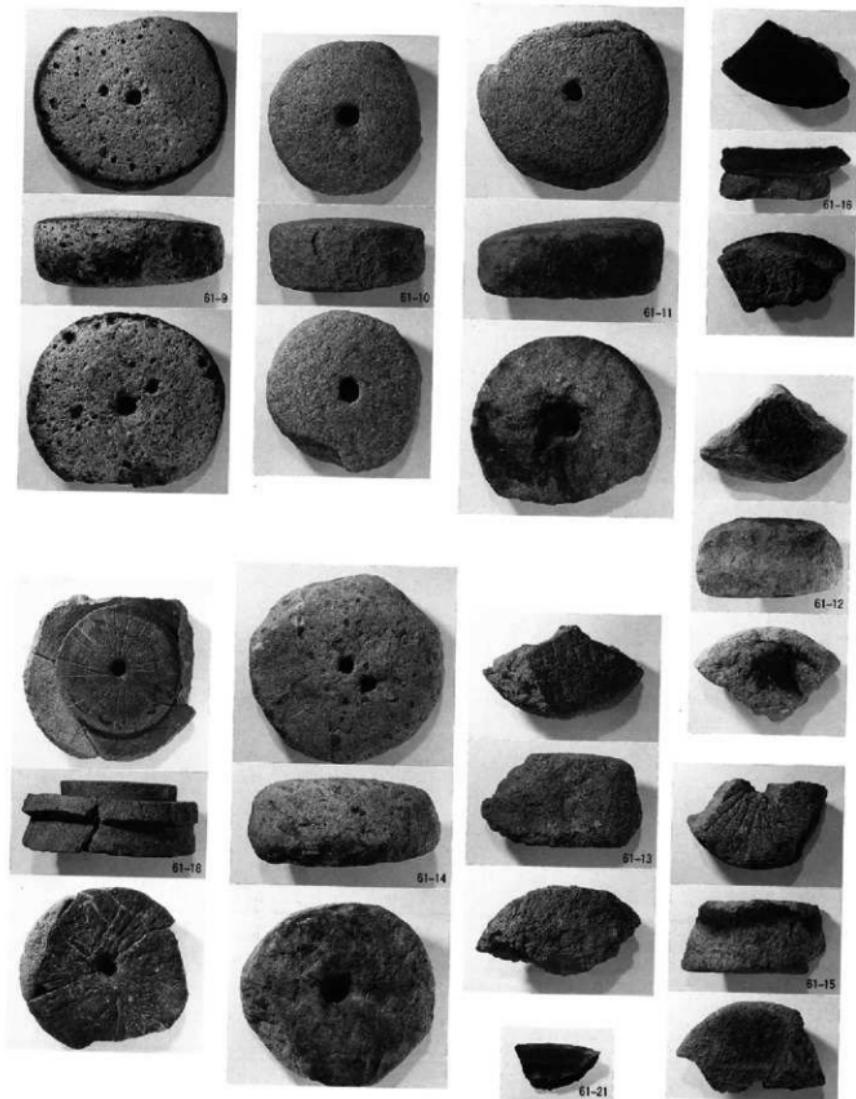
56-51
木製品(2)



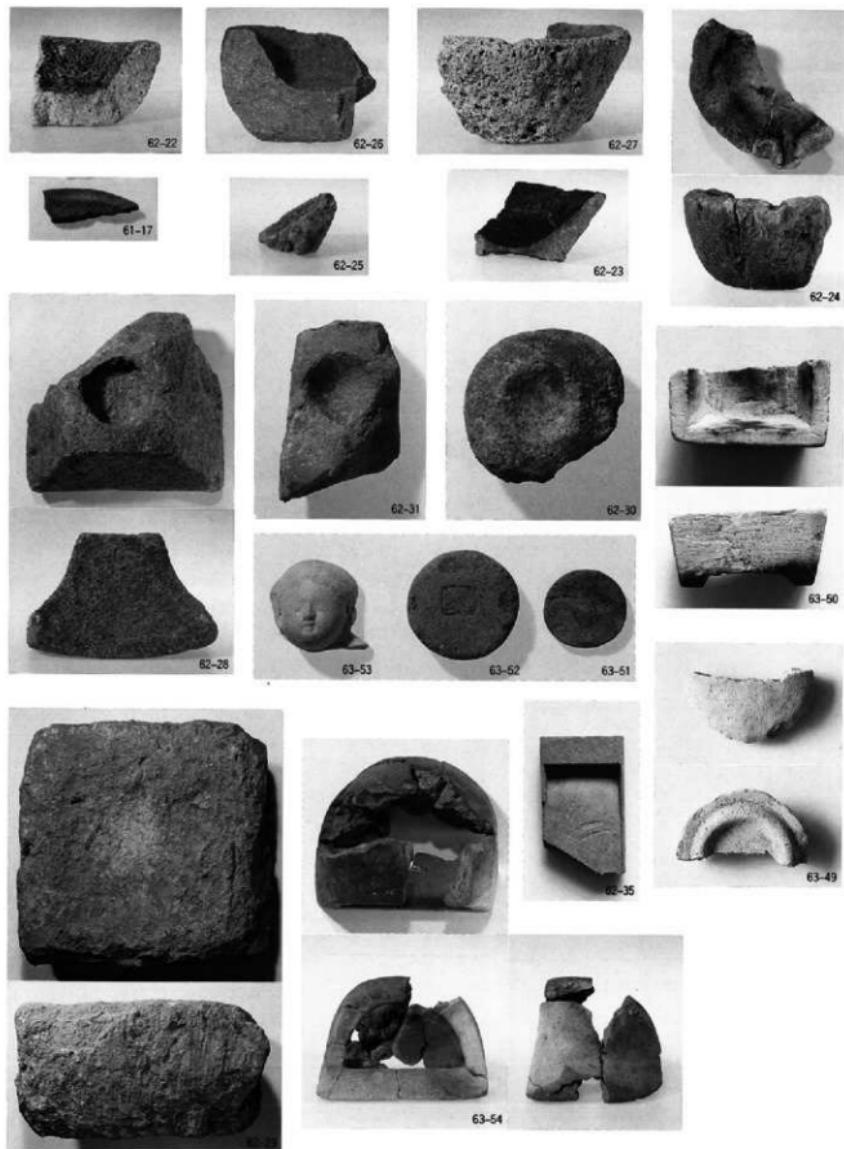




石臼・茶臼(1)

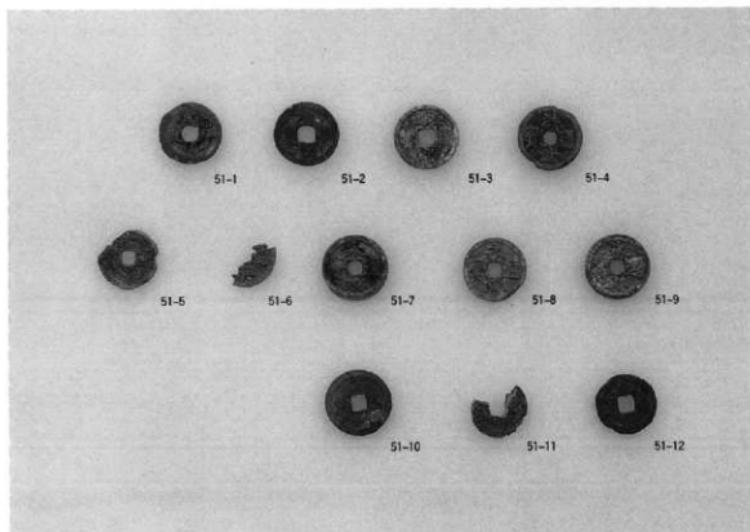
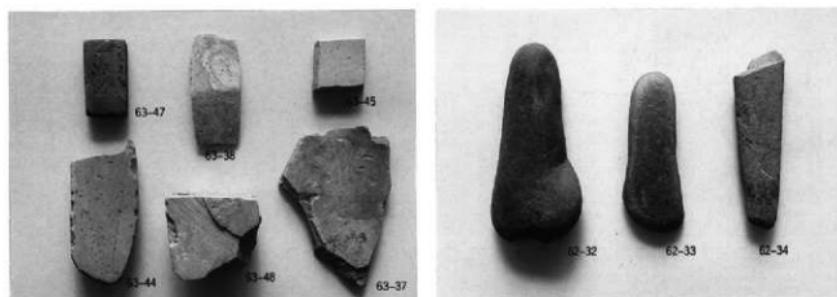
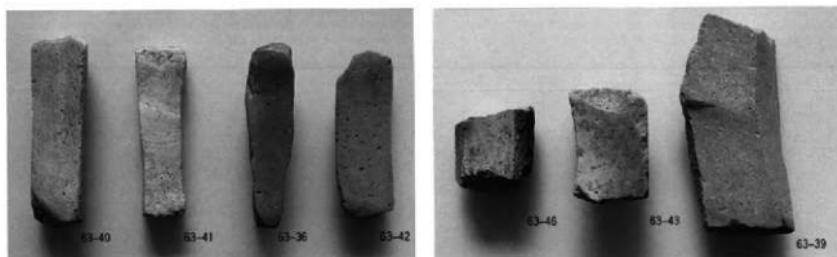


石臼・茶臼(2)



石製品・土製品

図版50



石製品・古錢

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第40集

荒川2遺跡発掘調査報告書

1997年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 (株)大風印刷
